行つて、其所に隙間もなく吊られてあるケンバス製の吊床に乗らねばならぬ、即ち大船に乗つて、猶更にハンモツクと云ふ小舟に乗るのである。

ところが、此のハンモツクなる者は、慣れゝば却つて心地よいが、最初のうちは非常に苦しい。第一これに乗るといふことが、一種の技術と熟練とを要するので、如何なる人も二度や三度は失敗するらしい。自分は豫て部内の人からも聞いてゐたので、内心多少の心配もしたが、さて今夜これから、愈ゝハンモツク入りを始めねばならぬ。

例の次室長は、親切にも自分を連れて、スチヤレージの寢所へ案内してくれた。そして曰く、

「貴下のは、このへへと記してあるのがそれです、向後は此の位置に吊らせますから、忘れないで下さい」

と敎へられた。自分の番號はへへと定められた。後には毛布や、寢衣や、或は食器の類にまで、へへを縫ひつけたり、書かれたりした。

四邊は寂として只鼾の聲ばかり、天井に近く吊つてあるハンモツク、それへ自分は獨力で辷り込まねばならぬ、正に一種の輕業である。最初は兩手をかけて飛込まうとしたが、吊床はぶよぶよ揺いて、安定の位置を保たない。次に片足を入れて見たが、やつぱり顚覆しさうで駄目である。

三度目には、勢よく突入を試みたが、これも天井を走つてゐる電纜に妨げられて、又失敗に終つた。百計盡きて當惑してゐると、十一時の消燈時が來たか、所在の電燈は殘らず消えてしまつた。あゝ今夜は無宿者として、スチヤレージの片隅に、一夜を明かさねばならぬか。

併し人の行ることが、自分に出來ぬ筈はない。柳の枝にも飛びつく蛙はある。よし何度でも繰返して見ようと、度胸を定めてゐる所へ、運よく番兵が通り合せたので、地獄で、佛の思ひ、

「君！　失敬ですが一寸手傳つて下さい、先刻から樣々に工夫をしてゐるが、どうも巧く行かないので……」

と、やゝ泣面になつて賴むと、其番兵は心よく、

「エヽ、初めは誰でも一寸困りますよ、腰を下して手早く體の上半部を伏せ、其上で足を伸ばすやうになさい、寢相の惡い人は、墮ちて怪我をすることがありますから、よくお氣をつけなさい」

と云ひながら、其仕方を敎へてくれたので、自分はホツと一息吐いて、其通りにしてみると、如何にも巧くいつて樂々眠ることが出來た。

併し、ハンモツクと云ふものは、まことに窮屈である。體を仰向けたまゝで、寢返り一つも打てない。萬が一にも、疊の上に寢てゐる氣で、大きく寢返りを打たうものなら、忽ち毛布諸共

に、鐵板の床上に投出されて、脊骨や腰を痛めたりする。

八、日中の疲れでもあらうか、實に愉快に眠つた。夜の引明けまで、前後不覺であつたが、曉方になつて、變に寒さを感じ、少し頭を擡げて見ると、さては一大事、肝腎の毛布が、いつの間にやら床上に落ちて、何一つ被つてはゐない。寒いと思つたのも道理である。

そこで非常な苦しい思ひをして、あとの二三時間は、猫のやうに體を丸めて、辛くも總員起しの令を待つた。（下略）

以上記した如く、私の軍艦生活は、大正二年十二月半から、翌三年二月五日に及んだ。此の間、內地の南西部沿岸、揚子江、旅順、大連から、仁川の上陸に終つてゐる。此の數十日中には、各種の戰技訓練と、海陸に亘る戰跡の見學の外に、艦內の兵器、作業等も、大體の觀察を遂げて多くの體驗を受け、玆に多年の宿志を達成したので、それより愈々本腰を据ゑて、此の經驗を實地に活用せんものと、實は相當の希望を描き、理想を懷いて歸つたものゝ、さて好事魔多しの譬に漏れず、事すべて志と違ひ、折角の志業もこれを伸ばすに由なかつた。

それは他でもない、例の巡戰金剛にからまつて、世にいふシーメンス事件を惹起し、神聖にして緊急を要する海軍擴張の重事は、忌はしき政治問題に化するに至つた。或はこれ何れかの國の、謀略戰にひつかゝつたものか、何れにしても聖代の不祥事として、返す〳〵も遺憾の極みであつた。

かゝる情勢なれば、今は苦心の體驗も　殘念ながらこれを用ふる術なく、加ふるに同年八月より未曾有の歐洲第一次大戰に會し、世相玆に一變して漸く自由主義の橫行時代を描き、舉世滔々享樂の巷に走り、漸く往時の眞面目を失ふ。されば又私としては、こゝらで方向を轉換するのも、或は新たに生くる道かも知れない。そこで小波先生の諒解の下に、潔く陣を退くべく決意し、同年十二月の暮を以て、「少年世界」と「幼年畫報」とを後任者に引繼ぎ、十五年來の編輯部に別れを告げたのである。此の當時「幼年畫報」は、既に九齡を重ね、毎月の發行部數亦六萬五千と稱せられてゐた。卽ち一方に敗れし私は、或意味に於て、一方の勝利者として自ら慰むるに足るものがあつた。

惟ふに漣門の多士幾十輩、不敏私も亦其の末梢に列り、特に他に越えて至大至高の恩寵を忝うした。されば本來より觀ずる時は、恩師の衣鉢を受持堅守して、お伽道に精進すべきであらう。併しながら人各々長短あり、賢愚あり、非凡庸劣あり、況やお伽噺の高峯は、濫りにこれを攀づべきにあらず、思想豐富に、才筆縱橫の者にあらずば、到底一家を成すことを得ぬ。論より證據、明治中期以來小波先生の流風を模せる幾多群小お伽作家の輩出を見たるも、其の多くは中道にして挫折消滅するか、若しくは空しく其の方向を轉換し去り、遂に一人として、能く終始一貫の實を發揮し得なかつたではないか。

殊に況や、かくいふ私の如きは、其の最初よりお伽作家として起たんとする希望も野心もなく、

只飽くまでも小波先生の一助手を以て甘んじ、先生の夥しき著作に對して、聊か犬馬の勞を効し得るを以て、光榮とし且滿足とした者である。

されば或は、見様見眞似に、虎を描かんとして猫にも似ぬ程度のものゝ、作り得ぬことは無かつたであらう。さりながら私は、自らの手腕と力量とを存分に熟知する。而も先生の草稿にルビを附し、且其の校正に當りて、靜思一讀するに及び、各篇に見る構想の靈活なる、其の文章の瑰麗なる巧みに兒童の心境に沒入し、其の趣味を理解することの深き、只幾度か驚歎し、幾度か推服せしめられ、遂に喟然として、「吾能はず」の歎聲を漏らすの外なく、自らお伽噺の筆を折るの已むなきに至つた。而もこれ必ずしも意志薄弱のためではない。實は他に課せられたる、重要の任務あるに因る。

私は雜誌の編輯者である。蓋し雜誌の編輯者は、必ずしも作家たるを要せず、同時に作家必ずしも編輯に適する者のみではない。私は當初よりの編輯者である。編輯といへる煩鎖なる使命を帶べる者が、一面作家として世に立たんとするは、果して當を得たるか否か、若し强ひて兩天秤にかゝるとせば、恐らく何れかの一方に重く、一方に輕からざるを得ないであらう。

私は、「少年世界」の編輯者として、これに全力を傾盡すべきを、當然の義務と信じてゐた。而して其の餘力を、小波先生の著作上の助手として、喜んで捧げ來た者である。されば十有五年の記者生活中にも、何等の目覺しき發展を遂げ得ず、何等の名聲をも揚げるに至らず、平々凡々として終始一日の如く、世にいふ緣の下の力持に甘んじつゝ、殆ど無爲無策に等しく經過した。併し私はこれを幸福とし、且これを滿足に感じた。

勿論、思想乏しく、學才貧しければ、假に作家を志して、所謂名篇佳作を作らんとするも、そは到底及び難かるべく、寧ろ緣の下の力持こそ、最も其の所を得しものとして、感謝せざるを得ないのである。

回顧すれば、編輯者として事を進むるや、一にも二にも、小波先生の意を受け、其の指導の下に全力を盡せるのみ、而も宏量海の如き先生は、獻芹の微衷をだに、これを納るゝに吝ならず、以て其の思ふ所を自由に行はしめ、過あれば自ら負ひ、功あれば他に頒たれし一事の、生涯不忘の光榮として永く銘記しなければならぬ。

第四章　忘れ得ぬ人々

「少年世界」記者生活十有五年の間には、該雜誌を通じて、多數先輩の庇護提撕を蒙り、以て蒙昧の頭腦を啓發せられしことは、蓋し甚だ少しとせぬ。而も今日、これ等先輩の大部分は、既に殆ど世を易へて、其の溫顏に見ゆるを得ぬも、私としては、其の總てが恩人であり師父であり、永く尊敬を捧ぐべき人々である。

勿論、私の今日あるを得しめたるは、小波先生の賜なること固より云ふまでもなけれど、同時にまた、異なりたる意味に於て、扶掖の勞を惜しまれざりし幾多先覺の値遇に對しても、生涯不忘の喜悅として感謝を捧げねばならぬ。只本書紙面の關係上、單に其の一小部分にとゞむるに過ぎぬことを憾とする。

第一節　八代海軍大將

日露戰爭の初頭、春淺き仁川港外淺間の艦橋に敵艦を睥睨しながら、擊ち方始め！　の號令を下さんず寸前、徐に平生愛用の一管を口にして、千鳥の曲を吹奏し、風流艦長の名を馳せた人、若し海軍大將たらずんば、東海唯一の俠客たらんと豪語せし人、其の大尉時代、露國駐在武官の任滿つるや、雪の西比利亞を踏破し横斷したる人、さては日本海々戰の直後、露國の降將に對し、東鄕司令長官の面前に通譯の快辯を揮へる人、金鵄勳章の年金を擧げて淺間乘員白石少佐以下、逝いて歸らざりし旅順閉塞隊員の遺孤を惠める人、これぞ八代大將其の人であつた。

私は大正二年の春、當時少將にして海軍大學校長の職に在る閣下を、赤坂新坂の私邸に訪問したのが、抑もの初對面であつた。而も私の海軍研究は、實に此の時より發足したのである。

少將は尾張國犬山の在、樂田村の人、本姓を松山といつた。はじめ江戸幕府の末の頃、山梨の八代逸平なるもの、武田耕雲齋の一味に加はり、筑波山に旗を擧げて海道を下る途中、思ふ所あつて樂田村に身を退け、農に歸して塵世を避け、六郎少年を養うて家を嗣がせた。これぞ後の俠將八代六郎其の人である。

私は曾て八代閣下の少年時代をきいて、これを「少年世界」に掲載した。その時閣下は私の草稿に對し、一々眞書の朱筆を以て、克明に訂正補加せられた。其の原稿は今も私の藏本として殘つてゐる。

加藤高明、坪內雄藏、八代六郎の前途有爲の三青年が、尾張藩の選拔學生として東京に上つたの

八代海軍大將

は、いつの頃のことであつたか聞き漏らしたが、兎もあれ此の三秀才は、各〻其の志す道を異にし、一は政界に、一は文藝界に、そして一は海軍々人として身を立つるに至つた。而も三者の友好關係は、晩年に至るまで最も緊密に保たれて行つた。それかあらぬか、加藤内閣の生まるゝや、八代中將は推されて海相の任に就かれた。

さて私として、閣下に親炙したのは大學校長時代の約半年間であつた。何か事あれば必ず電話で呼ばれるので、幾度となく飛んで行つた。それから間もなく中將に昇進して、舞鶴鎮守府司令長官として赴任せられたので、私も新橋驛までお見送して、簡單ながら祝詞を述べると、閣下は機嫌よく擧手の禮を返して、

「ヤア、君に頼まれた原稿は、校長机の中に置いて來てしまつた。送らう〳〵と思ひながら、たうとう其の機會を失つて濟まなかつた。併しもうすつかり訂正濟だから、明日にも大學校へ行つて、關田(駒吉)中佐にさう云つて出して貰ふがよい」

發車間際の、見送人でごつた返してゐる中にも、これだけの責任を果される閣下の心構は、沁々感じさせられた。この見送人の中に、平服の偉丈夫が混つてゐた。これは誰あらう、日露戰爭時代の第二艦隊司令長官上村大將であつた。歩廊に立つた一同は、上村大將の發聲によつて、八代中將の萬歲を唱へた。出てゆく汽車の煙を名殘惜しく思つたのは、私ばかりでは無かつたであらう。

舞鶴から、海相になり、更にそれを辭して、暫く東都の黑谷に靜養せられたこともある。其の當時の書簡の一つに、「肅啓玉章拜受、圖書目錄頂戴、御厚情奉感謝候、退京前拜見の機を得ざりしは、殘　至極に候。當地眞に閑靜、修養には好適地に御座候。御西下の折も候はゞ御立寄被下度候。茶なりとも參らすべく候。茶と申せば、當地の水が茶に適する由にて、茶味は東都に覺えざる好風味に御座候。先は拜書御禮申上度如此御座候。敬具、八月念五、六郎」

八代大將の翁筆

かくて一兩年過ぎて後、私は又黑谷の里に、三浦周行博士を訪れたことがある。古伽藍の大廣間

を見るやうな、だゞつ廣い家であつた。黒谷の名は、私にとつて忘れ難い所なので、話の序に、

「この附近に八代大將が住んでゐられましたが、どの邊だか御存じありますまいか」

と訊ねると、三浦博士はびつくりしたやうに、

「ホウ君は八代さんを知つてゐるのか、實は今、我輩の住んでゐるこの家が、卽ち八代さんのゐられた所だ」

と、さも案外らしい樣子であつた。又そんなことが話のきつかけになつて、三浦博士との交渉も、すら〳〵と運んだこともある。

それから間もなく、八代閣下は第二艦隊司令長官になられた。その當時は赤坂の榎町に住んでゐられた。大臣の時代とは異つて、幾分お暇も有りさうなので、或日曜日にお訪ねしてみると、幸ひにも御在宅で、

「この頃は、ベルグソンの哲學を讀んどるが、なか〳〵面白い、君も一度讀んで見たらどうか」

と、そんな話も出た、私はそれはそれとして、

「閣下！　明日艦隊へおいでになる時に、御同行を願はれませんか、實はまだ巡戰を拜觀したことがありませんので、是非內部を見せていたゞき度いと思ひます」

「よろしい、では明日の十時から十一時頃まで、横須賀驛で待つてゝくれ、今からはつきりした時を決めかねるから」

その頃第二艦隊の旗艦は榛名で、丁度横須賀の沖合にかゝつてゐる。金剛を見損なつた私は、それと同型の艦を是非見たかつたので、翌朝横須賀へ行つて驛に待合せてゐると、間もなく閣下はやつて來られたので、一緒の水雷艇に乘ることが出來た。

但し此の日は運惡く、相當ひどい時化で、榛名のかゝつてゐる邊は、殆ど濛々たる煙霧に閉されて何も見えない。この水雷艇には、榛名艦長布目（滿造）大佐（日本海々戰畫の中、三笠の橋艦に蹲んで海圖を見てゐる人）も、亦同乘してゐられ、態々閣下より紹介せられた。艦長は沖合を見ながら、

「今日は相當かぶつてゐますよ」

と云はれた。實は私も聊か尻込せざるを得ない、それといふのは、榛名の舷梯に着いた時は、長官、艦長、そして私といふ順序で上艦するのだから、どうしても後になる者が、苦しい思をしなければならぬ、かういふ事は淺間時代にも、時々出つくはしてゐる。

ところが好都合に、右舷の方には、案外波も立たなかつたので、足を辷らせる危險もなく、樂々と舷梯に飛び移ることが出來て、其のまゝ長官室に行くと、閣下はどつかと椅子にかゝつて、

「我輩の倉事は用意してあるが、君は麵麭と紅茶とで我慢して呉れ」

と、氣の毒さうにいはれた。併し私はそんな事はどうでもよいので、取敢ず內部の拜觀を申出る

と、

「まア、ゆつくりするがよい、先づこれを見い、この室の空氣採りは、寒溫の調節が巧みに出來る、此方を開けると溫いのが入つて來るし、ソラ、此方は寒いのが入つて來る仕掛けだ。つまり夏と冬とで、室内の溫度を適正にする譯さ」

「なるほど、これではお宅にいらつしやるよりも、ずつと好いですね、室の飾りつけといひ、何かといひ……」

と、串戲を云つてる内に、もう電氣釦を押されたと見えて、副官らしい一將校がノックして入つて來た。

「この客人に艦内の案内をするやうに、十分に見せて上げてくれ、濟んだら又此方へ……」

それから私は詳しい説明を聞きながら、上甲板から中甲板へと、巡り巡つて見た。何しろ淺間の三倍もあらうと云ふ大艦とて、どこをどう歩いたのやら、殊に型式が異つてゐるので、一度位ではさつぱり判りさうもなく、只久しぶりに、足の疲れを覺えたのである。

第二節　黑井海軍大將

軍艦淺間以來、一方ならぬ御庇護を受け、時としてはこつぴどく叱られもした。併しそれは親切からのお叱りだけに、其の都度私は人間らしくもなり、且亦次第に閣下との親しみを加へて行つた。

練習艦隊が亞米利加から歸つて、其の任務を終ると間もなく、閣下は、馬港要港部司令官として、澎湖島の任地に出發せられることゝなつた。其の前夜、たしか大正三年の秋であつたと思ふ、御親戚の鹽澤幸一中佐(後の軍事參議官鹽澤大將)と、(海軍教授)細川源三郎氏と、そして私とが、黑井邸の居間に招かれて、ジヤア鍋(牛鍋)をつゝきながら、一宵を語り更かした。

其の時閣下は、

「今度ゆく澎湖島は、何分瘴癘の多い土地だから、後のことは君たち三人に賴んで置く。さ、今夜はゆつくり飲んでくれ給へ」

と、いつになくしんみりした調子で語られたのは、今も私の記憶にはつきり殘つてゐる。

其の翌年の秋、澎湖島から歸つたと云つて、早速私のところへ、南京豆二升ばかりと、貝殼製の盃洗とを下された。そこで早速白金の邸にお伺ひすると、

「イヤ、留守中はいろ〳〵有難う、澎湖島には何も無かつたよ、只面白いことに、鷄なんぞ骨まで黑いのだ、それに年中風波が强くて、本島との間を往來するのも相當の苦勞だ、ところで丁度よいさアこれから久しぶりで、大和田の鰻を食べに行かう」

と云はれるので、遠慮なく後からついて、麻布の狸穴へ行くと、こゝは久しい前からのおなじみ

で、さういへば曾て佐世保に碇泊中も、艦長（平賀大佐）と共に、同地の大和田へ行くとて、艦内隈なく私の所在を捜されたさうだが、何所にも見當らなかつたといふ。それも其の筈こそ、私は既に單獨で上陸して、長崎見物に行つてゐたから……歸つて見ると司令官は不機嫌さうに、

「何所へ行つて來た？　折角大和田へ誘はうとしたのに、何所にも居ないと云ふので、さてはてつきり軍艦がいやになつて、脱走したものと思つてゐた、怪しからん奴だ」

と、散々に油を絞られたが、かういふ時には辨解無用と、頻りに頭を下げたもので、そこも大和田、こゝも大和田、不圖往年のことを思ひうかべて、をかしくて堪まらないので、一人で笑顔になつてゐると、わけを知らない閣下は、

「何か面白いことがあるのが、さう〳〵、君は食ふ方よりも飲む方だつたな、よし、それなら酒の肴を貰はう」

と、別に刺身を誂へられた。

それから又暫くして、或日電話で以て、

「オイ〳〵、今から築地の長崎料理に行くから來いよ、其の家はこれ〳〵のところだ」

と、お誘ひを受けたので、大急ぎで飛んで行つた。そこは何でも瓊の家とか云ふ店で、やつぱり佐世保以來のお知合とか、先方でも大變な歡待ぶり、私は小さくなつて大きに恐縮した。

話は代つて、閣下の横須賀工廠長時代、丁度工廠開廳何十年目に當るとかで、此の機會に一基の記念碑を建てることになり、其の碑文の草案を誰に頼まうかと、先づ相談があつたので、

「それならば横須賀機關學校の教師に、淺野憑虚　和三郎、後に邪教に凝つた人）といふ文學士がゐます。文章もなかなか上手ですから、淺野氏に御相談なされては……」

と、お答へをして置いた。

すると程なく、

「書くには書いて貰つたけれど、どうも少し和かすぎる、物が物だから、もつと莊重な文章でなくては困る、誰か適當の人はないか、もう一度考へて呉れないか」

と、かういふ話であつた。そこで私は一考して、

黒井海軍少將と著者

「大町桂月氏に理由を話して、出來るだけ莊重に書いて貰ひませうか」

「さうだな、前のを原案にして、思ひきつて訂正して貰ふもよからう」

と、即座に賛意を表せられたので、私は桂月氏に理由を語つて入念に訂正して貰つた。

それから幾許もなく、當の桂月氏は支那旅行の序に、旅順の戰跡を巡覽せられたが、恰も其の頃黑井閣下は、旅順要港部司令官として該地にゐられるので、私は桂月氏の出發間際に、

「若し旅順にお越しでしたら、黑井司令官を訪問なさい。先年横須賀工廠の建碑以來、貴方の名を記憶せられてゐるし、屹度便宜を計つて下さるでせう、私からも序に其の旨を報告して置きます」

と、勸めたこともある。其の後黑井閣下は、舞鶴へ轉任になつたが、或時私に向つて、

「イヤ、大町といふ男は、誠に愉快な人物だ、俺の所へやつて來て、是非閉塞隊の最期の地を見せて呉れ、傍まで行つて見たいといはれる、それはお易いことだが、今日は生憎海上も荒模樣で、却つて御迷惑だらうから、他の日になさつてはと、云ふのを大町氏は首をふつて、それもさうだが、閉塞隊の本當の氣持を味はふには、かういふ日の方がよい、是非舟を出して貰ひ度いといはれる、それならばと、同氏の希望のまゝに、要港部の汽艇を出してやつたら、やゝ暫くして歸つて來て、何と云はれるかと思ふと、イヤ、實に有難かつた、お庇で閉塞隊員の苦心を味はふことが出來て、洵に尊い體驗をした、有難い〳〵と、心から謝禮を述べられた、其の勇氣は實際見上げたものだ」

と、こんな話をして、大いに桂月氏の行動を褒められた。

黑井閣下の旅順要港部在任は、二ケ年の長きに亘つた。この間殆ど月に二度位つゝ、書信の往復を缺かされなかつた。いろ〳〵の書物の註文を受けたり、此方からも時に支那產の織物をお願ひしたり、內地にゐられる時と同樣に、親密のおつき合を續けてゐた。

丁度其の頃、旅順の女學校敎師に、繪畫の上手な人があつて、それに依賴して「假名書四書」の挿畫をかゝせ、後日其の畫を示されて、

「これはなか〳〵よく描いてあるが、此の畫に合ふやうに、適當の文章を書いてくれる人はないだらうか、君の方で然るべき文章家を考へてくれ」

と云はれる。この「假名書四書」は、國定敎科書にも載せられた有名な美談で、現に私が閣下の談話をきいて、或雜誌に揭げたものもある。試みに其のまゝそれを引用して見よう。

前略。一體私の家は、奥州米澤の上杉家の藩中である、上杉の家筋は例の謙信公に起り、其の死後景勝の代になつて、會津百二十萬石を領し、威勢甚だ盛んであつたが、關ヶ原合戰の時に石田方に味方をしたので、出羽の米澤に移され、三十萬石に減らされて了つた。百二十萬石から三十萬石、即ち收入が三分の一になつた事とて、殿を始め家來達の困難は並大抵でなく、武家の妻や娘はそれ〳〵內職を勵み、或は羽織の紐を編むとか、機を織るとかして、漸く一家の

生活を助けたもので、其の習慣が後々まで傳はつて、米澤の婦人は手仕事に堪能であると云はれた。

さて、私の祖母繁乃は、家つきの娘で、同藩湯野川某の三男源三郎を養子に迎へ、其間に生れたのが私の父信藏である。ところが不幸にも祖母が二十歳の折に祖父は病死した。それで祖母は母（即ち私の曾祖母）と、我が子信藏と三人生活で、僅の扶持米によつて暮しを立てたが、其困窮さは想像も及ばぬものであつたといふ。

寡婦の手一つに、貧窮の中に育つた私の父は、やがて六歳になり、隣家の糟谷といふ武家へ四書の素讀に通ふことになつた。昔小學校が無かつたから、藩の子弟は皆四書の素讀から習ひ始めたものである。

然るに私の祖母は、元々婦人の身で、四書五經の稽古をしたことがない。それで私の父が糟谷先生から教つて來たところを素讀して、つかへたり讀み違へをしたりしても、教へ導くことが出來なかつた。これでは困るといふので、私の父には知らせないで、塀の外まで漏れる先生の聲をきゝながら、いろは假名で、一字一句も漏らさず半紙に筆記した。それは殆ど毎日の仕事で、やがて大學から中庸、孟子、論語と進んで、四書全部を二年間で筆記し終つた。

父は、自分の母がこんなに苦心して書綴つたことは少しも知らず、自分の忘れた章句があつて、一寸讀みつかへると、母は機を織りながら、例のいろは四書によつて、直に教へたので、父はいつもすら〳〵と讀み下すことが出來るやうになつた。

かくて父が成長して後、或日壁を張らうとして古い箱の中を探すと、一束の書類があつて、母の自筆の四書を發見したので、其わけを訊ねると、「私は無學で其方を教へることが出來なかつたので、いろはで書いて、教へる材料にした。其樣なものを保存して置くと、母の恥になるから、燒き棄てゝしまひなさい」と云はれた。併し父としては、何としてもそれを燒き棄てるに忍びなかつた。

母が苦心の手の迹を見るにつけても、かくまでして自分を育てゝ下されたか、忙しい家事や內職の暇々にこれを筆記するといふ努力は、並大抵のことではない、一日も早く我が子の學問の上達するやうにと、深い慈愛心の發露に他ならぬ、今日多少の學問が出來、人並の行ひの出來るのも、全く母の薫育の賜である、これに酬いるには、如何したらよいか、何に依つて母を安心させようかと、父は感涙に咽びなから、さう考へるのであつた。

其結果、父はすべての贅澤を排し、生涯の間、禁酒禁煙を實行した。尤も正月とか五節句とか、又は家庭內の祝ひ事の場合には、來客に勸めるのを惜しまず、儀式は嚴格に守つたが、自分だけは何處までも、禁酒禁煙を勵行し、簡素の生活に終始して其一生を終つた云々（談）

これが「假名書四書」の由來である。此の話をせられた時は、流石にいつもの元氣に似ず、しんみりと聲を潜められたことを覺えてゐる。そこで私も考へて、

「それには、武島羽衣氏がよからうと思ひます。國文の名手として、天下に知られた人で、現在は女子大學に教鞭をとつてゐられます」

かういふと閣下は、我が意を得た如くに頷いて、

「いかにも、武島さんならよからう、早速頼んで見てくれよ」

との話なので、私は又知人に依頼して武島氏に渡りをつけ、莊重な名文を書いて貰つて、それを持つて行くと、二三度繰り返して讀んだ上で、

「これはよく出來てゐる、見事な作だ、有難い〳〵、畫と文章とが揃つたから、早速卷子に仕立てさせて、永く家に保存しよう」

と、心から滿足を表されたので、私も大きに面目を施した。かういふ風に黑井閣下は、何かにつけて私如き者にも、細大となく相談せられたが、此方からもつい圖に乘つて、隨分無理なお願を提出することもあつた。さういふ場合いつの時も、又いかなる事でも、大概はよし〳〵と心よく引受けて、親切に面倒を見て下された。

また或時、「明日午前九時頃に君の家へ出向く」といふ通知があつたので、心待ちに待つてゐると、豫定の時刻を過ぎても來られない。これは多分順路を取違へられたのかも知れぬと、私は小さい娘の手を引きながら、代々木驛の方面へお出迎にいつた。その頃私は代々木山谷に住んでゐた。

かくて千駄ケ谷の小路の坂道まで行くと、閣下は其所に佇んだまゝ、參謀本部の地圖を展げて、じつと考へ込んでゐられた。

「閣下！　お迎ひに參りました」

と、少し距つた所から聲をかけると、

「これは〳〵、態々恐れ入つた、大分番地が近くなつたので、今、地圖と相談してゐた」

「こゝからまだ一寸ありますよ、さアどうぞ」

と、先に立つて御案内申上げた。此の時の閣下の服裝は、紙撚の羽織の紐に袴を短く穿き、太緒の駒下駄を引つかけて、手に土產物の風呂敷包を下げた恰好は、よく云へば西鄕隆盛の再來、惡くいへば田舍の村長さん程度であつた。

それから兩三年後に、私は又代々木初臺に移轉した。練兵場に近かつたせゐか、こゝへは時々馬に乘つて來られた。馬の時は、流石に颯爽たる偉丈夫であつたが、或日飄然と、片手に鹽引の鮭をぶら下げ、雪袴（もんぺ）を穿いて、のこ〳〵入つて來られた。末の子供が見つけて、

「お父さん！　變な爺さんが來たよ」

と云ふので、誰かと思つて出て見ると、案外にも黒井閣下なので、これは〳〵とばかり、急いで四邊を取片づけて請じ入れると、

「今日北海道から鮭が着いてのう、早く食べさせ度いと思つてぶら下げて來たよ」

と、無造作に其の場に投げ出されたこともある。

兎も角軍艦生活が緣となつて、それ以來二十餘年の間、閣下は澎湖島と旅順口とに三年ばかりゐられた以外、大部分東京に住まれ、自然私も頻繁にお目にかゝつた。そして此の間に頂いた手紙の數は、少くも五十通以上に達した。これは小波先生に次いでの多數である。

一ばん最後は、昭和十二年四月に、かねて編纂に參與せられた山本（權兵衛）大將の傳記が漸く完成に近づいたに就いて、其の卷頭に掲げる序文を二三種類送つて來られ、「この中でどれが最も適當か、公平な目で選んで貰ひ度い。惡いところはどんなにでも直して呉れ、何分出版の期日が迫つて居るから大急ぎで」と云ふ意味の手紙である。

私は其の時京都へ行つて居たので、歸るなりそれを拜見して、失禮とは思つたが、二三ケ所に朱を入れて、大急ぎで持參に及んだ。ところが其の日は丁度天長節で、夫人がお出になつて氣の毒さうに、

「態々お越下さいましたが、今日は宮中に參賀に出向いてゐて、少し遲くなります」

とのお話であつた。私は序文の草稿を夫人にお渡して、又の日を期して立歸つた。

ところが、何ぞ知らん、其の日閣下は宮中を退下せられて、自邸の庭の草掻り最中に、突如として薨去せられた。想へば前年の落馬の祟であらうか、訃報を目にした私は慈父に別れた思ひで、只愕然呆然たるばかり、急には一語をも發し得なかつた。

平素、强健そのものゝ如き閣下は、一年程前に大病に罹られ、生死の境を彷徨する程の大手術を施された。而も全快の後には又常の如く、

「たうとう膽囊を除去してしまつたよ、順天堂の佐藤君が、俺の所へ來い、見事にとつてやるから」と云ふので、惜氣なくすてゝしまつた、それから後はおかげで疼みも忘れて非常に樂になつた。或日友人が見舞にやつて來て、膽をどうした、病院にくれてやつたのか、惜しいことをしたな、生膽は高價なものだよ、實は俺も膽囊炎で困つてゐるから、明日にも知合の病院で、膽拔取り術をやらうと思ふが、取つた膽は只ちややらぬぞ、それで入院料も手術料も、立派に濟まされるからなアと、大笑をして歸つた。ところが其の男は手術後の經過が思はしくなくて、たうとう死んでしまつた。つまり膽囊を除去するといふことは、非常な手練を要するさうだ、兎も角此の分では、八十九十まで生き延びられるに違ひないぞ」

と、元氣一杯で話されたことがあつた。併しかういふ大手術といひ、或は落馬の負傷やらが原因

になつて、思ひの外に早く亡くなられたのではあるまいか、何れにしても私としては、大恩人を亡つて、少からず心の淋しさを感じた。

第三節　平賀海軍少將

淺間艦長平賀大佐には、私が同艦に便乘した當日に、はじめて面識を得たのである。一見溫厚篤實そのものゝ如き君子人で、何所から見ても武人型は微塵も無く、寧ろ教授とか博士とかいふ風格の持主であつた。

初夜巡檢が濟むと、ボーイに託してメモを屆けられる。そして其の紙片には、いつも「ケビンに來れ」と、簡單に記してあつた。最初恐る〳〵、ボーイについて公室に行くと、艦長はもうすつかり服裝を更めてゐて、

「碇泊中は暇だ、一杯飲まうや」

と、棚の隅から一升瓶を取り出し、湯呑についでそれを呷りながら、或は日淸、日露戰爭時代の思ひ出話や、米國大使館附武官の時代に、洋鬼をへこました話などを、重々しい口調でぽつり〳〵と話された。

內地航海を終つて、淺間は橫須賀に入港した。そこで私は靑山師範橫の艦長邸へ御機嫌伺ひに行つた。艦長は私のために、いろ〳〵の料理を調へて待つてゐられた。其の席上、何かの話の序に、

「淺間もいよ〳〵近日遠洋航海に出かけることになつた。布哇から、北米沿岸を一周して、アリューシヤンまで廻つて來る豫定だ、君も一緒に行かれるとよいがなア、ところで僕は前々から、觀世音を信仰してゐるが、よい御像はないだらうか」

と、こんな質問を出されたので、

「それは初耳ですが、一體全體どういふ機緣で、觀音信者になられましたか」

と、先づ此方から訊ねると、それはかういふ理由である、何でも艦長の母堂のまだ若かつた頃毎晩續けて同じ夢を見られた、古い石造の觀世

淺間艦長室の平賀大佐

平賀海軍少將

音が、故郷の廣島在の小さな溝の橋代りになつてゐて、毎日通行人の土足に踏まれてゐるといふ、世にいふ夢告があつたので、念のために其の溝の石橋を剝ぎ起して見させると、果して石の裏側に觀世音の像があり〳〵と刻まれてあつたので、早速きれいに洗ひ清め、小さな御堂を建てゝ安置せられたといふ、何だか日本靈異記にでも有りさうな、摩訶不思議の因緣話であるが、これは實際の話で、それ以來平賀大佐は、心から觀音を尊敬してゐられるといふ。

此の一條の由來をきいて、私は大いに感に打たれた。

「よろしい、少し心當りもありますから、手頃なのを一體献じませう」

と約束して歸つた。それから早速手を廻して、知人の許にある子育觀音像を申受け、これを淺間に持參に及ぶと、艦長は一見頗る大滿足で、早速壇の上に安置して、じつと見詰めながら、

「これは有難い、結構な御像だ。艦の木工に賴んで、適當の臺座を造らせよう」

と、頻りに喜んでゐられた。かくて此の觀音像は、淺間のケビンに飾られたまゝ、遠洋航海の守本尊となつた。

やがて其の年の秋に、練習艦隊は長途の航海を終つて、恙なく横須賀に入港したので、私は又曾ての舊友達に會ふべく淺間を訪れ、先づ艦長室に出向いてみると、例の觀音像を指しながら、艦長は常に變らず機嫌よく迎へられて、

「イヤ君に貰つた此の觀音が、大變な評判になつて、彼方此方で其の由來因緣を訊ねられたには、少からず閉口したよ、我輩の友人が航海の安全を祈るために呉れたもので、別に何の由來もないと答へたが、彼方の新聞にまで書き立てたものだ」

と、至極滿足の體で、更めて挨拶を受けた。

それから間もなく平賀大佐は、巡戰生駒の艦長に轉じ、單獨にて南洋方面に、索敵行動を續けられたが、程經て他の諸將星と共々、凱旋入京の報が新聞に見えたから、早速靑山へ伺つて見ると、床の間の觀音像が、見違へるばかりにピカ〳〵光つてゐる。

「大層うつくしくなさいましたネ、お洗ひになりましたか」

「うム、あんまり煤けてきたないから、留守の間にすつかり化粧をさせた」

と、やゝ得意の樣子である。そこで私は知つたかぶりに、

「洗つちや駄目ですよ、元のまゝの煤けたところに價値があるぢやありませんか」

串戲まじりに云ふと、艦長は思はず頭を掻きながら、

「さうか、そりや失敗つた、早く敎へてくれゝば其のまゝにして置くのだつたに、餘計なことをして馬鹿を見たな」

それから大佐は暫く本省にゐられたが、間もなく病氣のため一時休養せられることゝなり、隨つ

て又お會ひする機會も多くなつた。

ある時友人の佛畫師が觀音畫像の頒布會を催した。そこで早速平賀さんに入會を勸めると、直に一口申込まれたから、其の發會の當日には、また誘ひ合せて神田の南明倶樂部に出向いた。

會場の一室には、お定まりの緋の毛氈を敷いて、五六人の席畫師が並んでゐた。平賀さんはそれに興味を感じて、色紙や扇面を澤山買ひ込んで、いろ〳〵の畫を描かせて悦んでゐられた。兎角する內に夕景近くなつたので、一先づこゝを切上げて、日本橋の末廣本店に案內して鰻腹食べた後、銀座の露店を冷かしながら、德利や皿などを買つたりして、たうとう新橋まで歩いてしまつた。

すると平賀さんは、不圖立止まつて、

「オイ、君は自動車に乘つたことがあるか」

と問はれた。その頃はまだ自動車の珍しい時代で、私はまだ一度も乘つたことがなかつた。

「イヤ、まだありません」

と答へると、平賀さんは我が意を得たやうに、

「さうか、それでは靑山六丁目まで乘らう、澁谷まで行くと損だから六丁目で下りるよ、君は電車で澁谷へ出たらいゝだらう」

「エヽ、結構です、さうしませう」

と云つた。それから二人は、自動車の中で、席畫の批評をしたり、德利をいじり廻してゐる內に、もう六丁目へ來てしまつた。

その頃私の代々木の家の近くに、大仁堂といふ指壓療治の醫院があつた。何所で聞かれたか平賀さんは、一週に一度づつ其所へやつて來られた。そして療治の濟んだあとに、よく私の家へ立寄られた。ある時のこと、

「どうです、一度神樂坂へいらつしやいませんか、うまい物がありますよ」

と、誘ひをかけると、二つ返事で、

「そりや面白い、いつでも行くよ、大いに又談じるかね」

間もなく或日の夕方に、私のゐる神樂町の店へ來られたので、直に連れだつて末よしに行き、さかんにメートルを上げたこともある。

ところが平賀さんの病氣は、その後段々惡化して、どつと床に就かれたと聞いて、早速お見舞に伺ふと、昔日の面影もなく窶れ果てゝ、苦しさうに咳き込んで居られたが、それでゝ態々枕をもたげて、

「よく來て呉れた。かうして臥てゐても、今一度食べてみたいと思ふのは、いつぞや君に連れられて行つた、ソラ、あの日本橋の鳥料理さ、あの味ばかりは忘れられぬなア」

と、淋しさうに述懐せられるから、私はそれを慰めて、

「今に、よくおなりでしたら、是非もう一度御案内いたしませう、そんなにあれがお氣に召しましたか」

と、こんな話をしてゐる間も、何となく息苦しさうに見えるので、長居してはよくないと思ひ、後日を約してそのまゝ引退つたが、それから幾程もなく、大船の轉地先でたうとう亡くなられた。僅に少將になつたばかりで、充分に手腕を揮はずに早世せられたのは、まことに惜しいことであつた。聞けば平賀さんは、兵學校時代に、彼の加藤寛治大將と、いつも席次を爭つた優等生であつたとやら、壽命さへあれば、大將にまで昇られたであらうに、返す〳〵も遺憾至極である。今年なくなられた東京帝大總長平賀讓氏は、玆にいふ平賀さんの令弟である。

第四節　今井海軍少將

横須賀海兵團長今井兼胤大佐は、稀に見る痛快な豪傑型であつた。海兵團に團長を訪問したのは前後只三回に過ぎなかつた。けれども其の印象は、今も猶ほはつきりと殘つてゐる。

かねて關機關少將から、紹介狀を頂いてあるので、先づ戰艦香取に眞田副長を、次いで港務部に森（義臣）大佐を訪うて、それ〳〵用務を果した。香取では、村上機關長の案内で、機關室の油に光る鐵梯子を、おつかなビクビクで、膽を冷して上下したり、港務部では、部長用の汽艇を出して貰つて港内を一巡したりして、相當の時間を費したので、晩春の日（大正二年五月）の日永ではあれ、海兵團へ出向いた時は、午後三時を少し過ぎてゐた。

こゝは流石に營門の出入も嚴しいので、先づ門側に立つて、衛兵に來意を告げると、やゝ時を經てやつと通門の許可があり、同時に二階の團長室へ案内せられた。

團長は卓子の上に紹介狀と私の名刺とを並べながら、私の入るのを待つて、

「關君の紹介で來たのは、君か？」

と來た。其の語調からして、これは中々手硬いと思つた。併しかういふ事には、もう何度も場數を踏んでゐるので、少しも恐しくはない。

「ハツ！　私であります」

切口上でやつて退けると、

「用向は？」

既に私の膝には、鉛筆とノートが待つてゐる。

「少年のためになる御高説を拜聽いたし度いと存じます」

「牛刀を以て鷄を割くが如し」

禪問答はいよ〳〵佳境に入らうとする。此の時ドアをノックして入つて來たのは、當直將校であつた。

「報告！　戰艦〇〇、巡洋艦〇〇、〇〇、只今入港、〇番、〇番ブイに繫留！　終り」

團長は擧手の禮を返して

「了解！」

當直將校は、報告を終つて退去した。

これを傍で聞いてゐると、全く別の世界にゐる心地がする。さて此の意味は、此の日在港艦艇の一部が演習のために港外に出動して、今歸還したといふ報告であつた。

ところへボーイが大きな湯呑に波々と茶を盛つて、團長と私との前に置いて行つた。

「これを飲め、我輩の愛用しとる茶ぢや」

「ハツ！　頂きます」

口をつけると、正しく支那茶に相違ない。

「團長！　これはウーロン茶ではありませんか」

「然り」

「砂糖を入れたら甘いでせうが、此のまゝでは少々澁いですなア」

「澁いところがよい、砂糖は無駄ぢや、話はちがふが、君は漢文を讀むか？」

今度は此方から反問を試みた。

「團長は佛蘭西通だと聞き及んでゐますが」

「ウム、佛蘭西も少しやつとる、だが、漢文は面白いぞ」

「さうでありますか、ところで團長は、何事もすべて命令的におつしやいますが、それで面白いのですか」

こゝに至つて、團長の唇はやゝ恰好が變つて來た。

「面白い？　實は面白くないのぢや、我輩は土曜から日曜にかけて東京の家に歸る、猫の額のやうな所で、菜の葉でも作つた方が面白いさ」

大分調子がよいので、此の機を捉へて、

「團長のお寫眞を拜借致したいのですが……」

と、再び態度が硬ばつて來る。

「無し、我輩は曾て寫眞ちふものを撮らん」

「でも日露戰爭の頃、砲手の主砲の下に立つておいでしたが……」

「見たか！　あれは我輩の知らん間に撮りをつた」

大きく笑ひながら、直に鋒先を轉じて、

「君！　レスペンスキーを見たか」

藪から棒の發問である。此方は大きに面喰はざるを得ない。

「レスペンスキー？（此の發音は間違つてゐるかも知らぬが、私にはさう聞き取れた）、ハア、何の事ですか」

「馬鹿！　レスペンスキーを知らん奴があるか！」

さう云はれても未だ解らない。これには少々困つてゐると、

「明日見い、今夜はこゝに泊れ、よい物を見せる」

「ハツ！　泊ります。よい物とおつしやいますのは？」

「我輩の監督下にある下士卒集會所ぢや。バスを見て來い、實にすばらしいぞ、五十人でも六十人でも入れる、日本一の大バスだ、時に君は音樂が解るか」

バスの話から音樂、面白いやうに方向は轉換する。

「お恥づかしいですが、音樂は一向に解りません」

「さうか、我輩も解らん、今度來た時は海兵團バンドを聞かさうと思つた」

いつの間にか卓上の釦を押されたと見えて、今度は筆記らしい下士官が入つて來た。

「この客人を伴れて、下士卒集會所へ案内せい、バスを見せるんだぞ、それが濟んだら旅館まで、三富屋だ！　それから門鑑を作るやうに、此の名刺の通り、大急ぎッ！」

かう云つて團長は私の名刺を筆記に渡された。筆記が一揖して去ると、また話は續けられる。

「來月一日には是非來い。晴雨に拘らずぢや、うんと兵食を振舞つてやる」

「ハツ！　六月一日？　どう云ふ日でありますか」

「新兵の入團式ぢや、必ず寫眞屋を連れて來い、面白い材料がある」

了解！　と出たい所だ。併しまさかにさうも云はれないので、

「ハツ！　是非拜見させて頂きます、序に兵食とやらも……」

「兵の作つた料理もなか〳〵馬鹿にならん、試食して見い」

「さうでありませう、時に團長！　さつきのお言葉にありましたレスペンスキーとは何のことですか、どうも了解出來ませんが……」

「解らんか、バルチツク艦隊ぢや、レスペンスキーは捕虜になつたぞ、知つとるだらう」

さてはロジエストウエンスキーのことか、私は初めてやつと了解した。

「解りました、ベドウイですネ」

「さうぢや、今の皐月ぢや、こゝの陸岸に繫留されとる、奴を捕へた蓮と、仲よく肩を並べとる、

實に愉快な光景ぢや、阿蘇も宗谷も來とる、遠洋航海を濟ましてな、みんなよい材料ぢや、よく見とけ」

「はい、此の次に參りました時には、寫眞を撮らせて頂きませう」

「よろし、適當に便宜を與へる」

そこへ先刻の筆記が門鑑を拵へて來て團長に提出した。一應點檢した上で、

「よし、さ、これを渡しとく、これから後は此の門鑑で、ずん〳〵入れる、木戸御免ぢや、アハヽヽヽ」

「有難う存じます、大切に致して置きます」

「我輩の在職中は有效ぢや、いつでもやつて來い」

「大變長座を致しました、では下士卒集會所を見學して參ります」

「よく見て來い、解らんことは何でも訊いたがよい、今夜は一泊して明日また來い」

こゝで私は一禮して團長室を出た。もう軍事點檢もすんで、港内の諸艦もひつそりしてゐた。そして私は大きくホツと一息入れた。

竹を割つたやうな人といふ譬はあるが、全く今井團長はさつぱりした軍人であつた。而も溢れるばかりの親切心を有つ人であつた。

六月一日の入團式には、朝早くから出向いて、いはゆる兵食の振舞を受け、團長の斡旋によつて例のレスペンスキーを初め、彼方此方と寫眞して廻つたが、其の大部分は、適宜修正を加へられた上、受持雜誌面に、特殊の光彩を放つたのである。

第五節　西理學士

芳菲山人の筆名を以て、「少年世界」の創刊以來、十餘年の長期に亘つて、鑛物其の他の一般科學談を、滑稽混りの巧妙なる筆致によつて描き出し、少年の科學思想養成上に、少からぬ貢献をしたのは、理學士西松二郎先生である。

由來西先生は、かの杉浦重剛先生と同期の開成學校の出身で、杉浦先生は化學を專攻せられ、西先生は鑛物學に志を立て、爾來數十年親交を重ねられしやに聞き及んでゐる。

而も相當の長い期間、經濟上の不如意を嘗められしにも拘らず、玉の如き人格は、眞に圓滿無碍の長者として世に處し、曾て一度も忿つたことのないと思はるゝやうな、福々しい容貌の持主であつた。

はじめて西先生を麻布霞町の邸にお訪ねしたのは、明治三十五年、忘れもせぬ秋の彼岸の中日であつた。實はこれより曩、私は理科學上の短文を集めて、「理科手引草」なる一書を出版した。其の

書の校閲を先生にお願ひしたこともあり、且は「少年世界」の寄稿家たる關係上からも、疾くに感謝を表すべきであつたのが、延び〳〵て茲に至つたのである。

その時先生は、十年の舊知感を以て、至つて心易げに、

「よく來られた、さアどうぞ、打ちくつろいで、今日は幸ひ萩の餅を拵へたから、先づ一つお摘み下さい」

さう云つて、初對面の私の目の前へ、ひよいと取り出されたのは、意外も意外、一塊の人糞ではないか、其の色といひ形といひ、たつた今排泄したばかりの物で、何となく强烈な臭氣が鼻を襲ふ如く、いかな私も顏を背けざるを得なかつた。先生は謹嚴らしい態度に、少し微笑を含みながら、

「よく出來てゐます、驚くことはありません。これは最近佛蘭西歸りの友人が、土産に持つて來たので、實は菓子器の一種です、一寸其の頭のところを摘んで開けて見なさい、中味は決して不潔なものでありませんから……」

勸められるまゝに、氣味惡くは思つたが、恐る〳〵指を觸れて見ると、なるほど堅い、そこで人糞の一部を摘んで持上げると同時に、中には大きな萩の餅が、三つばかり重ねてあつた。

併し私はどうも手を出しかねて、お茶ばかり頂いてゐると、

「それでは、これは隱して置きませう、あまり本物らしく出來て居るので、來る人がみんな吃驚して、誰も彼も二の足を踏みますよ、毛唐といふ奴は、惡い趣味を有つてゐますね」

と、ひとりで笑つてゐられた。芳菲は放屁に通ずるところから、氣を利かしてこんな土産を呉れたのだらう、とのお話もあつた。

見ると先生のお室には、棚の上にも座敷の隅にも、到る所に、大小さま〴〵の達磨が、笑つたり力んだりしてゐる。かねて達磨の蒐集をしてゐられるとは聞き及んだものゝ、かうまで澤山あるとは知らなかつたので、

「これは驚きました、隨分珍しいものがお有りのやうで……」

と云へば、西先生は流石に大得意で、

「これればかりぢやない、まだ〳〵澤山ありますがね、一つ小さいところを見せませうか」

と、傍の箱の中から、次々に展開せられる。小さいのは目の中に入りさうなものから、掌の上に十個も二十個も載せ得られるもの、綺麗なもの、奇妙なもの、正にお伽の世界を見る感じである。

「まだ〳〵、こんな物まで集めてゐますよ」

と、開いて見せられるのは藥種、化粧品の廣告から、手拭、風呂敷に至るまで、苟くも達磨と名のつくものは、善惡美醜を論ぜず集めるといふのが、卽ち先生の主義であつた。

さて達磨の展覽も一わたり濟むと、先生は座邊の本箱を眺めながら、

「さうだ、君は理科が好きだから、此の本を一冊差上げよう」

と云つて、數ある本の中から、取り出された一冊を、何かと受けて見れば、石川千代松博士の名著、「進化新論」の而も初版本であつた。有難く推戴いて、試みに表紙をはねると、見返の白地に、「謹呈西松二郎君、石川千代松」と署してある。

「かうした大切な記念の御本を、私が頂戴しても宜敷いでせうか」

と念を押すと、先生は無造作に、

「私はもう讀んで了つたから差支ない、何かの參考になれば幸です」

と云はれた。私は歡待を謝して引退つた。

此の當時西先生は、帝室博物館の天産部に奉職してゐられた。或日役所の歸りがけに、態々博文館に立寄られて、

「一度上野へおいでなさい、石川博士も天産部にゐて、大概一週に二度位は來られるし、其の他動植物の學者も居られるから、君の研究には便宜が多いですよ、都合によつては、文部省の教員資格を取つて置くもよいでせう、さういふ希望ならば、助太刀して上げてもよい」

と云ふやうに、將來の身の振り方まで、親身になつて考慮して下される。そこで私は又そのお言葉に甘えて、時々博物館に出向いては、貴重の標本類を見せて頂いたり、説明を承つたり、更に石川千代松博士や、黒川動物園長に、態々手紙を書いて紹介して戴いた。

ところが、暫くして西先生は、博物館の天産部を罷めて、三重の縣立工業學校長として赴任せられたので、自然私の博物館通ひも中止の狀態になつた。尤も西先生は、文部省の會議や其の他の公用で、年に一二回づつ必ず上京せられた。そして其の都度忘れずにお訪ね下さつて、土産の新聞包を取出しながら、

「これは彼方で出來る鰯の目ざしですよ、鐵網の上で燒きながら食べると、なか〳〵うまいものです、冷めたらさつぱり駄目ですから、是非熱いうちに食べて下さい」

と云つて、態々その食べ方までお教へ下された。それから後も上京の折の土産は、鰯の目ざしにきまつてゐた。それだけに編輯部の小僧が、西さんの名刺を持つて來ると、「また鰯の目ざしかな」と、直覺する程であつた。

其の頃人傳にきけば、三重の工業學校の方も、西先生の赴任以來著しく校風が改まり、殊に卒業者の就職方についても、自ら先頭にたつてお世話をなされるさうで、卒業生も在校生も、全く慈父に接する如くに親しみ、且敬慕してゐるとのことで、これを耳にした私は、一入先生の人格に憧憬せざるを得なかつた。それにしても今日まで永らへてゐられたなら、少しはお禮を述べ得たであらうになどと、あの當時のことを思ひ出す毎に、何か親の心子知らずの感を覺ゆるのである。

明治四十二三年の頃であつたらうか、或時文部省の吉岡督學官に面會すると、此の頃中、愛知三重岐阜地方を巡視して來たとの話なので、

「それなら松坂の工業學校へいらつしやいましたか、西校長は御健在でしたか」

と、いきなり訊ねて見た。それといふも、こゝ一年近くお目にかゝらないし、例の鰯の目ざしとも遠ざかつてゐるので、何がなしに氣がかりになつたからである。すると吉岡督學官は、

「西さんには御病氣でお目にかゝらなかつたが、大分お惡いといふ話だつた」

これは又思ひもよらぬことに、私はハツと胸を打たれた。

「どういふ御病氣か、お聞きになりませんでしたか」

鸚鵡返しに問ひたゞすと、

「何でも舌癌とやらで、非常に衰弱せられてゐるので、もう永くはなさゝうだと聞きました。至つて評判のよい人ですから、惜しいことだと思ひます、何しろ御老體ですものネ」

事もなげに云はれたが、私にはそれが相當强く響いた。

かくて物の一月とたゝぬに、早くも訃報が傳へられた。圓滿無碍の西先生、定めし苦痛を訴へず笑つて大往生を遂げられたことであらう。

まゝ、多年に亘つて集められた數千點の達磨は、既に三重縣へ赴任に當り、全部それを取りまとめて、杉浦先生の日本中學の倉庫に保存された。後にそれが京都の木戸忠太郎氏（解散）の手に移され、其の中の珍奇のものゝみを集めて、一部の書物に作られたと聞いてゐる、恐らく今も木戸氏の手許に保管せられて、相變らず笑つたり力んだりしてゐることであらう。

第六節　黑川動物園長

少年と動物――其の動物を見るのには、動物園に行くことが、何よりも捷徑である。生きて動く者を見る――それは少年の第一の趣味である。されば こそ、いつ動物園に行つて見ても、觀覽人の過半は、幼少年に依つて占められてゐる。暹羅國王獻納の巨象、北極產の白熊、阿弗利加の駝鳥、さては福島中佐の西比利亞旅行に騎乘したといふ記念の馬、金魚や緋鯉の群がる魚のぞき、賑かな雜居の水禽舍など、すべて少年にとつての好觀覽物である。

それだけに各種の少年雜誌では、時折りこゝの見物記を掲げもし、又珍動物の來る毎に、其の紹介にも力めたもので、かくて私は只見るばかりでなく、此の動物園の園長さんに、親しくお目にかかつて、其のお話を聞かうと思ひ、而も其の目的を達し得たのは、やはり前記の西先生の御紹介の賜であつた。

當時（明治三十五六年頃）の動物園は、博物館の附屬といつた形式で、隨つて宮內省の管轄下に置

かれ、特別觀覽の許可願にも、相當面倒な手續を要したのである。

ところで、黑川動物園長は、獸醫の出身であるだけに、動物の習性に就いて、深い經驗と豐富な蘊蓄を有つばかりでなく、動物を愛撫するといふ慈悲心は、恐らく他に比肩する人あるまいと思はれた。隨つて園長が各動物檻舍の前を通過する時は、可なり人に親しみ難い猛獸ですら、其の靴音をきゝ分けて、或はむつくり起き上つたり、又はキツキと奇聲を發したり、禽獸すべてが歡び迎へる。さういふ場合に園長は、只々ニコ〳〵して「よし〳〵、さうか〳〵」と、赤坊に對する笑顏を示して、溢るゝばかりの慈愛を送るのであつた。

何所となく、一種の仙骨を帶びて、痩軀鶴の如き園長の風格は、動物すら親しむ程とて、人に接しては猶ほ更のこと、此の人の前には、鹿爪らしい態度を示す要はなかつた。

私の動物園を訪問する時刻は、大抵午後三時以後のことで、即ち一般の觀覽客も漸く退場して、既に門を閉さうとする頃であつた。それといふも、本當に動物の性癖を見るのには、閉門後が好都合であつたことゝ、今一つは相互の事務上の都合からでもあつた。

或日の午後五時に近く、園長を其の事務所に訪ねると、

「ヤア、これは、丁度よい所へ來られました。今から獅子に生餌をやる時刻です。これは相當殘酷なので、一般の觀覽人には絶對に見せません、貴方は差支ないから、どうぞ御覽下さい」

と云つて、直に獅子の檻の方へ出向かれた。廣い園内には、もう人影はなく、只諸動物の咆哮する聲ばかり、彼方此方に物凄くひびいてゐる。見ると園長の先に立つた園丁の手には、一羽の鷄が提げられてゐる。これぞ今夕獅子王の犧牲壇上に上る可憐な姿である。

物に動ぜぬ園丁は、檻の前に立つて、鷄の下腹部に指を突込み、極めて無造作に、其の内臟を抉り取つて、獅子の面前に投げてやつた。すると獅子は、むつくり起き上つたものゝ、直には食べようともせず、一目ぢろりと見たばかりで、又其のまゝ横になつた。成る程殘酷な生餌である。

「内臟を抜き取るのは、何の必要があるのでせう？」

私は園長に向つて、かう訊ねかけて見た。すると園長は、

「もし毒物が混じつてゐると困りますから、用心の爲にあゝするのです」

丁度この時、獅子は前足をさし延べて、ぐつと抑へつけてしまつた。半死の鷄は危地を脱せんものと、猶も斷末魔の悲鳴を擧げてゐた。こゝで檻の前の幕は下された。

「さア、參りませう、もう濟みました」

後の始末を園丁に任せて、園長は私を促しながら、檻を後に別の路を辿るのであつた。私は惡夢から覺めた心地で、ふら〳〵と大きな金網の前に出た。こゝには日本猿の一群が同居して、鳴きながら金網を搔き搖つたり、走り廻つたりして園長を迎へてゐる。

例の調子で、「さうか〳〵、よし〳〵」を連發する園長は、私の方をふり返つて、

「どいつも此奴も、みんな可愛いものですよ」

と、福々しく笑はれた。

上野の森には、漸く夕闇が迫つて、猛獸の吠える聲は、一入物凄く耳を打つ。

暫くして又動物園を訪れると、いつも大股に、柵の中を濶歩する阿弗利加駝馬の一番が、何故か一羽しか見えぬので、早速其の理由を園長に訊ねてみた。

「駝鳥はどうしたでせう、一羽しか見えませんが……」

言下に園長は、いつになく眉を顰めて、

「彼はたうとう亡くなりましてね、全く惜しいことをしましたよ。大した病氣でもなく、いはゞ頓死です、どうも原因が判りません、念のために後で解剖すると、どうでせう、可哀想に彼の胃囊の中に、大きな珊瑚の玉のついた銀簪が、ぶすりと突き刺さつてゐるのです。一寸驚きましたね、察するところ、觀覽中の婦人が面白半分に、頭の簪を拔いて出したのでせうな、すると彼は赤玉を見て、いきなりそれを呑み込んだものでせう。簪を呑まれた婦人も愕いたに違ひないが、彼も相當の苦しみを感じたでせう、さういふ譯で昨今は、杖とか其の他の持物によつて、動物をからかふことを禁じて居ります」

とのことであつた。園長はこれに就いて思ひ出したやうに、

「さういへば朝鮮産の丹頂を、時々買ひ入れたこともあります。ところがどういふものか、それが大した病氣もしないでよく落ちるのです、つまり、ころりツと參るのですね、これなども原因が判らないので、丁寧に解剖してみると、必ず銃丸を留めてゐます、中りどころの良かつた爲、外見は何事もないやうでも、いつか其の古疵が祟つて斃れるのです。さういふ次第で、朝鮮の鶴は危險ですから、近頃は殆ど入れないことにしてゐます」

と、こんな話をされた。それから此の當時、はじめて麒麟の牝牡が來て大評判になつたことがある。私は早速それを見に行つて、寫眞にも撮らせて貰つた。買入先のハーゲンベック動物園から、態々馴養の技師がつき添つて來て、何や彼やと世話を燒いてゐた。

これは石川博士の手で話を纒められたといふ、何しろ貴重の動物だけに、上野でも特別に手を盡したのであるが、やはり氣候のせゐか、牝牡とも相ついで斃れてしまつた。そこでこれを剝製にして、博物館の天産部に陳列することになり、其の製作を引受けたのが、御成道の動物標本社であつた。こゝの主人米山氏は、有名な佐藤三吉博士の弟で、商利を度外した一種の變り者、私も數年來懇意にしてゐる仲である。米山氏の知らせを受けて、早速剝製工場の見學に行つた。

何分從來手がけた事のない大物なので、現物の身長に倍するばかりの、バラック式工場を急設し

て、其所で仕事を進めてゐた。勿論其の時はもう皮ばかりになつて、工場の中央部には、見上げる程の藁製の胴體が屹然として突立つてゐた。

多分園長の意匠であらう、一頭は四つ足を踏ん張つて、地面を搜り、他の一頭は、首を延ばしてミモーサの葉を食べる狀態に作られ、其の原産地に於ける自然生活をありのまゝに現はして、而も頗る手際よく仕上げられ、永く博物館に異彩を放つた。

私はまた、時をり寫眞技師を伴つて、諸動物の撮影に出かけた。それも只檻の外から寫すのでは興味も薄いから、いつの時も、態々園長を引張り出して、或は大きな蚺蛇を何頭も其の體に卷きつかせたり、或は各種の猿類をあやなしたり、つまり動物と人との交渉と云つた點に重きを置いて、比較的目新らしい寫眞を撮影させた。

その頃、園長の殊に手鹽にかけてゐたのは、「ジヤバ公」と呼ばれる手長猿であつた。實によく馴れてゐるので、他の動物に對しては、彼が彼はといふ園長も、この猿ばかりは「ジヤバ公が、ジヤバ公は」と特別の稱呼を口にしてゐた。

何でも此の猿は、ジヤバ島から送られて來たとかで、其の動作の敏捷なことは、全く目まぐるしいばかり、或は肩の上に飛び乘るかと思ふと、忽ち頭の頂邊まで駈け上つて、園長の頭の毛を毟つたり、或は腕にぶら下つたりして、それこそ一秒たりとも、ぢつとしない「ジヤバ公」であつた。

ところが、これもやはり麒麟同樣に、至つて飼養法の難しいもので、時候の變り目に胃腸を損じたらしく、それが因で間もなく姿を見せなくなつた。掌中の珠を奪はれた園長の悲歎は、又どんなであつたらう。

動物園と少年、黑川園長と「少年世界」、さうした關係は、數年間の久しきに亘つた。そして私個人も亦、實地に就いて、よい多くの學問を修めることが出來た。

第七節　石川理學博士

「石川動物學教科書」以來、ドクトル石川千代松の名を知つた私は、いづれの日にか、直接此の先生に面接して、親しく教へを受け度いと思ひ續けた十數年來の熱望が、遂にこゝに實現して、初めて博士の溫容に接することを得たのは、たしか明治三十六年夏のころ、所は博物館天產部の研究室であつた。

恰も其の頃石川先生は、鯢魚（はんざう）の調査を完成して、研究報告書を書いてゐられた。元來鯢魚なる者は幕末の頃長崎に渡來した蘭醫シーボルトに依つて、一躍世界の學界に躍り出した日本特產の稀品で、これを歐洲に宣傳せるシーボルトは、表面蘭醫と稱した獨逸人である。

天產部の研究室には、日本產淡水魚類の標本が、ホルマリンの瓶詰として、無數に陳列してあつ

た。見ると其の大部分は、琵琶湖産ならずば岐阜縣での採集品であつた。謂ふに石川先生は、鯉魚の生態調査のため、隨時飛驒の山間部落に出張せられたといふから、多分其の時、序に採集せられたものであらう。

それから後私は、必ず月に一度か二度づつ、四谷大番町の邸に伺つて、「少年世界」の原稿を依頼したり、自著の校閲をお願ひしたり、後には「動物學叢話」の編輯を委せられたり、或は學問上、特に進化説についての説明を承つたりして、書物以外、いかに多くの知識を授つたか、蓋し量り知り難いものがある。

するとある時、何かの話の序に、昆蟲採集の思ひ出話をされるので、

「先生は時々岐阜へいらつしやいますが、岐阜は私の故郷で、こゝに名和靖といふ人がゐます、私の昆蟲學の先生です」

といへば、石川先生は一寸案外の體で、

「さうか、それは面白い因縁だ、併し昆蟲ならば、私の方が名和さんの先生である。丁度あの方が大學に來られた頃、私は標本の造り方など教へたものだ、それが今日では、日本で有名な昆蟲學者になられた、そんな理由で岐阜へ行く毎に、今も時々面會します、至つて酒の好きな面白い人で、鵜飼にも招かれたことがある。それでは一つ珍らしいものを見せよう」

さう云つて、奥の間から持つて來られたのは、一枚の手札形の古い薄ぼけた寫眞、三人の大學生——と云つても、飛白の和服に駒下駄といふ、頗る蠻カラの書生三人。

博物館研究室の石川博士

「この寫眞の中央にゐるのが私で、うしろに立つてゐる一人は、佐々木忠次郎君です、薄刺げてゝよく判らないが、私の膝の上の麥稈帽子には、ピンでとめた蝶々が五六匹ゐるでせう？　此の時代は今のやうに、殊更採集箱を用ゐないで、採つた蝶々はピンに刺して、帽子の上に留めたもので、大學の雇教師にモールスといふ米人がゐて、こんな事を教へたのです」

と、流石に少年時代を思ひ出してか、なつかしさうに其の寫眞を眺められた。

ある日のこと、「珍しい物が到着したから、直に來るやうに」との急報なので、早速大番町へ伺ふと、座敷の縁に大きな古盥を据ゑられ、其の中には何かうよ〳〵動いてゐる。餘程珍しいものらしく、側目もふらず熱心に見入つてゐられた。

「先生！　先刻はお知せを戴きまして、恐れ入りました」

と、大聲に挨拶をすると、石川先生はハツと吾に返つて、

「上つて來てこれを見て下さい、今朝中國の篤志家が、わざ〳〵上京して來て、豫て賴んで置いたものだから、鯢魚の仔魚を、こんなに澤山持つて來ました。これは非常に珍品で容易に手に入らない。まだ腹部に卵黄をつけてゐる程で、何も食べないだらう、どうか巧く育てたいものだ」

と、それこそ子供が好きなお土産を貰つたやうに、ひとりで滿悅してゐられた。見たところは、殊更美しいものでもなく、又目を愕かす程のものでもなく、いはゞお玉杓子の出來損ひのやうなものだが、先生の研究材料としては、此の上もない珍品であらう。

そこで私は不圖古い記憶を喚び起して、

「鯢魚といへば、むかしシーボルトの持歸つたのは、其の後どうなつたでせう」

と、これは又頗る子供らしい質問を試みると、先生はそれを受けて、

「今でも生きてる筈です。先年彼方へ行つた時に、實は其の事を思ひ出して、シーボルト家の池を搜してみたら、大きなのが一尾現れましたよ、それにしても此の子供達を、何とか見事に育てたいものだ」

と、何所までも熱心に見詰められる。兎角して日も暮れかけたので、いざ辭去しようとすると、臺所の方から夫人（箕作麟祥氏の息女）が飛んで來られて、

「何にも御座いませんが、丁度胡瓜の新漬を拵へましたから、是非お夕飯を召上つていつて下さいませ」

と、たつて引止められるので、それならばと其のまゝ、遠慮なく設けの席に着くと、先生の膳部の上には、獨逸製らしい大きな金屬製のジョッキが置かれてある。而もこれには、細密な人物や風景の彩色畫が一杯に描いてあつた。

五六種のお料理の外に、お話の胡瓜の丸漬が二三本横つてゐる。何でも此の胡瓜は、十分大きく成らぬ内に摘みとつて、醋に漬けたもので、其の醋の中には、香木の葉（殘念ながら其の植物名を失念したが、或獨逸人の庭園に植ゑられてゐるものといふ）を加へて、微妙な薫を添へたもので、丸ごと嚙りながら、麥酒の肴にするといふのが、先生と夫人との說明であつた。

すると先生は、手早く一本の栓をぬいて、私のコツプについで下された。あとは全部ジョッキに盛つて、泡立つところを、ぐつと一氣に飲みほして、さも旨さうに皿の上の胡瓜を召上つて、更に第二杯目を呼られる。さすがに本場の獨逸仕込だけあつて、さながら大海の百川を吸ふ如しと云ふ有樣で、かくて興の湧くまゝに、動物學上の談話は素より、フライブルグ大學時代のこと、或はワイスマン博士の性格など、次々に語り出されて、中々に盡きようともしない。

ところへ、御令息の欣一君が、學習院の制服のまゝ、教科書の一節を、臺詞式に節をつけて、歌ひながら出て來られた。すると夫人は、

「この子は父とは反對に、どうやら文學へ向きさうですから、ゆく〳〵はお弟子にして頂くのですね」

と、冗戯まじりに笑つてゐられた。先生の夫人は至つて、氣輕なお方で、或晩も私が玄關を入つて、「木村です」と呼ぶと、夫人は内から、

「オヤ、金太郎かい、さアお入り！」

急いで出て來られて、薄暗がりの中に、私の影を見るなり、

「アラまア、貴方でしたか、これはとんだ失禮を申上げました。實は今夜、大工の金太郎が來る約束ですから、木村ときいて、木村金太郎だと早合點致しまして、まア〳〵、さ、どうぞお上り下さいませ」

かういつた調子の少しも飾り氣のない賢夫人であつたから、先生のお邸へ伺ふにも頗る氣樂で、自然幾度となく御馳走に預り、いゝ氣になつて濟ましてゐた。

或時石川先生は、學術研究のために、濠洲タスマニヤ地方に出張せられることになつた。これはこれまでにない長途の旅程ではあり、殊に未開の鞭煙瘴霧の土地だけに、多少の懸念もなくも無かつたであらう、私は其の發程を、新橋驛にお見送りした。丁度外科醫のベルツ博士も、同じ汽車で歸國せられる由で、驛構内は學者の群で雑沓してゐた。其の中で先生は頻りにそは〳〵してゐられるので、

「どうかなさいましたか」

と、口早に訊ねると、

「イヤ、チツケツトを紛失した、何處へやつたかな」

と、頻りにポケツトを探して居られた。併し幸ひそれも間もなく見つかつたものゝ、物に頓着せぬ學者らしい態度は、かういふ點にも認められた。

かくて數ケ月を過ぎて恙なく濠洲の調査を了へて歸朝せられた。早速參上してお祝申上げると、旅の疲れも知らぬ顔に、相當の長時間に亘つて、濠洲旅行の土産話を、可なり詳しく聞かされた。難しい部分は「太陽」に、面白い話は「少年世界」に、適宜案配して、耳新しい奇談を紹介した。

丁度此の席上、私は先生に向つて、

「彼の地では、鴨嘴獸を御覽でしたか、一匹位何とかなりませんでしたか」

と、先づ質問を發して見ると、先生は笑ひながら、

「實はそれを手に入れ度いと思つたが、結局駄目でした。その代り珍しい土産物は相當に持つて來

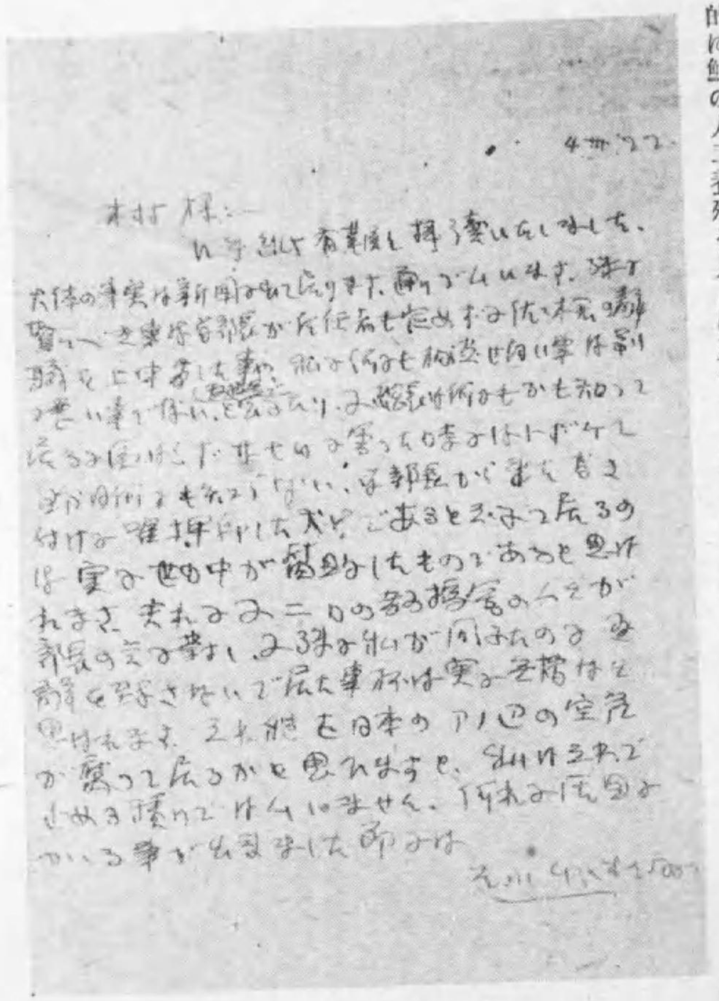
たよ」

と、大きなトランクの蓋をあけて取り出されたのは、土人の狩獵用品といふ大小各種のブーメランクとか、ニューギニアの風鳥の假剝製とか、其の他旅行中の寫眞——熱帶地だけに白麻の服にヘルメットといふ輕裝で、郊外、海濱、又は各地の研究所で撮られたもので、これを見ながら説明を承つてゐるうちに、いつともなく夜は更けて行つた。

最後に石川先生の、最も力瘤を入れられたのは、生魚運搬と鮎の人工養殖といふ、頗る效益ある事業であつた。それといふのは、生きたまゝの鮎を、明治天皇の供御に奉り度いといふ、尊い精神の現れであらうと想はれる。

先生は先づ琵琶湖の小鮎に着眼せられた。鮎は元々一種のもので、俗にいふ湖水の小鮎も、其の棲息地を換ふれば、或程度の大きさにまで發育するといふ見地から、これを運搬して諸方の河川に放流する爲に、先づ諾威製の生魚運搬器を輸入されたが、併しそれは必ずしも理想的とは云へなかつた。そこで其の不備缺陷を補つて、特殊の完全なものに改造せられ、取敢ず相當量の小鮎を輸送して、多摩川の羽村に放流させたのであるが、最初のこの試みは、洪水其の他の障碍に依つて、豫期の好果は擧がらなかつた。

けれども先生はこれに屈することなく、再三實驗を重ねた上、遂に見事の成果を收められ、全國的に鮎の人工養殖を見るに至つた。此の一事は實に偉大な功業と云はなければならぬ。



石川博士の書簡（本文參照）

すつと時を過ぎて、一日偶然にも、日比谷附近の市電の中で、先生にめぐり會つた。先づ久闊の御挨拶の後に、

「今年もまた鮎の時節になりまして、定めし何かとお忙しくていらつしやいませう」

石川理學博士

と話しかけると、先生はさも滿足さうに、

「今ではもう、熊々琵琶湖から持つて來なくも、三月頃になると、日本中の何處の河口にも、小鮎が群集して居るから、何の造作もなく捕ることが出來る」

と云ふ意味から、それからそれへと、鮎の話は續けられて、大木戸の停留所もいつしか過ぎ、電車は新宿の終點に來てしまつた。まだお話の途中ではあつたが、

「先生！　終點で御座います、今日はどちらへお越しになりますか」

と、御注意申上げました。はじめて我に返つた先生は、

「これは失敗つた、大木戸で降りるのだつた」

と、急いで後へ引返された。こゝにも、篤學の先生の面影が見えて、云ひ知れぬ感に打たれながら、私は暫く先生の後姿を見送つた。

木村樣、御手紙有難く拜讀いたしました、大體の事實は、新聞に出て居ります、通りでムいます、殊に驚くべき事は、學部長が、後任者も定めずに、佐々木君（忠次郎博士のこと）の辭職を上申した事や、私に何も相談せないことは、別に惡い事でないと教授會で云うたり、又總長は何も彼も知つて居るに拘らず、廿七日に會つた時には、トボケテ自分は何も知らない、學部長から來た書き附けに、唯押印した丈であると云うて居るのは、實に世の中が腐敗したものであると思はれます。それで又二日の教授會の人々が、部長の言に對し、また殊に私が伺うたのに返辭を致さないでゐた事などは、實に無情なと思はれます。之れ程まで日本のアノ邊の空氣が腐つて居るかと思ひますと、私は之れで止める積りはムいません。何れ又御目にかゝる事が出來ました節には……石川千代松。

この私信は、公開すべきものではないかも知れぬ。併し飽くまで學術を崇しとする眞摯なる石川先生の面目躍如たるものがあるので、敢てこれを傳へて置き度い。

其の臺灣の學術會議に、老軀を提げて臨み、遂に異鄉に歿せられたのは、坪井博士が露都の國際學術會議中に逝去せられたのと同じく、學者としての終りを完うせられしことに於て、一入の崇敬を禁じ得ぬものがある。

第八節　松村理學博士

凛乎として一見古武士の風格を備へた人、それは理科大學教授植物園長松村任三博士であつた。私は最初誰の紹介で博士に面會を求めたか、今一寸記憶に浮ばない。お會ひしてお話を承つてみると、まことに親切な學者で、自然松村博士と三好博士とを、植物園に訪れる足數も多くなり、兩博士の說話は、絶えず「少年世界」に異彩を放つたものである。

松村博士は、夙に「植物名彙」の大著を公にせられ、草木の名稱に關しては、何を訊いても即座に明答を下し、且古來の文献にも精通せられ、植物の傳來に關する記錄などは、極めて詳細に亘つてゐた。

博士の應答ぶりは、頗るきび〳〵したもので、決して餘事を云はれなかつた。私はある時不圖考へて、今日は一つ經歷談を伺つて見ようと、手帳と鉛筆とを用意して、教授室に飛込んで行つた。すると博士は、

「今日は何用あるか？」

先づ問はれるので、私は率直に答へた。

「今日は先生の御經歷を承り度いと存じます」

聊か意外と云つた樣子ではあつたが、「よし」と云つて、遽に椅子を離れ、兩腕を胸に拱んだまま、廣い室の中を壁に沿つてぐる〳〵廻りながら語られる。相當に甲高い大聲ではあるが、室の彼方の隅に行かれる時は、一寸聞き取り惡く、これには少々當惑せざるを得なかつた。

「最初化學（ケミストリー）を修む、その前には、ゲベル銃を擔いで江戸の町中を練り歩いた」

「それが、どうして植物學に轉向なさいましたか」

「先輩に矢田部良吉といふ人がある、それに勸められて植物を學ぶ」

すべて此の調子で、てきぱきとやつて退けられ、言葉に少しの無駄もない。」

「いつ頃から採集をお始めなさいましたか」

「明治十一年十二月……」

「お一人でしたか」

「否、同行者は佐々木忠次郎君、故人松浦佐用彦、他一人」

「何所へおいでになりました？」

松村博士の筆蹟

松村佐二

「相州江の島！　當時汽車は神奈川まで通ずるのみ、後はテク〳〵歩き！」

すべて此の調子である。また或時、博士に伴はれて、園内を見廻つてゐたところへ、一人の篤學らしい昆蟲採集家がやつて來て、頗る殷懃に、

「先生！　園内での採集をお許し下さい」

と願ひ出た。勿論其の人は、博士と一面識あるらしい。

「よろしい」

と一言、大きく頷かれた。

松村理學博士

暫くして件の採集家は、十數頭の鳳蝶を獲たらしく、博士の面前に採集箱の蓋を開けながら、

「おかげで此の様に澤山採れまして、まことに有難う御座いました」

と、挨拶を述べて一覽に供した。すると博士は一目見て、

「如何なる蝶か、其の名稱は？」

「鳳蝶であります」

「して彼等の生命は？」

又してもかういふ禪問答が展開した。――私は後年今井海兵團長に面會した時、不圖松村博士の態度を想起して、獨り微笑を禁じ得なかつたのである――。

丁度日露戰爭の終りの頃、鐵嶺附近に在陣中の出征兵士から、野草を採集して送つて來たといふので、地方の小學教師から、私の手許に其の標品を轉送して、名稱を敎へてくれと云つて來た。勿論私には判らう筈もない。そこで早速松村博士の一覽に供すると、

「一は「シナガハハギ」、武藏野に生ず、他は「カハラサイコ」、藥草、相州柴胡原を產地とす」

とこれだけ、あとは何も言はれなかつたものゝ、事實これだけで目的は十分遂げたのである。

かくて數年の後、博士は歐洲の植物園見學のために洋行せられ、約一ヶ年程過ぎて、歸朝の報知を受けたので、さては何か面白い土產話でも承らうと、殊更曙町のお邸へ出向いた。早速廣い客間に請じ入れられ、不圖見ると隅の三角棚の上に、小さな幾個かの人形が飾られ、他には何の裝飾もない、いかにも學者の好みらしい簡素その物である。

さて、一應の挨拶を濟まして、

「大層綺麗な人形ですが、今度彼方でお求めになられましたか」

と伺ふと、例の調子で、

「歐羅巴產にて、金屬製である、破損の恐れなしと思ひ、特に求め歸つた」

との答へであつた。其の頃博士は啻に專門の植物のみならず、汎く一般の語原の研究に沒頭し、其の結果をば、絕えず「東洋學藝雜誌」に發表せられた。隨つて博士の植物談の用語にも、力めて純粹の日本語を採用され、「をしべ」、「めしべ」、「うてな」から、スキートピーと云はずして、「にほひゑんどう」、ダリヤを用ゐずして、「てんぢくぼたん」といふやうに、飽くまで國語を以て表示せられた。其の所說、「事大主義を免れざる國語」の一節にも、

昨年（明治卅八年）、觀艦式の折、予は滿洲丸に在つて陪觀したが、其時一水兵が我輩の前に來つて報じて曰ふやう、「只今潛航艇が運動を開始しましたから早くおいでなさい」、と云ふのであつた。運動といふ言、開始といふ語、或は大砲を擊出したというてよきに、發砲開始といふ如く、海陸軍の兵語と云ふかも知れぬが、動くといひ、始めるといふ、祖先代々使ひ來つた言

語があるのに、その母語をすて、支那の文字を借り來つて、發砲だの、開始だの、運動だのとは何事であらうか。初めより我國に無き語にして、水雷艇とか、潜航艇といふものならばいざ知らず、それすら國語に重きを置くならば、大和言葉を以て飜譯すべきであるに、普通語中最も普通なる語をすてゝ、漢字を塡めて新語を作るとは、さても〳〵、外尊内卑、事大主義の最も甚だしきものと謂はざるを得ない。

若し右の如き新語を兵語といふならば、今の國民學校（著者曰ふ、博士は當時小學校に此の語を用ゐられた）に於て教へたる國語は、一度海陸軍に入つたる後、兵語の爲に破壞せらるゝものというても過言ではあるまい。兵士に於て且つ然り、それが田舍へ行くほど平易なる語は用ゐずして、四角四面の漢語を用ふること多きやうに見受ける。（中略）

今は昔、明治五年の頃、神田淡路町二丁目に、啓蒙社といふのがあつて、そこから「まいにちひらがなしんぶん」と云ふを發行した。稀には有識者も出るものと見えて、かゝる漢語流行の中に立つて、全然平假名もて新聞を發行したのである。其文章の一例を擧げて見ると、

このしんぶんを、すりいだすには、そもそも、ふたつのおもむきあり。ひとつには、まいにちのおふれをはじめ、くにうちは、まをすまでもなく、ひろく、せかいぢゆうの、にちにちうつりかはる、ありさままで、かきつづり、あまねく、をんなこどもにみせて、くにのひらけすすたすくるため、ふたつには、わがくには、ことばまたびのくになれば、かずおほくして、まなびがたき、からのもじはなくても、ひらがなごじふじさへあれば、よろづのことに、すこしもさしつかえなきことを、あまねく、ひとにしらせ、こののち、おほいに、わがくにことばのがくもんをおこすために、すりいだすしんぶんなれば、のこらず、ひらがなにてかきつづり、からのもじは、ひとつも、もちひぬはずなれども、わがくにのところのなや、ひとのなにいたりては、よみがたきところな、ひとな、おほければ、もしや、かきあやまることもあらんかと、おそるるよりして、いましばらく、からのもじを、のこしおけるなり、ただし、ことばのみぎに、――のしるしあるは、ところのなり、ひだりにあるは、ひとのなり、またみぎに――のしるしあるは、やくめのなり、また、ことばのをはりに、丶のしるしあるは、くぎりなり○のしるしあるは、よみきりなり。また、あとさきに（　）のしるしあるは、ときあかしのしるしなり。

今より三十餘年前に方つて、この有識者が論じたる如く、平假名を實行して今日に至つたならば、わが國語の發達は、今日大いに見るべきものがあつたであらう云々。

かういふ一家の見識を持して、先づ植物名から、國ぶりに更めようとしたる博士の意氣は、さながら快力を以て、亂麻を斷たんとする概があつたと云へよう。

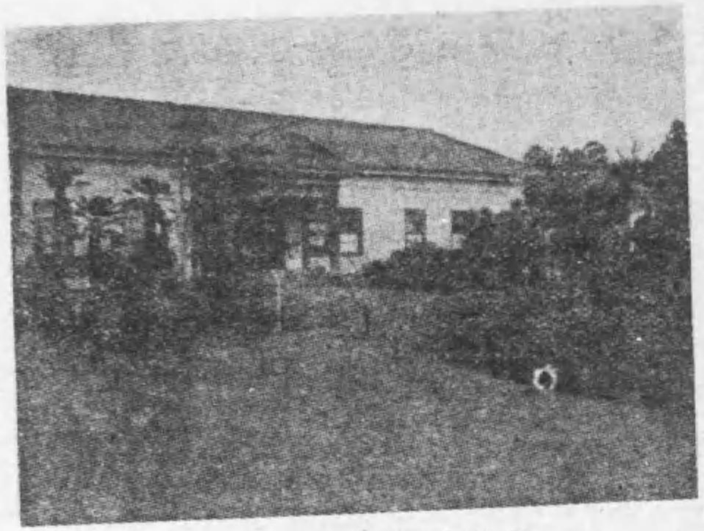
第九節　三好理學博士

同じくこれ植物學界の大家ながら、一方の松村博士は、秋霜烈日の如き威嚴ある先生であり、一方の三好學博士は、煦々たる春陽にも譬ふべき溫厚なる先生であつた。私は植物學教室にいつも何れか一方の先生を訪れた。例へば三好博士に差支ある時は松村博士を、又松村博士の用務中は三好博士といふやうに。隨つて一度たりとも、未だ無駄足を踏むことは無かつた。櫻並木のだら〳〵坂を上りながら、今日は何方の先生にお會ひ出來るやらと、さう考へながら、自然に足の輕さを感じたのである。

かうして數年後には、兩先生の所說が積り積つて、相當の分量に達したから、特にお許しを受けて、各一册づゝに纏め上げ、博文館の計畫せる「學藝叢書」の中に加へた。

三好博士は、私の請ふまゝに、いつも心よく口述して下された。松村博士は、「かういふ題で何枚位、いつ頃までに」と、勝手なお願ひをするのに、大抵の場合は「よし」と頷いて、必ず期日までに送つて下された。けれども三好博士は、一度も自ら筆を執られたことはなく、いつも私の手で筆記をした。

而も其の口述の調子は、丁度小學校の先生が、生徒　教授するのと同樣、少しも難しい文句を使はず、ゆつくり話して下されるので、一言半句たりとも、聞き洩らしたり、或は書き違へることはなく、隨つて筆記その物が、淸書さへすれば　完全な原稿に成るのであつた。



理科大學植物學教室

殊に其の題目の如きも、正月ならば松とか、二月には梅、四月櫻、五月花菖蒲、七月蓮といふやうに、それ〴〵の季節に應じて、少年の好きさうなお話を承つたもので、いつも、殆ど餘事に亘ることなく、熱心に語り續けられた。

この頃の三好博士は、櫻と花菖蒲との研究に努めてゐられた。櫻の種類ばかり集めた見事な圖錄も編纂せられた。これは後年京都の芸艸堂から、優雅な木版刷に依つて出版せられ、更に引續いて花菖蒲の圖譜も完成を告げたが、二書共に日本木版の長所を十二分に發揮したる大出版であつた。

謂ふに三好博士は、國花の眞髓を、世界人に示さんが爲に、先づ第一着手として、櫻圖譜を作ら

三好理學博士

れたものであらう。而もこれを原色版とか、石版とかの、西洋流の印刷に依ることなく、我が國固有の木版技術に依つて、其の精巧を示された點に、博士の壯なる意氣を窺ふに足りよう。

三好博士は、其の著書の圖版印刷に就いて、常に最も關心を寄せてゐられ、私も亦種々質問を受けたことがある。例へば丸善から發行した「日本植物景觀」の叢書は、全部獨逸の印刷所に託されたとかで、さう聞けば小金井の櫻堤も、堀切の菖蒲園も、實景以上に見事に刷り出されてゐた。

話は變る。後年私は或若い雜誌記者を、博士の許に遣して、山櫻の話を伺つて來るやうにと云ひ含めてやつた。

すると其の記者の歸つて來ての報告に「山櫻のことならば、殊更我輩でなくても、この紹介者がよく知つてゐる筈だから、聞いたがよからう」とのことであつた。なるほど思ひ出せば、櫻に就いては幾度となく、博士の口から承つたらしいが、兎角專門の知識になると、さつさと脫け去つてしまつて、頭の中は空つぽなので、これには聊か當惑したものゝ、實は期日も迫つて居るから、然るべく、一篇を綴り上げ、博士の許諾を受けて、やつと四月の誌面を飾つたこともある。

丁度石川博士が濠洲へ出向かれたのと相前後して、三好博士も蘭領印度地方の植物調査に赴かれた。何分此の地には、普に名高いバイテンゾルグの大植物園をはじめとして、到る所に鬱蒼たる密林もあり、奇草異木に富むといふから、定めし珍しいお土產話もあらうと、私は亦博士の歸朝を待つて、植物園へと突進して見た。

すると果して其の時のお話は、植物の觀察ばかりでなく、耳新しい見聞談も亦少くなかつた。例へば其の地の土着民が、檳榔子の葉を嚙んで、口邊を赤黑く染めてゐることゝ、鼻孔に煙草の粉を詰めて樂しむことゝ、さては料理のライスカレーに、數十種の混ぜ物があつて、而も頗る美味なこと、或は地上勤務の官吏社員が暑熱のために疲勞して、身心に異變を生ずる場合は、豫め山上に設けらるゝ休養所に赴き、數日間こゝに靜養すれば、何等醫藥を用ふることなく、單に淸凉の空氣を呼吸するだけで、忽ち元氣を恢復するといふ話、又は突如として襲ひ來るスコールの物凄い光景、それが植物の成育に及ぼす影響等に就いて、耳を驚かす奇話珍談を、實地觀察のまゝに語つて聞かされた。猶ほ植物學上の觀察記錄は「熱帶植物奇觀」と題して、富山房から發行せられてゐる。

三好博士は、晩年主として天然記念物の保存に努力せられた。聞くところに依れば、天然記念物の保存事業は、獨逸あたりで夙に勵行して居るさうで、我い國でも亦閑却し難い問題となつて來た。それは何故かといふに、文化の急激なる發達に伴つて、山を切り野を開き池を塡め、次々に道路を作り、工場を設くる結果として、あたら貴重の動植物類も、年々減少する一方で、中には湮滅に歸する物さへあるので、今の間に保護の手段を講じなければ、將來必ず臍を嚙むであらうと、こゝに憂を懷く博士は、率先して自ら事に當り、時に僻遠の地をも厭はず、老軀を提げて危險を冒し、遍

く全國の老樹名木の調査に當られたのである。

或時暫くぶりで面會すると、

「此の節は專ら天然記念物の保護事業に沒頭して居る、それにはどうしても民間に其の必要を認識させねばならぬ、殊に少年に對して、是非天然物の保護を知らしめ度いと思ふ」

と云つて、一場の講話に幾分の時間を割かれた。そしてこれが私として最後の筆記であつた。なぜならば、それから間もなく私は自ら方向の轉換を行ひ、三好博士も亦、例の天然記念物保護事業以外、一般植物に關する口述をなされなかつたからで、即ち前に記した山櫻の一條なども、亦この爲に外ならない。

第十節　上田文學博士

「君！　我輩の家は淺草の向柳原だよ、壞れかけた黑門だから直に判る、若し判らなかつたら門の壞れかけた家は何所だと聞けばよい」

かう云つて上田（萬年）博士は大きく笑つてゐられた。私が初めて上田萬年先生の名を知つたのはたしか「少年世界」第一卷七號の春季附錄に、印度の昔話を掲げられた時で、これはかの遮多迦の飜譯である。尤も上田先生は、既にこれより數年も前に、グリム童話の飜譯を作られたくらゐで、いはゆる少年讀み物は、手に入つたものであつたに相違ない。

小波先生が、文部省囑託として、或は國定教科書の改訂とか、又は通俗教育會といつた、種々の事務に關係せられるやうになつてからは、從來にも增して、上田博士や芳賀博士とも、一入交渉が頻繁となり、其の結果、かの「お伽共進會」の懸賞お伽噺募集に際して、此の兩先生に選評を依頼することになり、それにつれて私は、先づ上田博士を、向柳原の邸に訪うたのである。

聞いた程でもなかつたが、成る程幾分破損した黑門であつた。博士は細事に拘泥しない、いはゆる氣宇濶大の豪傑型の人で、且極めて人情に厚い肌合の持主である。かの明治文壇の鬼才と謳はれた齋藤綠雨（正直正太夫）とは、竹馬の友の間柄であつたとか。境遇の變化によつて　綠雨は晩年相當落魄してゐたが、上田博士は、絕對に此の友人を見棄つることなく、最期までよく面倒を見られたといふ。

或時私は知人の出版屋から、「日本歷史畫譚」と題する一書の編纂を賴まれて、漸くそれを書き上げたものゝ、これは私の名を出すよりも、寧ろ上田博士にお願ひした方が、世間の信用も多からうと思つて、其のために態々博士を訪れた。尤も其の頃はもう向柳原を引拂つて、九段上の富士見町に住まはれた。取敢ず理由を述べてお願ひに及ぶと、

「君が書いたのなら見なくともよい、但し我輩にも一つの註文がある。それは其の本に使用する假

名遣だ。すべて我輩の主張する特殊の假名遣に據つて貰ひ度い、さもなければ意味をなさぬから」

と、はつきり申渡された。それといふのも上田博士は、改訂假名遣――俗にいふわ假名の普及に關して、あらゆる手段を盡してゐられる。隨つて私の原稿に對しても、それを使用することを、唯一の條件とせられたのである。

それから間もなく書物が出來上つたので、關係者一同、下谷の伊豫紋に小宴を開き、上田博士を招待して愉快な一宵を過したことがある。其の席上で博士は、

「通史も惡くはないが、此の次には英雄偉人の逸話を集めて見たらどうか」

と、こんな意見を漏らされた。出版書肆も成る程と合點して、早速それに取りかゝることに決したが、これは私の仕事の都合で、遂に實現を見ずして終つた。

それから後また何かの都合で、富士見町へお伺ひすると、

「昨日佐藤誠實博士が亡くなられた。あの方は非常に功勞のあつた學者だ、君のところの太陽あたりで、其の功績を傳へたらよいと思ふ、歸つたら係の人にさう傳へてくれ」

と、こんな注意もあつた。それから又、

「今度伊勢　皇學館にゐた某といふ男を東京に連れて來たが、何か書かして見たらどうか、至極篤學の人で、文章も相當なものだ、勿論我輩の名前を使ふことは一向差支ない、何分未だ薄給の身の上だから、少し面倒を見てやり度いと思ふ」

これは至つ　耳よりな話なので　早速某氏に面會して、此方の主義なども理解させ、先づ其の得意とする歴史上の記事を書いて貰つたところ、いかにも博士の言はれる通り、頗る堂に入つたもので、これを「少年世界」に連載すると、果して大きに評判を高め、次々に長短幾種かを連載した。而もこれは後に或出版屋の手に渡つて、一冊の本に纒められた。

上田博士はこのやうに、大きな氣持を以て、よく弟子達の面倒を見られたから、其の門に馳せ參する者も、亦少くなかつたらしい。

私はまた何とかして、博士の手跡を手に入れようと苦心した。手紙さへ滅多に書かれぬ位だから、

「我輩の字なんぞいくらにもならん、それほど欲しければ樺山文部大臣に書いて貰つてやらう」

と、串戲だか本當だか判らぬことを云はれるので、

「大臣のよりは、是非先生のを！」

と、無理なお願をしたものだから、たうとう大臣のも博士のも得られず、いはゆる虻蜂とらずに終つてしまつた。

第十一節　萩野文學博士

「少年世界」の創刊號に、「少子部蜾蠃」の逸事が書かれた時から、萩野由之先生の名は私の記憶に印してゐる。尤も博文館發行の「日本文學全書」とか、其の他多くの國文書類に、落合、小中村兩氏と共に、三者轡を並べて、明治廿四五年以來、新國文の普及に盡くされたのは、何人も周知の事實で、而も私が特別に先生に親炙するやうになつたのは、比較的近い頃の明治四十三年以後で、かの「少年日本歴史讀本」の編纂助手となつてからである。

發行元の博文館では、誰を彼をと適當の人物を物色した末に、たうとう私を推薦して執筆の事務を執らせることになつた。そこで私は一週に一度づつ、駒込蓬萊町の萩野先生のお宅へ伺つて、古事記や、日本書紀や、或は聖德太子傳曆などゝいふ、今まで一度たりとも目を通したことのない、多くの古書を交付せられたものゝ、實はこれを讀破するのも相當苦勞であつた。

世の中に、相好圓滿といふ語はあるが、それは萩野先生に於て、はじめて當て嵌まるものであらう　私は前後十餘年間、先生に接して來たが、只の一度たりとも、不平らしいお顏を見たことは無かつた。天性の然らしむる所であらう、如何なる場合にも、福々しさうにして、さながら座邊に春風の起るのを感ぜしめた。されば私としては、今度與へられた仕事が、いかに難しからうとも、此の先生の下に働くことは、至上の幸福であると信じた。

恰も其の頃、先生のたつた一人の令息は、回生の見込薄い重症の床に臥されてゐて、既に今日か明日かといふ瀬戸際であつたに拘らず、其の心中の苦惱を抑へて、私のために何かと指示されたのは、やはり學問に忠實なる學者の態度として、敬服せざるを得ないものがある。

令息の亡くなられて後の先生は、流石にお淋しい樣子であつた。或時私に向つて、

「君は書畫に趣味を有つか、僕の伜は君と同齡であつたが、死ぬまで床の間に掛けて愛玩した一軸がある、それは宮本二天の兎の畫だ　何所に置くも同じだから、伜の形見として君に贈らう」

と云つて、茶掛用の一軸を渡された。これは二天の眞筆か否か判らないが、私は其の厚意に感激して、今も大切に祕藏してゐる。また何かの話の序に、

「僕の故郷の佐渡に、本庄良寛といふ偉い坊さんがゐる。丁度日露戰爭の直前に、態々舞鶴まで出向いて、時の東郷長官に面會を求め、佐渡の孤島にも、大いに海軍思想を普及させ度いといふことや、或は萬一外寇のある場合には、全島一致で當らねばならぬが、まだ島民に國防の認識が薄いので、大いに憂慮してゐる　此の際海軍の方で何とか手段を施して戴き度いと、かういふ意味のことを陳べたさうだ。ところが、良寛のまだ佐渡へ歸らない内に、舞鶴鎭守府から三隻の水雷艇を差向けられたといふ話もある。實は今度この人が、「佐渡水難實記」といふ本を書いて、それを自分で出版したいと云つて來たが、一つ面倒を見てくれないか」

と、こんな御相談があつたので、私は二つ返事でお引受けして、可なりの書冊に作り上げ、それ

を佐渡まで送り屆けたこともある。何でも此の書の口繪には、佐渡出身、上田麥僊が、緻密な筆を揮つてゐた。勿論それ程有名な畫人とも思はず、折角其の原圖を申受けながら　どうして了つたやら、更に記憶に存しない。また良寛和尚からは、佐渡名產琢齋の紫金銅と文鎭を贈られたが、これきへ行方不明になつた。

さて萩野先生は、鰻と鮎とを何よりも賞味せられ、私が伺ふと三度に二度は、

「さア、今夜も神田川へ行かうや」

と誘はれる。その頃はまだ自動車は無かつたので、必ず人力車を二臺呼んで、雨が降らうが雪だらうが　飽かず出かけて御馳走に預つた。そんな事から私もまた自然鰻を好むやうになつて、時には友達の誰彼を引つぱつて、よく神田川へ出かけたものである。

ある年の正月に、年始をかねて事務の打合せに參上すると、

「今日はとろゝ汁を拵へさせた、寒いから行火にあたり乍ら一杯やらう」

と、自室に案内せられた。聞けば佐渡の風習として、正月のとろゝ汁は、何杯も何杯もお代りをするのがよいさうで、先生は又見る〳〵幾杯も平げられた。佐渡に生れぬ此方は、却つて他の料理に手が出したくなる。

行火にあたつて寒さを知らず　いゝ心地になつた盃の數を重ねると、いつも以上に先生は大機嫌で、少年時代の書初めの話、凧揚げの話など、五十餘年の記憶を辿つて、すつかり子供に若返り、次から次へと話の糸は切れさうもない。そこで私は方向を轉じて、

「先生！　今年の夏は長良川へ鮎を食べに參りませうよ」

「それは何よりだ。僕は鮎にかけて目が無いよ、學生時代にも、夏休みに國へ歸る樂しみの一つは、鮎を食べるといふことだつた、是非今から約束して置かう」

と、頗る大贊成であつた。かくて其の年の夏に、先生のお伴をして長良川へ出掛けた。そして更に其　翌年は、大町桂月氏も誘つて、三人づれで出掛けたりした。

事實を告白すると、萩野先生に就くまでは、私は日本歷史といふものに、さまで興味を有たなかつたが、かうしてお說をうかゞつてゐるうちに、次第に面白さを感じるやうになり、やがては自發的に研究もするし、又難問に出遭ふ毎に、何や彼やと、愚にもつかぬ質問を提出する。さういふ場合も先生は、つひぞいやな顏もせずに、小學生を敎へる氣持で、あの本この本と、研究資料きへ與へられて、至極親切に御指導下された。

話は變る。先生の玄關脇には、二枚折一双の貼込屏風が、年中變らず立てられて、それには維新前後の名士　歌とか、詩とか畫の類など、手際よく配列してあつた。或時私は其の製作の由來を訊ねると、先生は笑ひながら、

「これは非歌人屏風と自ら呼んでゐる。つまり、歌人ならぬ歌人、詩人ならぬ詩人が、道樂に書いたものばかりを、かうして貼交ぜにしたのだ」

「それならば、私も一枚献じませう」

「さうか、何か心當りでもあるのか」

「有ります、一六居士の俳句はどうでせう。日本海の大勝利を詠んだもので、一打やさりとはもろき五月蠅、どうでせう」

「ホウ、書家の發句、それは至極珍しい、是非此の中に加へ度いものだ」

そんな問答の結果、私は祕藏の一枚を先生に献じた。

また或時、ひよつこり私の家へ來られて、床の間の一軸に先づ目を注がれた。それは東郷大將の小色紙に、同じ判の小堀鞆音の出陣桃太郎を、上下に貼つて仕立てたものであつた。

「これは面白いものを有つてるな、丁度僕ンとこに孫が生まれたから、五月節句の祝ひ物にしたいと思ふが、讓つて吳れないか」

私としては、持つてゐなければならぬ品でもないから、氣持よく二つ返事で、

「お氣に召しましたら、どうぞお持歸り下さい、ところで、先生！　今一つ御覽に入れ度いものがあります」

と、私は東郷大將のを外して、其の跡へ日下部鳴鶴翁の大幅を掛けて見た。これは乃木東郷兩大將の戰功を讃仰した七言絶句二首で、乙巳新年（卅八年）の試筆として古梅先生（一六翁）に贈る旨さへ記され、而も軸書は一六翁の筆、箱書は翁の第三子小波先生である。一目見られた萩野先生は、呻るが如くに感歎して、

「これは見事だ、鳴鶴翁は僕の書の先生で、隨分これまで澤山見たが、かほどの出來榮にはまだ接したことがない、序にこれも讓つて吳れないか」

と、心から熱望の樣子である。併し此の一幅は、小波先生から頂いた品で、箱書にも其の由來が記してあるだけに、こればかりは聊か當惑せざるを得ない。そこで一應理由をお話して、

「私が先に死んだならば、必ず先生に献じさせます、若し先生が私よりも先だつたら、緣なき物としてお諦め下さいませ」

「さうか、ではさういふ事にして、君の死ぬのを待つか」

と、腹を抱へて大きく笑はれた。私も一緒に大きく笑つた。今、私の家に在る畏れ多い一軸は、桃太郎の軸のおうつりとして、萩野先生が態々箱書までして、私に下さつた大切な寶物である。

第十二節　名和靖先生

漸く學齢に達したばかりの私が、受持教師から先づ其の名を聞かされたのは、名和靖先生であつた。明治廿四年の夏、はじめて幻燈を見て、それに依つて昆蟲の説明を聞かされたのは、名和靖先生であつた。既に四年前から、其の隆々たる盛名を知つてゐただけに、子供心にも偉い人だと感じさせられた。

「岐阜の名和さんは迚も偉い人で、外國から來る手紙も、日本名和靖とだけで、其の手許に配達されるさうだ」こんな噂も世間に傳つてゐた。大きくなつたら、名和さん程の有名な學者になり度いものだと、私はさう思ひながら、見やう見眞似に、蝶や蜻蛉を追廻しつゝ、春から秋にかけて野山を飛び歩いてゐた。

それから幾年か過ぎて、明治三十年に名和先生の名著「薔薇の一株昆蟲世界」が出版された。私はまたそれを熟讀して、少からぬ趣味と利益とを受けた。尤もこれより曩私は、中川霞城氏の「理科春秋」と、石川千代松博士の「動物學教科書」に示唆を得て、「理科教場」と題する四十枚ばかりの原稿を書き上げた。勿論それをどうしようといふ考へはなかつたものゝ、兎も角も子供の頃から常に崇敬してゐる名和先生に、一應見て戴かうと思つて、書狀を添へて郵送して置いたところ　暫くして返事があつた。その文面には、

「あの原稿は大變面白く讀んだ。就いては一度面會した上で、何かと相談したいと思ふ　是非岐阜へ來るやうに」

と、かういふ意味のことが書かれてあつた。私は天にも昇る愉快な心地で、七里の道を車に搖られて、京町の名和昆蟲研究所へ辿り着き、初めて先生に面會した。恐しく威嚴のある人のやうに思はれた。そして其の時の話に、

名和靖先生

「君の書いた物はたしかに面白い、併し今少し實際に就いて昆蟲學の研究をすれば、更に一層よからうと思ふ　君は文章は巧いが事實に間違がある。事實に間違があつては何にもならぬ、そこで其の間違を改めるために、こゝの助手になつて　暫く實地を學ぶがよい。さうすれば鬼に金棒だ　又助手でやり通す氣なら、後には大學の聽講に行くやうな便宜も取計つてやる」

と云ふことで、お説御尤も、而もそれは願つたり叶つたり、萬事先生の御心に委せて、それから間もなく私は研究所に弟子入をした。

その頃の名和先生は、頗る多忙で、滅多に自宅には居られなかつた。或は農村の害蟲視察に出かけたり、又は遠地の講演に出張したり、そして私は毎日のやうに、他の助手連と連れ立つて、堤の雜草や、畑の作物の間を漁り廻つた。

葉裏に潜む小蟲、根元に匿れる微蟲、それこそ目にも見えぬ程の小さな蟲にまで、氣を配らねばならなかつた。

捕蟲網を振つて、花咲き亂るゝ野外に、蝶々を追ひかけるやうな華やかさは一つも無く、隨つてかうした微小の昆蟲を見つけることは、私が一ばん劣つてゐた。それでも兎に角毒瓶の中に、或程度の數が溜ると、研究室に持歸つて熱湯に浸し、それをぬれ布巾の上に並べて、いよ〳〵整理にとりかかるのである。

氣味の惡い毛蟲や芋蟲の內臟物をくり取つて、吹脹器にかけて外皮を脹らませる作業は、私の最も好まぬ所であつた。實をいふと、私はこんなことに根氣を盡すよりも、文章を書いた方が、どれだけ氣樂か知れぬと思つた。

「少年世界」の第四卷に、初めて「蝴蝶船旅行」の一文が掲げられたのは、其の年の秋のことである。私はこゝに昆蟲の研究から、一轉して少年文學の世界に入ることゝなつた。

けれども、名和先生との關係は、依然として續けられた。それから足掛八年の月日が流れて、私

はまた、「五十三の日曜」と題する理科の書物を編纂した。いはゞ昔の「理科教場」と同じ趣旨のものである。そこで先年來名和先生に預けつぱなしになつてゐる「理科教場」の原稿をば 此の書の附錄に收め度いと思ひ、早速返付方を申込むと、折返しそれを送つて下されたから、八年ぶりで此の原稿は、漸く明るみへ出たのである。

それにしても前後八年といふ長い間、大切に保管して下されたのは やはり名和先生の偉いところである。若しこれが放慢疎懶な私であつたならば、白面の一少年の書いたものなぞは、疾くの前に屑屋の手に渡してゐたであらう。

それから兩三年過ぎて、東京遊學中の名和先生の令息が、不圖大病に罹られて、大學病院に入院された。或日のこと、病院から態々附添の人が來て、「貴方の家へ來られた時に、御馳走になつた菓子の味を思ひ出して、是非あれを食べたいと、譫言にいひ續けてゐるが、どんな菓子だつたか、教へて貰ひ度い」と云ふことであつた。

これには私も一寸當惑した、古いことで、何を出したか記憶はないが、兎もあれいつも取りつけの菓子屋から、それかと思ふ二三種を求めて、大急ぎで大學病院へ行つて見ると、丁度先生も上京されてゐて、廊下での立話に、

「折角だが駄目らしい、何分彼は濃尾大地震の時に、一旦梁の下敷になつたのを、やつとの思ひで

助け出したのである。その際頭をやられてゐるから、それが原因で今度の病氣を起したかも知れない、兎に角病原も判らんので、解剖することに決定した、多分明日までは保つまい、其の時は是非立合つて呉れ」

と、悲壯な話である。流石に度胸の据つた人だけに、少しも女々しい節はなく、冷靜な態度を持してゐられた。ところが、意外にも病勢は急に好轉して、それより日に日に順調を辿り、間もなく全快退院の報を受けて、私もホツと一息ついた。

その翌年頃でゞもあつたらうか、淺草公園水族館の隣接地に、「昆蟲館」なる一棟を新築する者があり、内部には種々の標本を陳列して、賑々しく觀客を呼んだ。其の標本は岐阜から持つて來られたといふ。又先生は不自由なこゝの一室に起臥して、自ら説明の役に當られた。周圍は朝早くから夜遲くまで、ジンタ囃子の騷々しい中に、こゝばかりは閑として客足も甚だ稀であつた。

米國のキンケードが、ジプシーモスの研究に來て、こゝに立寄つたこともある。また「少年世界」が、蝶類展覽會を催したのもこゝである　其の頃名和先生は、「少年昆蟲學會」を設けて、兒童の寫生畫や、實驗觀察の記録を募り、時々小冊子を發行してゐられた。隨つて「少年世界」にも、亦時時先生の執筆を煩した。（本文江崎理學博士の所説參照）忘れ難い思ひ出の糸は、繰れども繰れども中中に盡きないのである。

さて以上の「忘れぬ人々」は、紙數の都合によつて、僅かに十二名にとゞめたものゝ、思ひ出せばまだ〳〵、人類學の坪井博士、人種學の鳥居博士、さては西比利亞を横斷して石油の調査をされた神保博士、天文學の横山又次郎博士など、澤山あられるが一先づ割愛せざるを得なかつた。

猶ほ此の記録中に、文學方面の人々をば、著しく閑却せる傾あるは爭はれぬ。而も其の主なる理由は、雜誌記者としての私が、自らの趣味の趨くまゝに、それとなく力を注ぐに至つたのは、即ち理科博物學の普及と、國防思想の鼓吹と、專ら此の二つにあつた關係から、何とはなくさうした方面に、足を向けた爲である。

また私を驅つて、さうせしめた原因は何所にあつたか、そは未だ少年の頃に、中川霞城氏の主張したる、富國强兵の基礎は、理科學の發達にありてふ一事を、深く童心に銘して忘れなかつた結果である。世にいふ三つ子の魂百までの譬に外ならない。果して然らば、無垢純情の少年を指導すべき作家、編輯者等の筆に上す責任の、如何に重大なるものかは、敢て吸々の言を費すまでもないことである。

第五章　少年と社會施設

第一節　幢畫（パノラマ）、覗畫（ヂオラマ）、電光畫（キネオラマ）

明治廿三年春、東京上野公園に開催せられし第三回内國勸業博覽會は、これが附帶事業として、特に少年のための觀覽施設に意を注ぎ、技の斬新を旨とせるもの少くなかつた中に、最も目新らしく感ぜしめたるものに、電車鐵道と、自動鐵道と、パノラマとを擧げねばならぬ。これに關し、「少年園」第四卷三十八號には、先づパノラマを取上げ、次の如き報道記事を掲げて、未だ觀ぬ地方讀者の一粲を博した。

何をかパノラマといふ。一樓閣の内部を、圓形に構造し、其の上下四方一面に、大油畫を施し、これを射出するに、光線の作用を以てし、以て衆庶の縱覽に供するものなり。其の畫は、主として其の國古今の名將、賢宰、英雄、豪傑、學者、高士、事業家、發明家等の肖像、事蹟、若しくは有名なる戰鬪、及び名勝古跡の類なり。

圖中の物體は、大小遠近、濃淡疎密、一々其の實物と格法尺度を同じうし、驚くべきもの、喜ぶべきもの、愛すべきもの、畏るべきもの、泣くべきもの、笑ふべきもの、皆躍然として眼前に現出し、觀者をして、千古の名賢と一堂の内に相會し、萬里の山川を咫尺の間に跋渉するの想あらしむるものなり。歐米各國の大都府公園等には、到る所殆ど之あらざるはなしと云ふ、而して我が國にては、實に今回の建設を以て、其の嚆矢となすなり。

かくの如く、先づ其の構造と價値とについて概念を與へ、更に上野のパノラマに言及してこれを詳說するやう、

此度上野公園に建設したるパノラマは、民間二三有志者の手に成りしものなり。外部は多角形にして、内部圓の直徑十二間、高さ六間なり、建築甚だ宏壯ならずと雖も、亦大いに觀るべきものあり。

明治元年五月一日、薩州、長州、大垣、忍四藩の官軍と、會津二本松、仙臺、棚倉等各藩の奥州勢と、白河激戰の實況を寫し出せり。

山巒方に起伏し、田圃村落相點接する間、處々に砲煙を漲らし、或は已に兵火に罹り、焰烟天を焦すもあり、逢隈の川洋々として遠く流れ、白河の城巍々として高く聳ゆと雖も、復た一點太平の象を存せず、近く直下に眼を注げば、兩軍戰方に酣なり。血に染みて斃るゝ者あり、傷を包みて鬪ふ者あり、臥して狙擊する者、走つて敵を追ふ者、砲臺の碎けたる者、軍馬の射ら

れたる者、旗を持ちて指揮する者、劍を拔いて相呼ぶ者等、一々名狀すべからず。案ずるに右は白河二度目の戰なり、初度の戰には、官軍利あらずして退き、白河城賊の有となりしを、此日の一戰に恢復したるなり。此を以て、奥州方死傷最も多く、就中仙臺勢が、不意の襲擊に逢うて狼狽し、不覺の敗を取りし所、殊に慘狀を極めたり。

畫は、横濱の人矢田某氏の作に係る。氏は曾て米國に遊學したる人にて、昨年此パノラマの爲めに再び同國に赴き、大いに研修する所あり、而して歸朝後直ちに白河に出張し、古老に就いて當時の戰狀を質し、實地の觀察に凡そ二ケ月を費したりといふ。

されば一二專門家の言ふ所によれば、或は往々缺點の少なからざる由なれども、之を日本パノラマの嚆矢とするに於ては、敢て左程の不思議もあらざるべく、少年諸君の身にとりては、五錢の散財必ずしも貴きに過ぎざるべしと想はる。

然るに上野公園のパノラマと、殆ど其の時を同じうして、淺草公園の一角に、亦一棟のパノラマ館の新設を見た。無論こは博覽會見物客を當て込めるものであらう。卽ち「少年園」の記者は、これを一見して、次の如き批評を下してゐる。

上野のパノラマは、吾輩前號の誌上に之を記せり。今や又一つのパノラマを、淺草公園に建設したる人あり。形は同じく多角形なれども、高さ十間、圓の直徑二十間にして、前者に比すれば稍大に、且つ其の構造も、一層堅牢なるが如し。

畫は、佛國の畫工某の筆に係り、米國南北戰爭の時、グラント將軍が、ヴイツラスブルグの戰に、ミスシツピ河畔なる南軍の堡砦を攻擊し、身を挺して之を拔かんとするの實況を寫し出せるものにて、頗る精巧なり。

然れども若し吾輩をして之を評せしめば、本館の建設者は、何故先づ揭ぐるに、本邦歷史上の事蹟を以てせずして、殊更に外國の事蹟を採用せしか、其の意を知ること能はず、元來パノラマの性質よりして考ふるも、右は技を售り、術を衒ふの場には非ざるべし。吾輩は此一事に於て、深く本館の爲めに惜まざるを得ざるなり。

と、强く頂門の一針を加へてゐる。いかにも評者の言の如く、淺草パノラマ館の作畫は、上野のそれに比較すれば一段の精巧を認むるに相違なきも、何を苦しんで外國の事實を描き出したるか。密かに想ふに、これは米國にて喝采を博したるものを、安價に輸入して、奇利を得んとしたるにあらぬか。何れにしても、こは只單に、外國の戰爭を見せると云ふに過ぎず、其のパノラマとしての教育的要素を缺き、且國家意識を沒却せる者に外ならぬものであつた。

當時いかにパノラマの流行したるかは、次の記事によつて想像し得られよう、曰く、「パノラマ漸く流行し來れり、上野白川戰爭、一たび社會の耳目に觸れてより、淺草南北戰爭となり、神田富士

となり、淺草美術のパノラマとなる。此後尙ほ幾個のパノラマを生ずるやも知れず、是れ少年の目を娛ましむるに足るものなり、亦是れ少年の爲め此一個の友を增すものといふべし」。云々（少年園第六十號）

一方、上野竹の臺のパノラマ館は、博覽會閉場後も、これを常設館として存置し、且更に畫題を取換へ、或は彰義隊の合戰、又は日淸戰爭に因めるものを以てし、次いで日露戰爭に入ると共に、凄壯極りなき旅順背面總攻擊の戰況、若しくは規模雄大なる奉天大會戰の場面を描出して大いに觀者の心目を愕かせた。而も其の畫趣といひ擬造物といひ、何れも數年前に比して、著しき進境あるやに認められた。

また淺草パノラマ館も、漸次其の內容を改め、日淸戰後には、黃海々戰に於ける松島艦の奮戰を取材にして、一層これが評判を高め來つた。たゞ見る、觀覽席を旗艦松島の司令塔附近に擬し、こに等身大の伊東司令長官、鮫島參謀長をはじめ、數名の艦隊幕僚を配置し、或は双眼鏡を手にし又は劍欄を握りて、前面左右の激戰を監視するところ、旣に我が砲彈の威力に依りて大火災を生じ、沈沒に垂んとする敵艦揚威・超勇等を間近に現示し、或は轟沈のうき目に遭へる淸兵の波間に漂流して救助を求むるあり、更に眼を他方に轉ずれば、我が第一遊擊隊の諸艦が、依然正々堂々の陣形を保ちて、銳く敵の艦列を亂さんとするもあり、或は赤城　比叡、西京丸等の劣勢艦が、敵の重圍に陷りて苦戰するあり、砲煙濛々として四方に立罩め　波浪逆卷き、水柱起伏し、加ふるに波濤の動搖する眼下には、溺沒せんとする淸兵の、或は頭部四肢を空間に擡げて號泣する等、觀る者をして多大の興味を感ぜしめた。

蓋し從來行はるゝ所のパノラマは、單に繪畫と擬造物とを巧みに調和して、其の限界の判明せぬ點に妙味を覺えしめるのみ、卽ち何等の活動的手段を講ずることなかりしものが、此の黃海の戰畫に至りては、從來の形式に一步を進め、至近の周圍に寒冷紗を張繞して海面を現し、更に其の布の下には、數條の針金を波狀に裝置し、簡單なる機械力に依つてこれを廻轉し、以て寒冷紗の波を起伏せしむれば、波間に浮べる敵の溺者は、さながら生けるものゝ如くに見え、且轟々たる音響をも加へて、戰場の實感を起さしむるなど、勿論甚だ幼稚にして且低級なる趣味には相違なきも、其の趣向は案外少年の嗜好に投じ、隨つて相當久しきに亘つて興行を繼續したものである。猶このパノラマ館は、明治三十三年の頃、北淸事變の天津城總攻擊を以て、呼物としたるやに記憶する。

かくて日露戰爭時代に及び、パノラマの全盛時代を將來すると同時に、又其の衰退期とも見るべきであつた。九段坂の中途、（今の平田東助翁の銅像の附近）に一館を加へ、或は淺草方面にも新館の建てらるゝあり、東京市內を通じて、少くも五六館を數へるに至り、已にして殆ど全部共倒れの狀態を現じ來つた。

この頃、日比谷の一角に、觀戰鐵道なる時局向の興行物が、甚だ目新らしきものとして、著しく世間の評判に上つた。こは卽ちパノラマ式の大長尺の畫布に、鴨綠江、九連城、蛤蟆塘、金州、旅順、大石橋といふ如く、生々しき激戰地の合戰狀況を描き現し、汽車の客車に擬へたる觀覽席を設け、車窓よりこれを展望するに、汽車は動かずとも、眼前の光景は、適當の速度を以て順次展開され、加ふるに機械力によつて車室に微動を與へ、且車輪の廻轉を彷彿すべき音響すら感ぜしめ、眼も頭も共にこれに魅せられて、眞に汽車に乘りて戰場を經めぐるの想あらしめた。卽ちこれを單に見るばかりのパノラマに比較すれば、一段の進歩といはざるを得ない。

かくて日露戰後に至り、今の淺草活動街の一角に、やゝ整備せるパノラマ館を新設する者あり、其の題材も、時代遠き「本能寺燒討」の光景を以てした。これ恐らくは我が國に於けるパノラマ館の最後を飾れるものと見るべきであらう。

「本能寺燒討」の畫作者は、五姓田芳柳氏なりしやに記憶するも。確かなことは云へない。開館前より新聞紙上に宣傳せるためか、可なりの好評を博せるものにて、丹朱に塗られし豪壯なる柱楹、さては靑甍に掩はれし屋根の結構など、建築上の微細なる手法をも、或程度まで調査檢討せるものと云はれ、見る者をして流石に其の規模の雄大に驚歎せしめずに置かなかつた。

卽ち此の大殿堂を中心に、濛々たる黑煙と焰々たる猛火の、棟を掩ひ庇を嘗め盡さんとするところ、白衣の信長は長弓を彎いて防戰に努め、宿直の人々の右往左往する、さては光秀軍の突擊の狀況など、描きて眞に迫るが如く、稀に見る壯大の布置結構であつた。

而も、これを一轉期として、パノラマ常設館なるものは、漸く時代に遠ざかりて、一館二館次々に潰え去り、其の最も早くより、最も遲くまで存在したる上野公園のパノラマ館も亦、いつともなく破却し盡されて影を留めずなつた。これ蓋し活動寫眞てふ一大强敵の出現に、敢なく敗退せるものと見るべきであらう。

次に、ジオラマなる者は、一間大の小形なるパノラマを、硝子越に觀覽するものにて、或は單獨に、或はパノラマ館の附設物として存在した。例の少年園の記者が、明治廿三年頃の淺草見世物街の光景を叙したる一節に「世評高きパノラマ南北戰爭の壯觀あり、各種の興行物、或は手品もあらん、或は錦影繪もあらん、猿の芝居もあらん、象の輕業もあらん、軍談講談の席もあらん、ちよんがれ、左衞門の席もあらん、落語もあらん、演劇もあらん、活人形もあらん、ジオラマもあらん、亦是れ半日散歩の地なり」と記すに見れば、此の當時ジオラマの魅力の侮り難き一證左と見られよう。

また、明治廿八年十月發行の「少年世界」には、神田三崎町のジオラマに就いて、次の如き記事を掲げてゐる。こは勿論新聞記事の轉載に相違なからんも、所謂ジオラマが、少年社會に重要視せ

られ、且一般社會のこれに關心を有したる一事は、略想像に難くあるまい。

ジオラマの軍事眼批評（少年世界一卷十九號）

三崎町のジオラマを、繪畫眼を以て批評したるは、二三の新聞紙に散見したるが、未だ軍事眼を以て批評したるものあるを聞かず、軍事眼の批評果して如何、試みに其一二を擧げん。

平壤攻擊。一、軍旗の日光線數不足せり、小兒遊戯用の軍旗と見えて可笑し。又此の軍旗は歩兵第十一聯隊のものたること兵卒の肩章の文字にて察すべし。然るに同聯隊の軍旗は、古色蒼然決して斯の如く鮮明なるものにあらず、斯う新しく描かれては、第十一聯隊は新隊と見えて迷惑なり。

一、我兵の背嚢に豫備靴を附するの法定則に達へり。斯樣の附け方にては一駈歩にて靴は忽ち脱落せん、宜なる哉背嚢に豫備靴なき者多きや、是れ既に途中にて脱落し、而も拾ひ來る暇なかりしに由るならんか。

一、此處に砲一門あり、砲卒の服裝と砲口の敵に向ひあるを以て我が砲なること明かなり。然るに此の突擊の場に、我が砲を引き來りたるは何故なるや、砲は歩兵に前行するものに非ず、然るに我が歩兵が砲の位置を乘り越えて前進するは解し難し。我砲何時此處に來りしぞ、歩兵の前に進みたるか、無茶なる砲兵もあるものかな。我砲兵決して斯る不都合の事は爲さじ、されば本圖は我砲兵の位置一旦敵に奪取せられ、砲一門を分取られたる後、我兵再擊して今之を取返し、敵城に迫るの景況を寫したるものと判するの外なし。

清兵敗走。一、清兵の動作緩漫に見ゆ、今少し狼狽せしめたし。一、我兵之を追擊するに一隊も一齊射擊を行ふものなく又急射擊を爲すものなし、只前後左右の別なく、各兵各個に隨意射擊を爲すは號令を以て動作する精兵とは認め難し。

死體收集。一、野外作業に從事する歩兵將校脚絆を裝せざるは如何のものにや、此の日の戰鬪に泥に塗れ、洗濯の爲め宿舍に遣し來りたるにや。

摩天嶺戰。一、我隊が戰鬪隊形を取らず、途上縱隊の儘突擊するは如何、遠距離なるが爲めか然らば何の爲めに銃に着劍したるか。着劍の必要ある者ならば何故に戰鬪隊形を取らざるか。

凡そ攻擊の法と云へば、前に若干部隊を出して第一線とし、後に密集の豫備隊を置き、前者は通常散開し、後者は前者の受けたる敵彈にて同時に損害を受けざるを度とし、適宜の距離を取りて跟隨し、斯くして最近距離に詰め寄せたるとき、全員殘らず劍を裝し、吶喊して敵陣に跳入するなり。されば着劍の時機は、戰鬪隊形にて詰め寄せたる後の事なり。本圖の如く最初より着劍せば射擊の妨碍となりて我に不利なり、又本圖の如く單一なる縱隊にて攻擊せば、中途にして非常の損害を被るか或は全員殲滅に歸せん、是れ實に亂暴無比の攻擊なり、故に余は講

評す、斯の攻撃は効を奏せずと。

勿論、ジオラマは、これをパノラマに比較すれば、規模小に、且一種の覗畫の範圍を出でず、隨つてこれを大掛りに設備するも、營業上の效果乏しきこと云ふまでもなく、隨つて後にはパノラマの暗黑道——即ち入口より其の觀覽臺に立つまでに瞳孔の調節を計るところの地下道——に、幾分にても時間を經過せしめる手段として、二三のジオラマを裝置したるは、最も合理的、且賢明の手段なりしやに想はれる。兎も角もジオラマは、其の性質上、パノラマに先立つて早く廢れ去り、既に日露戰爭前には、これが單獨の興行を一も見なかつたのである。

却說、淺草公園の六區が、江川、青木の玉乘りや、或は勸工場の類を一掃して、次々に活動寫眞館一色に塗り替へられたのは、日露戰後兩三年のことである。其の中にて、三友館（元勸工場）が、普通活動寫眞の外に、キネオラマなる者を加味して、少年の興趣を購へることは、亦見逃し難い事實である。

往年、淺草最初のパノラマ館に、南北戰爭を取入れたると同樣、このキネオラマも、實は亞米利加式の低級物には相違なきも、他に類例を見ぬ興行物なりしだけに、亦少年間の評判を集めしことは疑ひない。若し夫れ「少年園」が當時まで現存したらんには、該記者はいかにこれを批評し、又いかに紹介の筆を揮つたであらうか。即ち玆に古き記憶を辿りて、其の狀況を記すのも、亦一興ではあるまいか。

既に十數種類の短尺寫眞を映寫し終りて、第一回の大詰となるや、即ちキネオラマの開演となる。——觀客の眼前に描き出さるゝ舞臺一面の廿三十層高き大摩天樓の櫛比する所、井然として蜂窩の如く、其の前面には、洋々たる大江の水が音もなく靜に流れてゐる。これ米國のハドソン河にて、對岸なる摩天樓の大都市は、正しくニューヨーク市の繁華街である。

ハドソン河の遊覽船に乘りて、上流より下江し來れる多くの旅客等は一抹の殘光を惜みながら、漸くにして此の繁華街の一邊に辿り着いた。明星一つ早く彼方の空にかゞやき初め、立並ぶ高層樓には、悉く煌々たる電火を點じ、無數の窓々よりする燈光は、河波に映發して螢火の亂飛するよりも美しく、旅人こゝに船を停めて、暫く此の夜景に恍惚たるものがあつた。

已にして滿月東の空より出でて徐々中天に昇り、皎々たるその色は高樓の電光を奪ふかと怪しむ程もなく、一朶の黑雲むら〳〵と卷き起りて月光を掩ひ、同時に其の雲の間より凄じき電光の閃くものあり——これからが見どころである。

折から驟雨沛然として降り注ぎ、殷々たる雷鳴は、電光の一閃する毎に强く、遂に紫電迸りて地軸を裂くやと疑はる。即ち高層樓に落雷せるものゝ如く、忽ち雨止み、電雷また收まり、雲消えて月は天心に澄み渡り、窓の光次々に消えてニューヨークの市街は夜の帳に閉さるゝのである。

以上、數分間を費して一回の終となる、觀客は瞻として夢の心地より覺め、初めて吾に返るのであつた。蓋しキネオラマに見るべきものは、電燈の巧みなる使用法と、種々の擬音の利用とにあつた。例へば川波の寄する音、雨の降りそゝぐ音、特に眼を眩する電光、耳を聾する雷鳴など、すべて皆眞に近く、少年の觀客をして、拍手喝采、暫時は鳴りを止まざらしめたが、これも亦、彼國よりの輸入品にや、天にも地にも、只これ一種のみとて、いつ來て見ても同じ物を見せられては、流石に鼻につく道理にて、數年ならずキネオラマの名稱すら、遂に世人に忘られてしまつた。

即ち、パノラマ、ジオラマ、キネオラマの三種は、何れも外國傳來の觀覽物には相違なきも、明治廿三年以後、四十二三年の頃まで、前後二十餘年に亘りて、東京に於ける少年娯樂の中心勢力となれることは、爭ひ難き事實と見られる。

第二節　活動寫眞の發達

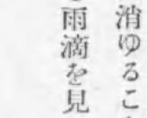
明治時代中期頃まで、少年愛好の中心勢力となれる者は幻燈であつた。併し其の幻燈も一たび活動寫眞の輸入を見るに及びて、俄然勢力の失墜を來し、さながら朝日に消ゆる殘星の如くに影を沒し、こゝに活動寫眞萬能の時代を現出すると共に、年々長足の進歩を遂げて、よく今日の隆盛時代を打開したものである。

活動寫眞は、はじめ原名のキネトグラフによつて知られ、或は活動幻畫の文字を充當したこともある。而してこれに活動寫眞なる日本名を附して、廣く一般に流布せしめたのは、福地櫻痴居士の創意に出づると云はれる。然るに此のキネトグラフに活動幻畫の文字を充てゝ、逸早く少年間に紹介したるは、實に「小國民」一九年七號（明治卅年四月一日發行）にて、先づ口繪の寫眞大版に、數十面連續の紙帶（フイルム）を現し、次の如き記事に依つて、其の詳細を盡してゐる。

市遜（ニチヂン）氏活動畫。

雨滴は、絲の如く、素麺の如く長きものにあらずして、一點の球の如きものなり。然るを、細雨絲の如し、白雨銀箭の如しと形容するは何故ぞや。雨滴の實體は、球の如きものなれども、吾人之を絲の如くに見るも、亦事實なり。

すべて、吾人が物體を見得るは、外界の物體が、眼底の網膜にうつり、それより視神經に通じて、萬物の遠近、形狀、色どり等を明かに知るものなり、然るにこの網膜は、一種の性質ありて、一度映りたる物は、其物を取去りても、直に消ゆることなく、若干時を經たる後、始めて消ゆるものなり、故に甲より落ち來りて下に到る雨滴を見る時には、甲の位置の雨滴先づ、



網膜に映り、其映りたる像の未だ消えざる一瞬間に、雨滴は急に乙に下り、網膜も亦乙の位置

に雨滴を認め、雨滴の丙丁戊を通りて、下に至る間、網膜は、前の映像消えざるに、絶えず新しき映像を生ずる故に、實際は一點滴の雨なれども、眼は之を、甲より下に至る間に引きたる一直線の如く感知するなり。

若し之を横物にし、一條の帶紙に、數多の黑點を畫き、急速に一方に進行せしむる時は、眼は黑點を見ずして、横の一線の走るやうに思ふべし。

小兒の玩具の、黑奴の手を上げたる樣、下げたる樣、平にせし樣等を畫きたる紙を、狹間ある圓壔中に入れ、急に圓壔を回轉すれば、前の畫が、手を上げ手を下げ、活動する如く見ゆるは、こゝ網膜の惰性を基として作りたるものなり。

讀者、若し以上の所說を了解せば、去日、淺草花屋敷、及び神田錦輝館にて興行せる活動幻畫といふものは、說明せずして自ら悟るならん。如何となれば、人の運動を、極めて早取の寫眞にて數十枚に寫し取り、其數十枚の寫眞を種畫にして、幻燈に映し、極めて速に種畫を新陳代謝せしむれば、其畫は、實に活人の運動する如く見ゆべければなり。今エヂソン氏が、人の運動を、極めて早く、數十枚の寫眞にせし、發明の記事を左に紹介す。口繪に挿める種畫の、鮮明を缺くは、深く遺憾とする所なれども、讀者の多く見るべからざる珍品なれば、無きには優るべしと思ひ、製版に附したりしなり。

殆ど一ケ年前、予はオレンヂなる、トーマス・エヂソン氏を、其實驗室に訪へり。時にエヂソン氏は、木製の一小箱を予に示し、其機械を動かされて後、其小玻璃孔より、內部を見よとすすめければ、予はそれを覗きしに、讀者諸氏、予は如何なるものを見たりと察せらるゝや。不思議なるかな、予が幼時讀めることありし一寸法師の、その高さ一吋計りなるが、戶外に來りて予に脫帽の禮をなし、舞踏を始めて、はては跳るやら、蹴るやら、大さわぎをなしてのち、再び予に禮して、戶を押し內に入りぬ。

活動の玩具

予はおもしろく感じたれば、「こは何物なりや」と問ひしに、エヂソン氏は、「この仕懸ですか、この仕懸は」とて、自ら左の如く書き示されたり。

キネトグラフ。

「こは活動畫と名けしものにて、永年これにつきて工夫をこらしたりしも、今以て公にするほどには、完全し居らざるなり、されど、段々と改善を加へ、今に公にする積りなり」といはれたるが、これを、餘人の言としては、予敢て輕々しく信ぜずといへども、エヂソン氏の天才は

これを完全になし得るの日あらんことを確信したりしが、果してエヂソン氏の活動畫は、今日成功せり、諸氏こゝに示す小圖（口繪）を細檢せよ。

圖は總て六十五あり、蘇格蘭壯丁と少女との舞踏をうつせるものにして、（一）は始めにして、二人共に起立して未だ踊らず、この時丁度舞踏はじめの合圖ありて、音樂の遠く響ける場合なり、而して（三）に於ては、男少しく左足をあげたれども、女は未だ動かず、女は（四）（五）（六）（七）にて其腕を上げ、男は廻らんとなせり。（十）は舞踏の一ふみをなせるにて、男は他の足をはわんために、他の足を床にふみつけたるなり。（十三）にて足は床に達せり。

今や、相倚りて廻らんとし、女は男の廻らんとするに應ぜんと用意しゐるなり。（十八）を見れば、女の膝の曲ること（十六）より甚だしきを見るなるべく、（十七）（十八）にて、女は輕く舞ひ居るを認め得べし。（十九）に於ては、今や廻轉の始まらんとせるを示し、（十八）にありし男の肩巾は、其廻轉の速なるに及んで消え行かんとす。讀者は、圖の陰影を見よ、一として同じきものなし、これ絶えず運動しあるの確證にあらずや。（譯者曰く、原圖は鮮明にして、其陰影をも詳に認め得べかりしも、其まゝ讀者に示すこと能はざるを憾みとす）

（二十）にて、場所の異なる樣を見るべく、（二十五）にて、男は背を向きて女は隱れ、其手の男の肩にあるの外は、見えざる樣になれり。

（二十七）より（四十）までは、女は漸次前の方に進み來れり。今や男は右側に、女は左側に在り、（四十一）よりは始めの位地に復せんとし、（六十一）までは、ます〳〵速に舞踏してあり、女の上衣を見れば、其運動の急激なるを證するに足るべし。

圖は、極めて精細なる事までも寫し、手の上げ下げ、足のふみ樣、ボンネットの動きかた、顏の容貌の異なれるも、皆寫さゞるなきは、寫眞術を應用せるものなり。

もし此の圖を、エヂソン氏の木製箱の中に入れて見たらんには、總ての圖の運動は、予のさきに見たりし樣に見ゆるぞかし。恰も芝居にて、演伎を見たらんが如くに、鮮明に運動して、毫もやすむことなし。

諸氏は、この解說を聞き、如何にしても活動畫は製せらるゝやを疑ふことなかれ。原理のあり、エヂソン氏只これを發見せるのみなればなり。

「キネトグラフ」とは、希臘語の「運動の記錄」といふ意味なり、故にこゝに活動畫と譯せり。われ〳〵の各運動を、皆別々に撮影し、きはめて少時間の運動も、何枚といふ圖に映し撮られしなり。

圖に示せし舞踏は、丁度一廻轉を寫したるものにして、其數六十五あり、時を費すこと僅かに一秒にすぎず。エヂソン氏の發明せる機械は、一秒間に四十六の圖を取り得べく、口繪の六十

五個の圖は、一秒半にだもすぎざる短時間の運動を寫せるなり。豈驚かざるべけんや。

されば　この寫眞器械は、一分間に、二千七百六十個の圖を撮ることを得べし。各圖は、四十六分の一秒間の運動を寫せるものといふべし。かくの如く電光の如く速に變り行く運動を寫すなれば、如何に迅速に紙帶（バンドボーバー）（普通の寫眞の硝子乾板の代りに、紙の乾板帶を用ゐるなり）を動かさゞるべからざるやを察せよ。これ、一時間五十哩の速力にて、廻りつゝあるにあらざれば爲し難きなり。

而り、唯迅速に紙帶を動かしたりとて、レンズを透し來る光線を制限せずんば　朦朧たる一汚點を印するに過ぎざるべし。これ、一秒間四十六の寫眞を得んには、一秒間に四十六回光線を遮り、暗箱に機會を與へざるべからざればなり。

暗箱の戸は、紙帶の急激なる運動休むときに開かれ、運動する時に閉ぢられざるべからず　この暗箱の戸を　或は閉ぢ或は開くと同時に、紙帶を迅速に運動せしむるは、實に至難中の至難にして、此の發明の良否は、只これを成し遂げ得ると否とに在り。

機關車の如きは、一時間五十哩を走り得べきもの或ひはこれ有らん。而して、一時間に十一萬五千回暗箱の戸を開閉する工夫ありと思ふや、勿論これ無かるべし。エヂソン氏は、實に此の一大障碍を排除して、發明せり。そは、四個の孔を穿てる平面板を、速に廻轉して、暗箱中に入る光線を中に導き、又は之を遮る工夫なり。勿論、齒車ありてやゝ複雜なり、人若しこゝの小圖を、器械の上に置き、大速力にて廻すときには、活人の運動と見べく、又之を幻燈に仕かけて、大きく映出するときは、尙一層興味を增すべし。（西曆千八百九十四年五月、バーネツトヒリツプ氏記）

右の記事に依れば、當時既に東京に於て、活動寫眞試寫會の行はれありしことも知られ、次で又「少年世界」第五卷（明治三十二年）の「一筆啓上」中にも、活動寫眞見物の一節が見え　かくいふ私もまた其の翌三十三年十月、初めて神田錦輝館にて、これを一觀したものである。

今、當時の記憶を辿り見るに、既に相當宣傳の行屆けることゝて、開場に先立ちて遠近より群集せる觀覽客　主として少年及び學生は、驚くべき多數に上り、切符（拾錢なりしと記憶す）賣場より入場口までは、眞に立錐の餘地なき有樣にて、先を爭つて切符を求めんとする者は、或は人波に押されて、下駄を奪はれ、草履をちぎられ、帽子を飛ばされ、甚だしきは人と人との肩に押し上げられて、悲鳴を發する者すらあり、正しく殺人的の景氣を現したのである。

勿論、當時未だ活動寫眞の常設館は無く、偶〻二ヶ月に一回、若しくは三ヶ月に二回の程度にて諸方の會館、寄席等を臨時の會場に充て、ちらし廣告、電柱の貼札等に依りて、場所、日時　入場料等を豫告するに過ぎぬ有樣であつた。

また映寫の寫眞は何れも極めて短尺にて、それこそアッと云ふ間に、一種目の映寫を終り、隨つて白幕を見る時間のみ長く、一夜の映寫種目も、多きは十數種を數へ、普通六時開幕、九時終了を規定とした。固より音樂の伴奏もなければ、辯士の說明なども亦頗る簡單に、只其の要點を述べるに過ぎなかつた。後に京都の横田商會が、前記の錦輝館を根據として、隨時興行するに際し、初めてピアノの伴奏を加へ、且辯士にも小學教員上りの頗る滑稽に長じたる人物を雇用して、此の方面に一新機抽を出すに至つた。

卽ち、件の辯士が、映寫に先立ちて、一通りの說明を終れる刹那、豫め隱し持てる小形の空氣喇叭を腰の邊に當てゝ、ブッと一發押鳴らす恰好が面白しとて、當時頗る評判を高めたものである。

次に、映寫種目は如何なる取材なりしかといふに、或は畫面一杯の一大頭骨を現し、眼を瞋らせ口を開きて、先づ觀客の注意を牽き、次で一本の葉卷を口にしながら、濛々たる煙を鼻孔より噴出させるもの、或は道に迷へる旅人が、野末の孤屋に一宿を求むるや、何ぞ知らんこゝは妖怪の住家と覺しく、忽ち家鳴り震動して、果ては家屋全體一大人面と化し、急速力に廻轉しながら、再び元の孤屋に還元する等、何れも幼稚なる舶來種と思はれた。

この頃は恰も北淸事變中にて、我病院船博愛丸は、戰地と宇品との間を往復しつゝあつた。卽ち宇品の棧橋に横着けせらるゝ同船を畫面一杯に寫し出すや、辯士曰く、「只今此の船の煙突より煙を吐き出します、其の煙にお目とめて御覽下されませ、首尾よく煙相見えますれば、御手拍子御喝采を」と云ふ間もなく、いかにも煙突の上部より、薄雲の如き煙一條、立騰るよと見る程に、忽ちパッと消失するといふ趣向にて、次々と取り替へ引き替へ、種々樣々の幾種類かを映寫する。すべて僅かに二三分にして終り、而も幕間の長きは映寫時間の幾層倍に達する有樣にて、今日より見れば寔に間の拔けたること夥しとはいへ、觀客中一人として不平を漏らすものなく、一映寫の終る每に拍手喝采を惜しまなかつた。

それより幾程もなく、神田南明館（後の南明倶樂部）裏の寄席――こゝは說敎源氏節の定席として知られ、後には風敎に害ありとて停止を命ぜられたと記憶する――にて、英杜戰爭の實寫會を催したことがある。

英杜戰爭といへば、英軍とボーア軍との間に、南亞を舞臺として大激戰を交へ、遂に英軍の勝利に歸して、トランスバールの金鑛を奪取し、英の勢力を南阿に扶植したる有名の戰爭にて、今次舶來したる十數種の寫眞は、何れも英軍に從軍せる寫眞師が非常なる危險を冒し、最新式の望遠鏡寫眞を利用して、遠方の戰況をも手に取る如く、逐一撮影せるものにて、眞正眞物間違なしといふ觸込であつた。

隨つて其の當日は、曩の錦輝館にも讓らぬ大入滿員の盛況にて、且また其の映出する寫眞は、曩

の錦輝館のものに較べて著しく鮮明であつた。先づ最初に英軍部隊の勇壯な突擊を寫し、次に敵軍の間諜を捕へ來り、これを樹幹に縛して、銃殺の刑に處するといふ慘虐なる場面を現し、觀客をして悉く舌を卷かしめた。されば其の密かに語り合へる批評　耳を傾くれば、「いかにもこれは望遠鏡を以て撮影したるに相違ない。さもなければ、かゝる實戰場を現出するなぞ、到底人間業には出來ないであらう」などと、感歎の聲を漏らすのであつた。

ところが、二三種寫して後に、急に場内の明るさを增し、待てど暮らせどいつかな後を映し出す氣配がない。かうなると觀客も、さすがに待ちくたびれて、「どうした〳〵、早く〳〵」などの、一二催促の聲さへ起る。ところへ係員が現れて、「實は只今誤つて貴重な寫眞を燒盡しましたから、後を續けることが出來なくなりました。殘念ながら今晩は、これにてお引取り下さい」との詫口上に、皆々さうかとばかり、其のまゝすご〳〵退場したのである。

これより又暫くして、淺草公園六區の電氣館は、連日活動寫眞を映寫し、こゝに常設館に等しいものゝ出現を見ることゝなつた。元來此の電氣館なる者は、電氣仕掛に依る、玩具の豆汽車を走らせ、或は隧道を潛らせ、鐵橋を渡らせ、若しくはシグナルを明滅させなどして、專ら幼稚者を對手に客を吸收したのであるが、目なれてはそれも珍しからず、どうやら不振の狀態に立至り、こゝに館名ばかり元のまゝに、活動寫眞の常設館として、再發足せるものと思はれた。兎も角も、晝夜ぶつ通し、いつ行つても見られるといふ、便利至極の活動館がこゝに生まれた譯である。

殊に此の館の入場料は、前例を遂うて僅か三錢といふ安値にて、隨つて觀覽席の如きも、じめじめしたる土間に、十數脚の板ベンチを並べただけに過ぎず、爲に大部分の觀客は、凸凹甚だしき暗がりの土間に、足もとの危險に氣をとられながら、或ひは背延びをしたり、又は子供を肩車にのせたりして、立見をするといふ狀態であつた。

されば分けても眞夏の日盛りは、換氣の設備なきまゝ、蒸されるばかりの暑さとて、辯士も半ズボン、襯衣一枚の輕裝で出場するといふ、頗る不態のものであつたが、それでも觀客はいつも場内に溢れ、近所の玉乘りや水藝等の、ひつそり閑としてゐるのに、こゝのみは日曜祭日など、切符を買ふにも順番を待たねばならぬといふ繁昌ぶり、而も此の情勢は早くも活動寫眞全盛の時代を約束するかに想はれた。

さる程に、日露戰爭の中期――卽ち、明治三十七年七月の頃、佛蘭西のエム・パテー會社は、今回の戰爭に際して、撮影技師を露軍に特派し、敵方より見たる最も貴重の實戰記錄映畫を作り、これを我が國へ送り來つて、歌舞伎座に於て公開することゝなつた。

蓋し歌舞伎座にて此の種の興行を催すことは、極めて稀有のことであり、隨つて又これが入場料も壹圓といふ高價を唱へしに拘らず、敵方より見たる實寫といふ點に多大の興味をそゝられて、

切符は忽ち賣切れてしまつた。

然るにいよ〳〵開幕となつて、先づ映し出されたのは、鴨綠江附近の激戰と思しく、兩軍共に、勇敢に戰ふ場面を展開したが、我が方の部隊は、眞新しき海軍旗を押立つるさへあるに、全員白の脚半を着け、且其の脛頗る長きと、其の動作甚だしく緩慢なるは、これ果して日本軍なるか、これ果して實寫なるかと、先づ疑はざるを得ないのである。

次　旅順口閉塞の場面に入り、黑闇々の夜の海上に物凄く探照燈の交錯するところ、例の廣瀨中佐が、福井丸の船上に杉野兵曹長の行方を索め、或は右し又は左しながら、遂に船と共に沈み行く光景　さてはマカロフ中將が、傷つけるまゝ海面に浮沈する有樣など、凡そ事實とは全然異なるものを映寫し、何人の目にも、實寫とは請取り難きものあり、最初の宣傳とは、似ても似つかぬ胡廬化し映畫にて、其の出場の人物も、恐らく全部佛蘭西の映畫俳優なるべく、而も我が國の事情に通ぜぬこと夥しく、其の實寫ならぬを暴露すると共に、忽ち惡評　下に葬り去られた。

併しながら此の時代には、既に不完全ながらも、出征兵士の送迎、戰地の生活狀況等も次々に製作せられ、更に一方には簡單なる新舊劇の類も加はり、外國物としては、前記のエムパテー會社より次第に長尺物の輸入せらるゝありて、其の進歩はいよ〳〵急調を示し、啻に淺草のみならず、市內の到る所に常設館は續出し、少年の娯樂機關として、重要の使命を擔ふことゝなり、一面には又教育上憂慮すべき惡質の映畫さへ輸入せられて、識者をして顰蹙せしめるに至つた。

第三節　自動・電氣鐵道・輕氣球

東京上野に開かれたる第三回內國博覽會は、少年に對して、奇拔なる設計に依れる幾種かの新事實を提供した。卽ちパノラマと共に、自動鐵道と、電氣鐵道とは、亦其の特產物に數ふべきであらう。例の「少年園」記者の解說に從へば、先づ自動鐵道に就いて記していふ。

自動鐵道は、原名を Switchback Railway といひ、米國ニトムプソン氏が、多年の工夫を凝らし、物理學上及び、機械學上より、惰力の效用を實地に應用したるものにして、今より五年以前（明治十八年）に、始めてフヒラデルフヒア府に建設し、大いに學者醫師の賞贊を得、終に歐洲各國に流行し、現に巴里には六個所、倫敦には五個所、其の他の諸都府にも、大概此の建設あらざるは無きに至れり。

今回、上野公園地內、東照宮大鳥居の左側に新築成りしものは、延長六十間、往復百二十間餘あり、双方に高さ二十二尺の停車場を置き、其の中間には、蜿蜒起伏せる波形の線路（往復兩線）を敷き、孰れも左右には欄を作り、一見すれば宛も波形の長橋を架したるが如し。

車臺は、凡そ一間程の長さなるべく、唯だ腰掛を設けあるのみにて、日蔽も圍もなく、其の左

右へ把手を作り、乘客は皆前に向つて腰を掛け、其の把手を持つなり。

斯くて車の發するや、客車自身の惰力に由りて、蜿蜒たる線路上を進行し、一昂一低、瞬間にして一方　停車場に達し、此處にて又初めの如くにして、別線路に依り停車場に還る。此の間の乘客の心事は、面白くもあり又怖しくもあり、忽ちにして九天の上に昇るが如く、忽ちにして九地の下に入るが如く、かの畫に描ける龍とやらんいふ者に乘りて、雲間を驅ける仙人は、かゝる趣あるなるべしと思はれて、少年諸子などには一寸愉快なる慰みなり。

と、說破して、自動鐵道の乘心地を如實に傳へて居る。

尤も此の奇拔なる鐵道は、何故にや、博覽會の閉場と共に破却せられ、而も其の後、何れにも再設されなかつた。其の理由は、恐らく我が國人、就中少年の趣味に適合せざりしか、それとも設備の大がかりなるに比して、收益のこれに伴はなかつた爲か、いづれかに原因の存せるものと想はれる。猶ほこれとは別に、恰も此〻當時、上野・秋葉原間に高架鐵道建設の企畫を起す者あり、相當眞面目に調査の歩を進めしに拘らず、何故か實現を見ずして終つた。

また、電氣鐵道――卽ち今日いふところの電車は、一旦博覽會に其の雛形を發表して以來、將來大都市の交通機關として、最も效果的の施設とせられ、當時既に民間有志によりて、上野淺草間の路面にこれが敷設を目論み、其の筋に對して許可申請を出願したるところ、設計書に不備の點ありしか、或は他に事情ありての事か、交通上危險の虞ありとの理由を以て、遂に却下せられし旨は、當時雜誌の報道に見て明かに知られる。卽ちこれを今日より想へば、眞に隔世の感を深からしめるであらう。

上野公園自動鐵道の景

博覽會に出陳せられて、諸人を試乘させたる電氣鐵道の雛形は、如何なる形式の者なりしか、試みに「少年園」の報道記事に徵すれば、

電車鐵道の、米國に於て、實地に施用されたるは、我が明治十六年六月、ヴアンデボール氏が、シカゴ府に於て敷設したるを創始とす。爾來頗る長大足の進歩をなし、終に今日三千里を隔てたる我が東都の公園に現出するに至れり。尤も此の電車は、見本として出品したるものなれども、諸般の構造より、運轉法に至るまで、總べて實用のものと異なるなし。

鐵路の延長凡そ四町あり、客車二輛を備へ、各〻十五馬力の電動機一個を据付けたり。兩側の腰掛は、廿二人を列し、五十人まで乘車せしむるを得べし。使用の電壓は五百ボルドを要し、

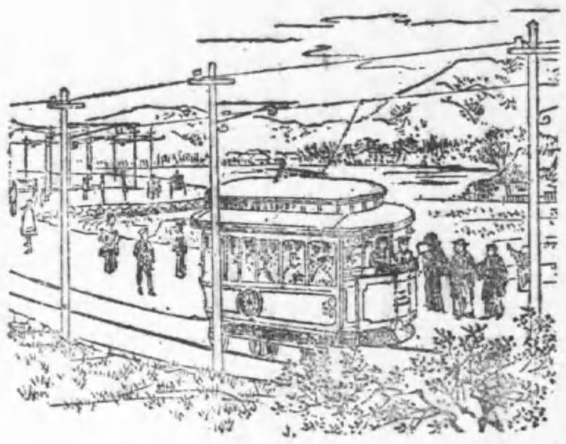
電氣は神田錦町にある東京電燈會社第四電燈局より傳送せり。本月六日皇太子殿下行啓の節、供奉員一同を供して召させられしを始めとし、翌七日より運轉を始めたり。

嗚呼、吾輩は曰へり、當代の少年諸子が、社會の舞臺を組立てらるゝ頃には、電氣は諸子の職工とならん、馬とならん、船とならん、武器とならん、彼れ雷公、古は神なりとて拜まれしも今は奴隷と化し去れり云々、而して是れ僅かに今を距ること七月の前に在り、文明進歩の速かなる、駟馬素より比するに足らず、蒸氣鐵道亦一籌を譲り了んぬ。

と說述した。此の記事は、多分中川霞城氏の手に成れる者であらう。然るにそれより五年の後、京都市に於て、第四回勸業博覽會の開催を機とし、初めて電車鐵道の敷設開通を見るに至り、これに關して霞城氏は、「小國民」第六年七號（二十八年四月一日）の誌上に、「京都博覽會週報」と題する記事の一部を以て、次の如くに報道した。曰く、

諸君の中には、明治二十三年の、內國勸業博覽會の時、上野に電氣鐵道の雛形ともいふべきものが布設せられて、公園の中を、人を乘せて往來したことを記憶し給ふが多くあるべし。否、唯だ其の評判を聞きたるのみにあらず　身自ら其の車に乘りて、馬も挽かず、蒸氣も働かざるに、自由に深林の中を走り去りたるに、一驚を喫し給ひしも少なからざるべし。

其の後電氣鐵道の事は、絕て聞くところ無かりしが、歐米の諸國に於ては、此の鐵道の布設漸く流行し、電氣の機關亦次第に改良の效を奏し、今は馬車鐵道など云ふものは、殆ど廢物たらんとする有樣なり。東京も早や馬車鐵道を廢して、電氣鐵道に代へ、市街縱橫の往來に便せんとの計畫ありと云ふ。



京都市內の電氣鐵道

今年京都には博覽會の開くるにより、遊覽人の便を思ひて、既に昨年來此の鐵道布設のことに着手したるが、昨今試運轉を試みたる區域もあり。博覽會開場の日までには、全部皆成就するならん。こゝに諸君に、其の一斑を窺はしめんが爲め、圖を揭げて想像の一助とす。

電氣機械の構造如何は、他日余自から實際を檢し、說明する所あらんとす。今日は唯だ其の景況を略報するに止むべし。

京都は、其の地これを東京の廣さに比すべきに非ずと雖も、然れども名所の多き、東京にも勝るほどなり。從つて東西南北、電氣鐵道の布設ありて、往來を自由にせば　巡覽の便利少からざらん、朝に本願寺に詣でてお剃刀戴ける田舍道者

も、去つて瞬く中に博覽會場に行くを得べく、嵐山に晝飯を食ひ、夜は伏見に宿を求むべし。

即ち七條の停車場より、一線は城南伏見に向ひ、一線は木屋町を經て博覽會場に向ひ、又一線は府廳の邊より御苑に向ふの類、大路到る所に、電氣車の飛び乘自由なるべし。

殊に車の美麗なる、京都は流石に山紫水明、風雅の土地なり、斯るものまでにも意を用ゐたるは、少年諸子親しく見て、余の言の欺かざるに驚き給ふべし。況して其の賃錢さへ、いと安價なるをや。

即ち、この二つの記事を相對して見る時は、明治廿三年の博覽會には霞城氏東京に在りて、親しく電氣鐵道に試乘し、また廿八年の博覽會には、京都に在りて、自から其の工事進行の模樣を視察し、特に畫工をして、完成後の想像圖を作らしめ、逸早く讀者に報道したものである。

蓋し博覽會は、いづれの時も、何等かの新規なる副產物を提供する例なるが、而も京都に於ける電氣鐵道の布設は、交通文化の向上に對して、最も偉大なる足跡を印したものと見るべく、其の東京大阪の二大都市に率先して、これを敢行したる一事は、正しく博覽會の齎したる恩惠と見なければならぬ。

さて玆に再び方面を轉じて、少年界の嗜好物を見るに、かの物理應用の玩具としての輕氣球が、明治廿三四年來、著しき流行を來たせる主因は、かのスペンサー、及びボルドウイン兄弟等の、相次で我國に渡來するあり、それ〳〵一大妙技を演出し、啻に少年のみならず、一般大衆間にも、亦相當大いなる感銘を與へし結果、時好を掴むに敏き商人等の、早くも此の點に着目せる結果と見るべきであらう。

無論其の精神的意味は異なれど、現代の少年間に、模型飛行機製作技術の盛行すると同樣、當時の少年は都鄙を通じて、或は酒精利用の紙製氣球に、又は單に薄美濃紙を採みて、これに數十本の吊絲を附し、下部に適當の錘石を結びて、高所より墜落せしめ、かのスペンサー等の落下傘に模して、其の技を競へるは、全く一時的の流行に過ぎざりしとはいへ、亦好個の科學的娯樂品たりしことは疑ふべくもなかつた。

英國生れの風船乘スペンサーの渡來は、かのチヤリネ曲馬團以上の大人氣を博したることは、掩ひ難き事實であつた。さればこそ「小國民」記者の如きは、畫師を伴うてこれが終始を觀覽し、口繪に挿畫に、其の全誌面の約三分の一を塡めて、詳細にこれを報道したるに徵するも、如何に其の評判の高かりしかを想像するに足りよう。

次の一節は、少年園」記者の目に映じたる、スペンサー演技の見物記である。

初め横濱に於て、其の後神戸に於て、其の後皇城の下に於て、三たび輕氣球を揚げて、三たび巧みに中天より飛び下りたるスペンサーは、去る廿四日（明治廿三年十一月）に、上野公園博物

館内に於て、又其の技を演ぜり。

此の日は、無類の好天氣にて、風は霜餘の枯葉をも搖かさず、雲は大空に兎の毛ほども見えざりければ、見物の人幾萬人といふを知らず、廣き東臺の岡の上は、人もて埋めたるばかりなりき。

前々日より準備せしことなれば、一時頃に至つて、瓦斯を球に塡め了り、二時頃より、試しの小さき人がたの輕氣囊を揚げ、二時半頃に、スペンサー氏球下の太き綱に腰打掛けて、飄々と上り始め、見る〳〵二三千尺の上に昇り、今は人の形も無く、僅かに小さき球のみ見ゆるまでになりし時、忽然何か球より離れ落つるものありと見えしが、瞬く間に傘開きて、フハリ〳〵と落ち來りぬ。これぞ卽ちスペンサー氏なり。

氏は、三千尺ばかりも上りし時、球に付きたる綱を離れ、球の傍にさげたる、所謂節落傘（パラシュート）を捉りて飛び下りしなり。節落傘は、絹にて張りたる、直徑三間ばかりのものにて、周圍に絲をつけ、其の形殆ど花火にて揚げる傘の如し。其の絲の端に捉まりて、下れば自から開くなり。

かくて氏は、無事に根岸の新坂下に下り、直ちに歸り來り、簡單に其の模樣を演說して全く畢れり。輕氣球は人の落つると共に、空際にて倒になり、瓦斯自から散じて下り來る仕掛となり居たれば、氏に先んじて、淺草廣德寺前に落ちたり。此日用ゐし球は、左程大なるものにあらず、徑二間もありしが、下には籃なし。一時上りて直ちに落つるもの故、極めて簡單なるものなるべし。下よりこれを見るに、何の造作もなさゝうなれば、此後我國にも、物好に眞似る者あるべし。又此の頃横濱に來着せる米人ボルドウイン氏兄弟は、スペンサー氏よりも、一層妙手にて、一萬尺の上に達し、空中にて種々の技を演ずる由なり、遠からぬ內、東京、神戸、大阪等にて興行するといふ。輕氣球乘り流行の年といふべし。

と記して、次で來るべきボルドウインの妙技を豫告してゐる。而も後者の技術に關しては、早くも其の翌月發行の誌上に、これが實演の模樣を、次の如くに報道した。

スペンサーに優る數等の風船乘來れりとの評判、都下を動かすばかりに高かりければ、如何なる技倆にや、一日も早く見まほしきものなりと待ち兼ねしに、愈々去る八日（十二月）に、上野公園博物館前の廣場に於て其の伎を演ぜり。

此の日も幸ひに好天氣なるより、見物人の群集前日に彌まさりて夥しく、門の內外の騷擾、人浪を打ちてどよめき合ひ、老人婦女子は推倒され、踏潰されんかと思はるゝばかり、やがて四時頃に至りて、ボルドウイン氏は、廣場の中央に建てたる高さ七十尺の櫓の上に昇り、大なる掛聲と共に、身を倒にして飛び下り、半空にて身を交し、豫て設けたる網の上に落ち來り、悠悠として元の座に立戻れり。

これより櫓の下にて氣球を膨脹させ、凡そ三十分ばかりにして全く氣を充て了りぬ。但し此度の氣球は、水素瓦斯などをば用ゐず、唯だ杉薪を焚きたる熱空氣を煙と共に滿てゝ、瓦斯の代用としたるに過ぎざりき。されば氣球を膨脹する時間は僅かなりしが、瓦斯より重き爲めにや上騰はスペンサー氏より稍低きかと思はれたり。

かくて、氣球の膨脹十分に達するや否や、飄々然として、氣球は中空に昇りけるに、ボルドウイン氏は三丈の長き絲の端に、兩手を懸けたるのみにて、ツル〳〵と二千尺ばかりも昇りしかと思ふとき、其の絲をたぐりて氣球の下の横木に攀ぢ上り、僅かに足の先を掛けて兩手をはなし、倒に大の字の狀をなして、猶も飄々と上昇せしが、忽ち氣球に繫はる綱を放つよと見えし間もなく、其の身は節落傘と共に、勢ひ强く落下せしかば、アハヤ傘は開かざるか、彼身は粉齏せんかと、觀る人胸もときめきて見る間に、傘十分に開き、フハリ〳〵と風にあふられて、日暮里村の畠中に落下し、三四十分時にして、門内に還り來り、姑く休憩の後、謝詞を述べて、全く其の了りを告げたり。

スペンサーが用ゐたる氣球は、其の色卵色にして、網を以て其の外圍を包み、節落傘をば球の側に釣り置きしが、此度用ゐしは、スペンサーのよりも、遙かに大きく、紺と白茶との縫合せにて、網をもかけず、節落傘をば球下に吊し置きたり、球は人に離るゝや否や倒になり、黑煙を吐きつゝ下りしが、根岸の邊に落ちたりといふ。

以上が、ボルドウインの演技の大要である。スペンサーといひ、ボルドウインといひ、これ素より一種の輕業師に外ならず、隨つて又敢て驚駭すべき程の者でもあるまい。而も聞く所によれば、これが入場料は、一圓の高價を唱へしといふ。謂ふに明治廿三年代の壹圓は、今日の貳拾圓以上に匹敵するに拘らず、惜しげなくこれを投じて觀覽したる都人の好奇心は、いかに彼等の人氣の高かりしにせよ、確かに一奇とすべきである。

一方、主なる少年雜誌は、各自思ひ〳〵に、其の實況を報じ、又は一般輕氣球の性能、價値、若しくは其の歷史的經過は固より、或は玩具風船の製作法、或ひは使用上の注意等、風船を主題としたる多くの記事を採入れ、且數々の挿畫を加へて、誌面に異彩を放たせ、以て尙武的科學思想の養成に勗めたる一事は、正しく雜誌記者の任務を果し得たものと云ふべきであらう。

第四節　電花飾と觀覽車

京都の第四回博覽會は、日清戰爭最中に其の計畫を樹て、平安奠都千百年と、戰勝を記念する意味によつて開催せられ、次で明治三十六年、日露戰爭の直前に、第五回內國勸業博覽會は、大阪天王寺附近に開かれた。產業の進步開發は一日も緩うすべきにあらず、戰時戰前の別なく、敢然とし

てこれを開ける一事は、確に綽々たる餘裕を示せるものと云へよう。

さて、第五回勸業博覽會には、いかなる部面に新味の掬すべきものありしかといふに、それは主として電氣の利用にあつたと見られよう。即ち博覽會の重なる建物にイルミネーションを點じて、夜の美觀を現出したるは、此の博覽會を以て嚆矢とする。尤も此の新しき計畫も、經費其の他の關係に依れることならんも、開場中毎夜點火するものではなく、たゞ土曜日曜の夜に限りて行はれしに過ぎぬ。されば又博覽會見物の人々も、同じくは夜の美景に接せんことを望み、かくてイルミネーションの評判は、此の博覽會唯一の呼び物とせられ、新聞にも雜誌にも、嘖々宣傳せられたのである。

恰も此の當時、イルミネーションの日本名――例へば、シネマトグラフに於ける活動寫眞、若くはパノラマに幹畫の文字を當つると同樣、萬人に通ずる日本名を選ぶ必要を感じ、種々考慮したる結果、國府犀東氏（太陽記者）の如きは、或は電光飾、又は電花飾の術語を案出するに至つたものの、不幸にして多く行はれず、而も後年日露戰爭の時代に入るや、既にイルミネーションは、一般語として廣く使用せられたものである。

また、此の時代の電氣燈は、俗にいふエヂソン電球（カーボン）を用ゐしことゝて、後のタングステン電球に見る如き光力も無く、且其の燈光も、やゝ赤色を帶び、ために折角のイルミネーションも、濛氣立罩むる夜は、未だ完全に其の照明の效果を擧げ難かつたが、兎も角も舊時代の提灯とは異なり、極めて麗美の光線によつて、黑闇々の裡に、壯大なる諸建造物を顯現し、不夜の偉觀を呈して、人目を眩せしめた。

博覽會に於ける電光の利用は、啻にこれのみでなく、其の餘興の一として、カーマンセラなる洋人によつて演ぜられたる火焰の舞も、亦頗る好評を博したもの、こは古來行はるゝ布晒しに似て、而も一層美しく、一層見事のものであつた。即ち暗黑の舞臺面に、金銀珠玉を鏤めたる輕羅を裝へる一美人を現し、微妙なる音樂に連れて、縱橫無盡に羽衣を開展し、收縮し、且飜轉せしめ、これに對して一方より、其の色調を異にせる電光を照射し、滿身忽ち燃ゆるが如き赤光を放つかと見れば、一變して直ちに紫色を現し、須臾にして綠に又は黃に靑に移り、五彩絢爛の美と、千變萬化の妙とは、其の舞踏の巧拙は別として、驚くべき光色の變化により、觀者をして陶醉の三昧に入らしめた。即ちこゝに至つて、二十世紀は電氣の世界てふ通語の、眞に人を欺かずと知られた。

然るに其の後、イルミネーションは、大都市の高層建築に設備する者次第に多くなり、日露戰爭時代には、一層其の隆盛を見るに至れることは既に記せる通りである。

勿論この當時は、未だ一般の商店にも家庭にも、電燈の利用遍ねからず、就中門燈の如きは、俗にいふ瓦斯燈屋によりて、朝の油さしと、夕夕の點火とが行はれ、商店々頭の照明は、電燈と瓦斯

燈とを併用する者が多かつた。其の理由は、停電其の他の事故のため、電燈の消光する場合多きに對し、瓦斯燈には殆ど其の缺點なかりしためかと想はれる。或は曩に帝國議會議事堂の燒失は、漏電の結果なるやに噂せられ、隨つて其の發達を阻害したる事も亦見逃し難い點であらう。

現に博文館の如きも、編輯室も營業所も、專ら瓦斯燈を設備して夜業を行へる有樣にて、其の瓦斯燈なるものも、今日釜下に燃ゆる瓦斯火に等しき裸火とて、光力四方に分散して一所に纏らず、單に暗室を照らすといふのみ、ために燈下に在りても、只瓦斯の噴出して激しく燃燒する音耳にひびき、而も其の光力は必ずしも强しと云はれず、殊に裝置未熟のためにや、屢〻器具の部分に緩みを生じて臭氣を漏らす煩はしさに、これを防がんとて或は有合せの糊を塗附するか、又は鬢付油の類を求めて、漏洩の個所を修理し、辛くも一時を凌ぐといふが如き、頗る厄介千萬にして、夥しく手數のかゝるものであつた。

丁度この頃の出來事なりしやに記憶する。或日二三の新聞紙上に、「今夜六時を期して、京橋橋畔に立ちて、南の空を見られよ、高く天心に當りて、一大奇觀を呈するであらう」と、かういふ意味の奇妙不思議なる廣告を發表する者があつた。而も只それだけの文言のみにて、廣告主の名も所在も又其の目的も不明であつた。

さなきだに物見高き市井の人々は、何れも怪異の目を見張りて、さては如何なることの起るやらと、日の暮るゝを待ち兼ね、夕食さへそこそこに、老若相率ゐて、吾も吾もと橋畔に群集し、時ならぬ人垣を築くに至つた。

已にして日は全く沒し、漸く豫定の刻限に迫ると共に、突如として屋上高く、暗黑の中に赤色のイルミネーションを以て、巨大なる「仁丹」の二字を現出し、さながら虛空に浮べる如く、忽ち現れ忽ち消え、變幻の妙を極めて群衆の膽を奪ふや、萬人拍手を以てこれを見守り、而も刻々に人數を增し、果ては交通上の支障を來し、遂に其の筋の注意を受けしやにも聞き及ぶ。

かくて後年に至り、宣傳を旨とする各種の藥品化粧品店は、競つて市內樞要の地域を占め、五彩のイルミネーションに依る夜の廣告塔を建設し、到る所に不夜城の美觀を顯現したるは、かのネオンサインの流行以前に於ける、卽ち明治末期に見たる特殊の廣告術と云ふべきであらう。

兎もあれイルミネーションの進化は、電球の改良と相俟ちて、次第に其の面目を向上し、殊に日露戰後に於ける東京博覽會の當時には、これを大阪博覽會のイルミネーションに較べて、格段の發達ぶりを示し、煌々たる電花の光を不忍の池面に映して、龍宮城を想起せしめ、人をして夢幻の世界に誘引せしめ、且其の裝置の手法にも亦一段の工夫を凝らし、電球其の者を露出することなく、專らこれを內側に祕めて、光力の溫柔を旨とし、而も照明の效果を著大ならしめるに至つた。

さて、明治四十年三月東京上野に開催せられた勸業博覽會は、前例に從へば第六回目に相當する

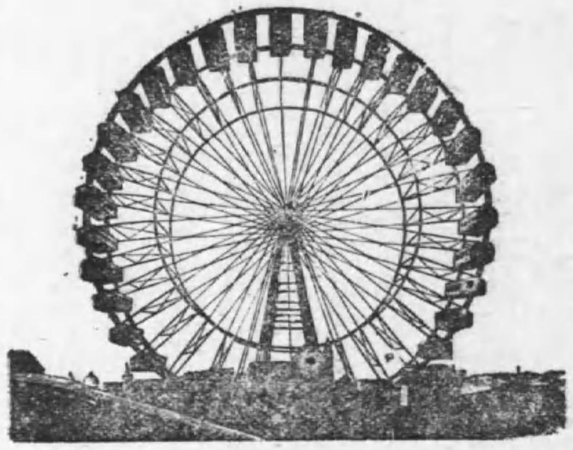
も、もはや其の回數を追ふことなく、只東京勸業博覽會と稱呼せられた。此の博覽會に於て少年の心目を娛しませたるは、水族館の設備の完成したることゝ、觀覽車の出現とを擧げねばなるまい。觀覽車なる者は、明治廿六年のシカゴ大博覽會に於て、初めて其の設置を見たるものゝ如く、而も我國に於ては今次の博覽會を以て嚆矢とする。

これより曩、「小國民」の誌上に、『笛蟻須大車輪（フエアリース）』と題し、シカゴ博覽會の一奇觀に就いて、最も詳細にこれが全貌を紹介する人あつた。卽ち其の記事に依れば、

先年、佛蘭西の巴里に於て、大博覽會を開きし時、築き建てたるエツフエル塔は、大奇觀なりとて、大いに世人の目を驚かせり、今は、これにも劣らざるもの、亞米利加國の近湖府世界大博覽會に現はれたり。實に笛蟻須大車輪なり。其の構造の雄偉壯大なると、工夫の非凡なるとは、實に人目を驚かせり。

此の大車輪は、世界大博覽會の目印となり、新たに博覽會見物に來る人々は、遠くこれを望んで、「かの大なるものは何物ぞ」と、叫び出さゞるは無し。さて、此の車輪を建設するに就いては、十二ケ月の工を費し、本年（廿六年）六月中旬に至つて、初めて出來上りたるなり。而して廣く公衆をして乘車せしめ、運轉を始めしは、年中の最長日といふべき同月廿一日なりし。

この車輪の直徑は、四十二間にして、其の周圍の全長は二町十八間あり。其の幅にても五間に及べり。而して恰も尋常の水車の車輪の如く輪轉せしむるの仕掛にて、尋常の地面より高さこと、一丈五尺の地盤に据ゑあるが故に、其の頂上に於ける乘客は、正しく四十四間餘の高所に登りて、四方を見渡すに異ならず。



フエアリス大車輪

此の車輪は、其の大さ各相均しき二個の車輪より成り立てるものにして、其の相隔ること六間餘あり。其の間に横棒ありて、互に相聯結せり。而して此の二個の車輪の外輪は、何れも鐵材にして甚だ太く、方形にして中空なり。且其の外部は凹形を爲せり。又此の車輪の內部に距ること四十尺の所に、更に他の車輪二個あり、其の材料は、外部のものより稍輕小なれども、横棒にて互に相聯結せしむる一點は同一なり。

此の車輪の外部には、總計三十六臺の客車が懸り居れり。其の客車と客車との隔りは、何れも皆同じく、客車は各〻長さ四間半、幅二間一尺、高さ一間半なり、其の材料は悉く鐵なれども、木材を以て之を蔽へり。此の客車には、何れも一

の入口と、左右に五個の硝子窓あり、又客車毎に、四十脚づつの椅子あり、此等の椅子は、何れも皆張金製にして、回轉せしむるの仕掛あり。

客車の重さは、何れも十三噸づつあり、これに乘客を滿たしむる時は尙ほ三噸の重さを加ふ。又客車は何れも皆鐵棒にて支へられつゝ、車輪の外部に懸り居るなり。此の鐵棒といへるは、客車の屋根を貫けるものにして、其の大さ直徑六寸半あり、客車は鐵棒に支へられつゝ、其の昇降するに從つて、適度に其の位置を保ちゆくものなり。又客車毎に、必ず一人づつの車掌あり、戸の開閉を掌り、且途中乘客に對して、眺望に就ての說明を爲す。

客車の窓には、一々鐵格子の設けあり、これは乘客中、發狂者ありて、之より躍り出でんことを恐れ、其の他一時の驚愕より、不慮の事變出來んを恐るゝが爲めなり。

この車輪全體（客車乘客をも含めるもの）の重さは、一千二百噸の甚だしきに及べるが故に、之を支ふるものは、固より堅固ならざる可からず、乃ちこの車輪を支ふるが爲めに、二基の高塔を建設せり。この高塔は、鐵製框立にして、尖塔形を爲せり、而して其の大さ如何といふに、各高さ廿三間餘にして、其の礎石の所は、長さ八間二尺、幅六間四尺、其の頂上は、方一間三尺なり。又この塔は、各四個づつの柱脚に支へられ、此等の柱脚は、再び無數の小柱脚に支へられ、何れも皆鋼鐵製の横棒を以て、互に相聯結せる柱脚なり。

此の車輪の周邊には、深さ六寸にして、互に一尺八寸づつ隔りたる齒あり。此の輪齒の刻み行くに從つて、回轉せしむる仕掛なり。而して發動のもとは、一千馬力の蒸氣機械にて、これを運轉せしめんが爲めに、車輪の下底に、直徑各〻一間半づつの車輪二個あり。此の車輪の廻し方如何に依りて、右へも左へも、早くも遲くも、これを掌る所の技師の掌中に在り。

斯くて、此の大車輪が全く落成し、始めて回轉せしむるの當日に乘りたる人の咄を聞くに、當日は曉々たる一二回の音樂と共に回轉を始めたり。而して其の初めは、回轉極めて徐かにて、最初の程は、自から殆ど回轉し居ることを知らず、又如何なる響をも聞かず、只何となく、地球がみす〳〵沈み行くかと思はれ、終に甚だしく地球に遠ざかり來り、既に其の頂邊に達したり。

此の時、頭を突き出して、渺茫たる廣き四邊を回顧せしに、獨り近湖府全部を眼下に瞰るのみならず、四邊數里間の平原をも、一望の中にあり〳〵と集め得、或は下し瞰て、鋼鐵製の無數の輻が、宏大なる車軸に輳まり居るを見、此の笛蟻須車輪の高さ如何、地上を距ること如何等を見、又降り來りては、世界大博覽會場を明細に見るを得、遙か彼方なるミチガン湖は、一點の白帆かと疑はれ、眼下のミツドウエー、パレーサンス市街千百萬の人民は、さながら小動物の蠢くに似たり　其の奇觀實に言語筆紙の能く盡し得べきにあらずと。此の大車輪の乘客中、

臆病者は、始めて數層樓の昇降機に乘りたる時の如く、甚だ恐怖すべし。然れども假令大恐怖を爲すにせよ、片心には、壯快なる感じを帶ぶるに相違なかるべし。今は詩人文人などが、此の大車輪の事を、詩文に作らんとて、頗りに苦心なし居る者あり、或は既に出來上りたる詩文もありといふ。

右の如く頗る詳細に亘りて、此の大車輪の構造と、其の效果とを縷述して餘さず、こは恐らく米誌に掲載せられし記事の飜譯と見られ、米人一流の誇大的宣傳の多分に加味せらるゝことは、文中到る所に窺ひ知られる。兎もあれ我が少年に對して、新しき知識と興味と示唆とを與へしところ、少年記者の責務として、蓋し當を得たるものである。

而も此の笛蟻須大車輪と、略同樣の規模に依るものが、東京博覽會の附設物として、竹の臺の一角に居然として聳立し、全市の甍を眼前に瞰下するのみならず、遠くは房總の山々、東京灣の千波萬波、さては筑波、富士、箱根、秩父甲信の山嶽をも一眸中に收めしめたる者、これが卽ち觀覽車であつた。

勿論其の乘客の大部分は、地方より上京したる人々と、都下の少年とによつて占められ、開設の當初は、相當の效果を收めしこと疑ひなきも、實はかの米人の試乘者の述べし如き、膽を冷すほどの代物でもなく、其の頂邊に達して四方を展望するも、淺草十二階の範圍を出でず、何等目を愕かすに足るものなく、殊にこれが設立に夥しき費用を要したる割合には、其の乘客思ひの外に多からず、後には眞に寥々たる觀を呈したるものは、恐らく既に此の種の者に對する少年の興味の減殺を物語るものであらう。

猶ほ、觀覽車は、博覽會閉場の後、淺草公園の一邊に移され、例の鳴物入にて客を招きしに拘らず、依然として不振を續け、遂にいつともなく撤し去られて、其の姿を失ふに至つた。

また、此の博覽會の呼び物の一に數へられたる水族館は、當初より二三の專門家を顧問に仰ぎ、教育的價値を主として計畫せるものだけありて、近海產の雜魚のみならず、北海の鰭脚類をも集め來りて、其の活躍の狀況を示し、且つ少年のために、圖版入の解說書を配付したる如きは、好個の思ひつきにて、其の用意の尋常ならぬを思はしめた。

元來水族館は、明治三十三年の頃、淺草公園第四區の地域を卜し、新しく一館として設立を見たるが其の初めにて、それより以前は、上野動物園の一部に、魚のぞきと稱する不完全なる水槽を存するに過ぎなかつた。

魚のぞきの設備を見るに、こは甚だ小規模の隧道式地下室の片側に水槽數個を構へ、天井より光線を射入させ、水槽中にはそれ〴〵區劃を設け、こゝに金魚の各種、緋鯉眞鯉、さては鰻鱔等を放養し、硝子越に觀覽せしめる程度に過ぎず、設備の關係上、海產魚類は勿論只の一尾も見られなか

つた。

然るに淺草水族館は、專ら海產動物を放養し、且これに要する溜水の如きも、遠く品川沖より運び來り、電氣裝置によりて絕えず交流せしめ、酸素の供給を完全ならしめたるため、各魚類は活潑に運動して、觀者の目を娛ましめたものである。

例へば巨大なる眞鯛、縞鯛、奇怪なる鮫の類、又は砂中に隱身する鰈、小枝に密集して紅葉の錦を織りたらんやうなる紅おこぜ、圓球を描きて群遊するごんずい等、平素其の實際の生態を知り難きものも、一度此の館に足を運ぶ時は、大小珍奇の魚屬、悉く眼前咫尺の間に相見え、少年の教育上に及ぼす效果は、まことに尠少ならぬものがあつた。而も東京勸業博覽會の水族館は、淺草のそれに較べ、其の設備は固より、收容魚屬の種類の多きこと、固より同日の談ではなかつた。ただ惜むらくは、其の閉場と共に悉く破却せられて、永く存續を見なかつたことである。

第五節　交通・食品・照明

日露戰爭前の東京市內の交通機關は、主都の面目に對しても、洵に不備のものであつた。例へば鐵道馬車（東京馬車鐵道會社經營）の、新橋を起點として、銀座京橋の大通りを經て日本橋本石町に至り、こゝにて淺草線を分ち、本線は萬世橋を渡りて上野に、更に淺草を經て日本橋本町より再び本線に入りて新橋に復歸するもので、本石町線と本町線とは、共に單線運轉に依つた。顏面の兩側を掩はれたる二頭の馬相駢び、運轉手の鳴らす鈴のひゞきに連れて、ポク〳〵と步調を揃へつゝ駈け過ぐる有樣は、見るからに悠長なる光景であつた。

元來此の鐵道馬車には、上等車と普通車との區別を設けて各臺交互に運轉し、上等車は內部の腰掛もテレンプ製にて、且車內に廣告のビラもなく、著しく淸楚なるに反し、普通車は腰掛も粗末に車內一杯に各種の廣告紙の類を、目まぐるしきまでに張下げ、乘客の混雜も亦免れなかつた。

此の上等と普通との區別を明かならしめるために、夜間は靑色（上等車）、赤色（普通車）の照明に依つて示され、またこれを操縱する車掌馭者等も、年功によりて帽子の白線を加へ、其の最も多きは、五筋にも達すれど、新雇用者はたゞ一筋に限られてあつた。

「この馭者は一筋だから危險だ」

「イヤこれは五筋だから先づ安心だ」

と云ふやうに、帽子の線の多少に依つて、乘務員の經驗の有無を判定したもので、線の多い馭者の車に乘る客は、大いに安慰の感を懷いた。また乘車賃は、普通一區三錢、上等四錢に定められてゐた。

「君！　今來るのは上等だ、後のに乘ることにしよう」

三錢と四錢との差は、當時の物價からも、相當に考慮を要する問題であつた。何故なれば、假に上野より、新橋に赴かうとする場合、上野萬世橋間一區、萬世橋日本橋間一區、日本橋新橋間又一區と、都合三區に分たれてあるので、これを通し切符にすれば、普通九錢、上等十二錢、正に此の間三錢の差があるからである。

次に、新橋より品川へは汽車に依る以外手段無かりしかと云ふに、こゝには又新橋を起點として品川驛に達する品川馬車鐵道なる者があつて、簡易なる單線の鐵路上に、小型の車臺を走らせてゐた。勿論此の線は乘客少く、隨つて車數も多からず、乘車賃は通し六錢、正しく汽車並であつた。

以上記するところの線路が、卽ち東京市內交通の基幹にて、其の他重要の地域には、俗にいふ圓太郎馬車が喧しく喇叭を吹き立てながら、神田萬世橋畔より、今川小路を經て、九段下に達するもの、或は板橋方面に向ふ者、淺草千住間を往復するもの等、ほんの二三を數ふるに過ぎなかつた。

試みに眞夏の一夜、萬世橋畔のアカシヤの綠濃き樹蔭の共同椅子に腰を下し、葉末より起るらしき凉氣を滿身に占め、目を神田日本橋方面にやれば、上野をさして進みくる鐵道馬車の、靑と赤との頭光をかゞやかせて、ひつきりなしに鈴を鳴らしつゝ、次々に此方をさして進み來る光景は、又となき美しいものであつた。併しかうした樹下の凉み話にも、電車に對する憧れは絕えなかつた。

「近頃聞く所によれば、こゝ一兩年の間には、東京にも電車が敷かれるといふではないか、京都ではもう七、八年も前から運轉してゐるのに、東京はなぜもつと早くしないだらう」

「本當だ、さういへば此の次の日曜日には、川崎まで電車に乘りに行かうか」

と、こんな相談さへ持ち出される。實際此の當時の者は、電車に乘つて見度いと思へば、どうしても川崎、穴守にまで行かねばならなかつた。而も川崎大師と穴守稻荷とは、啻に信仰の點ばかりでなく、都人にとつては此の上もなき遊覽區域であり、そして其の地を踏むには、電車を利用するのが便利であつた。

勿論、こゝまで行くのには、新橋から汽車に乘つて川崎驛まで走らねばならぬ。この新橋驛は、東京驛の出來上るまで、東海道線の始發驛とて、隨つて日本第一の大停車場であつたが、それでも步廊は只一つ、東海道線發着の二線だけ、他に赤羽線の步廊もあつたが、この方は列車の回數も少なく、いつも雜沓したのは東海道線の步廊だけ、兎もあれ只これのみにて十分に旅客を呑吐したといふのは、今から思ふと全く夢のやうな話である。

さて、大師穴守間の電車、これは又頗る風變りのもので、車室の三分の二が普通席、殘りの三分の一が上等席に區分されてゐる。偶〻乘客の少いのをよい事にして、上等の腰掛に腰を下さうものなら、忽ち增錢を徵收せられ、それこそ飛んだ失敗を演じて、オヤ〳〵と頭を搔くやうな例も、亦珍しくなかつた。

兎角する間に、東京市内にも、神田橋日比谷の區間に、初めて新線路が開通して、綠色の美しい車體のものが動き出した。これは本通りを走る鐵道馬車とは關係なく、東京市街鐵道株式會社の手に、今度新しく計畫を立てられたもので、たしか此の區間片道三錢、往復五錢であつた。

此の電車の出來た當座は、乘車切符も一々車外で賣つたもので、神田橋の袂の左側に、肩から鞄をかけた社員に申出て、片道なり往復なりの切符を賣つて貰ふ。大部分の乘客は、只「電車といふものに乘つて見る」のが其の目的であるから、大手門、馬場先門を夢心地で通り過ぎて、さて日比谷の終點に着いたところで、此の先どこへ行くといふあても無く、其のまゝ又神田橋行に乘つて、濠端の一邊を素通りするだけの、極めてあつけないものである。

其の頃今の東京驛の附近は、廣漠たる一面の草野原で、ところ〴〵に建築用の素材らしい大きな切石が積まれてあるばかり、到る所に飛蝗や蜻蛉が群飛するので、附近の子供達にとつては、此の上もないよい遊び場である。ここは卽ち俗にいふ三菱ケ原、可なり物騷な噂もあつた。

丁度紅葉山人の胃癌に惱む頃であつた、「くさのわう」といふ一種の有毒植物は、いはゆる毒を以て毒を制すとやら、これが胃癌の特効藥とか、誰がいひ觸らしたものか、當時の新聞に麗々しく發表されたので、山人を崇拜する地方の愛讀者から、態々この草を採集して、送り越したこともあつた。然るに、何ぞ知らんこゝ三菱ケ原には、彼所にも此所にも、到るところに「くさのわう」が黃色の四瓣の花を開いで、茂り合つて居たことは、今も記憶にはつきり印されてゐる。

さて車内の、乘客の會話に、一寸耳を傾けると、

「この原の中央には、もう何年か後に、大停車場が建てられるさうだ、何でも今の新橋では狹くて不便だから、すばらしい大きなのが建つといふではないか」

「さうなると靑森から下の關まで、一直線に突つ走ると云ふ譯で、こゝに出來るのが中央停車場となるさうです、オヤ、もう神田橋の終點に來ましたネ」

何所で聞いて來たものやら、知つたかぶりの耳新らしい噂話を、さも得意氣に喧傳する人もあつた。

此の街鐵の出來て間もなく、本通りの線路にも亦電車が通じるやうになつた。尤も全線同時に電化するといふことは、相當困難の伴つたものと見えて、折角架空線は張られながら、はじめ暫くの間は、電車の次に馬車、馬車の後に電車といふやうに、一臺置きとか二臺目位に走らせて、一時の便法を講じたのである。

馬車を廢して、電車一本立にするならば、速力も可なりに出るであらうも、電車の行手には、既に老態した廢馬が、重い車臺を引張つて、よた〳〵走つてゐることゝて、電車も亦それにつれて、適當の遲さで動かねばならず、隨つて乘客は又停留場以外のどこでも、飛乘り飛下り勝手であつた。

此の飛乘り飛下りといふことも、馬車鐵道の時代には極めて容易の藝當で、走つてゐる車を追ひかけて乘つ込んだり、又はひらりと身を交して巧みに飛んで下りることも、一寸の習練で造作なく仕てのけたが、日を經て電車の車臺が揃ひ、同時に馬車は廢止せられて、電車一本立になると、いよ〳〵固有の速力を、思ひのまゝに發揮するのに、それを無視してこれまで通りに、飛乘り飛下りをやつたが最後、意外の反動を受けて振り落され、頭を大地に打ちつけたり、膝頭にすりむきを作るなどは、又當然の報いであらう。

度重なる事故の頻出に、會社も大きに當惑して、「飛乘り飛下り絶對禁止、停留所以外乘降お斷り」の注意を出すに至つたものゝ、氣の逸い若者達は、その注意には目も呉れず、飛乘り乘降りの羽目は、容易に已みさうも無かつたのである。

ある時、埼玉縣の幸手〻から、久しぶりに原稿を携へて、態々上京した嵯峨廼屋主人（矢崎鎭四郎氏）が、どうしたことか顏面手足のところ〴〵に、或は内出血したり、又はすりむきを拵へたりして、顏をしかめて入つて來た。見るからに痛さうなので、

「どうなされましたか、ひどいお怪我で……」

と、取敢ずかう問うてみると、

「イヤ、電車から飛び下りようとして、ひつくり返りましたよ」

と、痛さうな中から苦笑して、答へるので、

「止まらないのにお下りなさいましたか、危なかつたですな」

と、皆が寄つて勞ると、

「エ、、大丈夫だらうと思つたから、ソツと下りて見ましたが、何分速力が早く、ひどい反動で、こんな目に逢ひました」

とのことで、これなども電車事故の一例と見られよう。全體此の矢崎氏は一見田舍漢らしく、大形の漢錢を紐に括り着け、革の財布を首から懸けてゐるところは、どう見てもこれが露西亞文學の第一人者とは信じられぬ程であつた。

却説、恰も日露戰爭の最中に、今度は外濠を一周する電車が、又新しい會社によつて生れ出た。此の外濠線は、比較的閑靜な土地を往復するので、それだけに乘客は少なかつたものゝ、一ばんあとに出來た爲か、從業員は揃ひも揃つて、當時新制の軍服に倣ひ、例のカーキー色の制服を着用したもので、三會社中最も進步的であり、車臺の設備なども著しく他に優つてゐた。

かうして東京市内には、本線の外に、街鐵と外濠と、都合三會社が、それ〴〵の區域を分擔して交通の完備圓滑を圖つたので、かの圓太郎馬車の如きは、いつとはなく影を潛め、長年耳に馴れたあの喇叭は、豆腐屋の賣子の口に吹かれるやうになつた。

ところが、世の中にはまた抜け目のない人があつて、神田小川町の目貫の場所に、學生對手の電車料理なる者を開業して、頗る大入繁昌を極めた。電車料理とは、何を食べさせる所かといふに、これは安價な洋食屋で、豚カツ、ビーフテーキ、オムレツ、ハムサラダ、麥酒、コーヒー、アイスクリームなど、客の需めに應じるばかりか、其の値段は、片道と往復の二種類に限られてゐた。

電車賃の片道は三錢、往復は五錢である。こゝが電車料理の狙ひどころで、先づ片道なら三錢、往復なら五錢を拂つて切符を求め、さて座席に着いて品目を檢べ、欲する品物を註文する。

併し片道の材料は、殆ど豚肉の一點張で、アイスクリームの如きも既に半ば融けかゝつて居る。これは聊か迷惑なので、

「このアイスクリームは融けてゐるではないか、融けてないのと取換へて貰ひ度い」

などゝ云はうものなら、先方の出やうが又振つてゐる。

「それでは往復券をお買ひなさいませ、往復のは融けてゐませんよ」

そこで五錢の切符を奮發してみると、いかにも今度持つて出るのは、たしかに融けてゐないといふ有樣。

アイスクリームといへば、夏季に限られた食品である。ところが年中いつ行つても、必ず食べさせるといふ店が、銀座の中程に只一軒出來たのは、明治も大分末の頃であつた。

話代つて日露戰前兩三年のこと、或眞夏の頃に、帝國ホテルで何かの宴會があつて、食後に出たのはお定りのアイスクリーム、見るからに固さうで、二三時間は、十分保つらしく思はれた。そこで一人の客が、

「これは旨さうだ、子供への土產に持歸らう」

と、そのまゝナフキン紙に包んで、そつと袂の中へ忍ばせて置いた。當時はまだ電車も無かつた時代で、開園したばかりの日比谷公園を突切つて、赤坂方面の自宅へ、友人と二人づれで、足を急がせてゐた。

時は丁度午後二時頃、まだ樹木の小さい公園の中には、日を遮るだけの木蔭もなく、帷子の袂に祕められたアイスクリームの、どうして元のまゝの形を保たう。たうとう融けて袂の端から、ポタリ〳〵と垂れ出した。譯を知らずに後をつゞく友人は、此の異變に吃驚して、

「オイ○○君！　君の袂から黃色い汁が垂れてゐるよ、どうしたんだ、何だ！　何だ！」

と、頓狂な聲を張上げて注意を與へると、流石に其の當人、いさゝかてれ氣味で、

「さうか、こりや失敗つた、土產のアイスクリームが融けたんだ、こんなことならホテルで食べてしまへばよかつた」

「なアんだ、アイスクリームか、僕は又そんな事と知らないから、あまりの不思議に吃驚したよ、

さうか、さうだつたのか」

と、はては二人共腹を抱へたものゝ、一旦ぬれた袂は、なか〳〵乾きさうもなかつた。

また、これより曩數年、硯友社員の會合が、萬代軒で催された時、初めて洋食を食べさせられた一人、何でも紅葉山人は、有名な食通だから、此の人の作法を見てゐて、何も彼も其の通りにすれば先づ間違はあるまいと、默つて見てゐたところが、次々に運び出される料理に、ソースをかけて始末をする。

よしそれではと、最後に出たアイスクリームに、逸早くソースをぶつかけたから堪まらない、所謂九仞の功を一簣に缺いて、折角甘いクリームを、わざ〳〵鹽つばいものにしてしまつた。

こんな話も現代の人に聞かせたら、或は一笑に附せられるであらうが、併し事實は何所までも事實で、決して誇大な逸話ではない。

話はつひ横道に外れたが、此の當時の大通りは、さして往來も頻繁ではなく、日本橋の欄干に倚つて、ぼんやり水面を見下しながら、泥の中の鰻を引かける漁夫の手際に、時を忘れる者もあれば、神田邊の大通りを、庇の高さの二輪車に乘つて、ガタ〳〵走らせる商家の若主人もあつた。これが萬一、方向を誤つたら、それこそ向ふ側の屋根のあたりに、頭を打つゝけるかも知れず、洵に危險千萬の道樂であつたが、只此の一事に徵しても、大通りの往來の有樣は略想像に難くはあるまい。

さうかと思ふと、やはり神田邊の、さる下駄屋の思ひつきで、足駄の齒に鐵を張つて、履いても〳〵減らないといふ、最大德用の高足駄を賣り出したが、もしこれに踏まれようなら、五本の指はちぎれてしまふ、さうした事故も亦實際に起つたので、これは間もなく其の筋から、製造を禁止せられたこともある。

また此の時代は、未だ今日の如くに、自轉車の利用も極めて少く、偶〻これに乘る者は、いはゆる尖端を行く人に限られ、一般商家の丁稚小僧等は、すべて萌黃の大風呂敷に、重い品を背に負ひながら、可なり遠方まで徒步で用達に出たもので、眞夏の頃の上野や芝の綠樹地帶は、又これ等の勞務者のよい休憩所ともなつたのである。

尤も大量の貨物だけは特別の函車を利用するか、又は車力に依つて運搬する外なく、隨つて時間と勞力の失費は夥しいものであり、殊に地方から、始めて上京する者は、大きな柳行李の手荷物を持つて來るも、宿所へ配達の便も思ふに任せぬので、勢ひ人力車の厄介にならねばならぬ。

假に新橋驛に着いたとして、先づ相當の時間を費し、辛うじて手荷物を受取つた上、構内の一部に出張してゐる人力車切符の賣場に行つて、自分の行先を告げて切符を手に入れる。それも雨天の際などは、一度に降車客が殺到するから、押し合ひへし合ひ、喧嘩腰になつて先を爭ふといふ有樣である。

かくて人力車取締の親方の指示によつて、自分の乘る車が定められ、やがて目的地に着いて、切符面に記される代金を支拂ひ、ホツと一息つくのが普通である。若し又これに反して、世にいふ朦朧車夫の口車に乘らうものなら、忽ち田舍漢と睨まれて、方外な賃錢を强請されるといふ危險さへ敢て少くはなかつた。要するに電車の未開時代の東京市は、何所へ行くのにも、一々人力車に依らねばならず、爲に人力車は、交通機關の唯一代表者であつたと見るべきである。

第六節　下宿屋生活

學校に通ふ學生、獨身の勤め人、又は一家を構へ得ぬ安月給取と云つた階級は、下宿屋に起臥して何年かを過したもので、今私の經驗を基礎として、其の消息を描いて見よう。

謂ふに當時の學生の大半は、其の通學する學校の關係にて、神田駿河臺から錦町界隈、さては本郷の大學附近の町々に下宿を求めた。爲に此の兩區の如きは、一歩横町へ入つて見れば、それこそ軒並に御下宿何々館、何々樓と、御堂形の四角な瓦斯燈——實は石油ランプの燈軒をかゝげ、多きは十數室、少きも數室を區劃して、數多の學生を宿泊させてゐた。

これ等の下宿の中でも、特に高等下宿の看板を出せる家は、間代も食費も共に高價にて、隨つて其の待遇も惡くはなかつたといふが、普通一般の下宿屋では、四疊半、又は六疊を限度とし、これに朝夕の二食付、風呂は一週二度前後、ランプの石油代に勿論先方持ち、一切を引つくるめて、一ケ月七圓から八圓といふ所が、先づ通り相場とせられた。

偶〻來客があつて、座蒲團の足らぬ場合は、一枚五厘の賃料を取られ、茶は急須に一杯一錢、炭は一笊拾錢、餅菓子ならば拾錢も買へば、菓子器に堆く積まれたものゝ、これは天引二割を規定するので、正味八錢の品物である。

さて、肝腎の食料はといへば、極めて粘り氣の乏しい蘭貢米である——假にこの飯粒を利用して雜誌などの帶封をするのに、貼る傍からパクンと剝がれてしまふのでも、其の品質の粗惡なことが知られる——朝食は豆腐の味噌汁、燒海苔に香の物、極めて稀には鷄卵一個の特配もある。

腹を空かして歸宿すると、もう夕飯が待つてゐる。これは生魚の煮付に他一品といつた所で、其の生魚なる者は、一般家庭の惣菜としても殆ど見向かれない牛の舌、俗にいふ舌平目か、さなくば淺蜊のむき身一皿と云つたもの、當時殼付の淺蜊ならば、一錢も出せば五六人前の汁の身には十分であつたから、むき身とはいへ高の知れたものであらう。勿論それで腹は十分に張るのである。

また日曜日など、少し寢坊をしようものなら、湯か味噌汁か、其の限界の分らぬやうな薄くて冷たいもので我慢をしなければならぬ。早く定時に起きた人々に出した後は、味噌を加へずして水をさしたものらしく、隨つて味噌はお椀の底に澱んで、上水は綺麗に澄みきつて居る。

何れの下宿屋でも皆一樣に、戸口の上方には、漆塗の小形の木札に、在宿人の縣名族籍氏名をば朱書きにして麗々しく連掲してあるから、それを目印にして、互に訪ひもし訪はれもする。時分どきには客膳なり、或は鴨南蠻、又は種物の饂飩なり、對手の好みに應じて振舞ふものゝ、これとて最高八錢、最低二錢五厘の程度で足りる。

下宿料は毎月末に、宿の頭番が辭を卑うして、詳しい計算書を提出するから、一應それを改めた上で支拂へばよい。ところが中には何の彼のと、樣々に御託を並べて、二月分も三月分も滯らせ、擧句の果に隨德寺をきめ込む者も、亦絶無とは云へなかつた。尤もかういふ不良分子は、身の廻りの荷物なども、比較的簡素なのが常で、下宿屋としても、家財の少い客人には、初めから警戒をするものゝ、被害の根絶は期し難いと聞いてゐた。

ところで、さういふ不良分子に對しては、住所、氏名、職業までも明細に記して、組合全部に內報することになつてゐる。それで何れの下宿屋でも、帳場の一邊にそれを張り出し、絶えず用心を怠らなかつた。又客の方にしても、一旦此の制裁を受けたが最後、銀行の當座取引を拒絶された商人同樣、何所へ行つても對手にされなかつたものゝ、圖々しい此等の分子には、又拔け道もないことは無いと見えて、寧ろ其の常習者さへ現れるに至つたとか。

當時はまだ、呼び鈴などゝいふ便利な物は無かつたので、用事のある場合には、手を拍つて女中を呼ばねばならぬ。掃除なぞで忙しい時には、返事ばかりでなか〳〵來て呉れない、今けても二階の隅の奥まつた所に室を取らうものなら、これに相當の不便を感じるので、同じくは日當りのよい便利な室に住みたいが人情、そこで自分に當てがはれた室の、どうも氣に入らない場合には、豫め番頭に申出て、これ〳〵の室が空いたらと賴んで置けば、二三ケ月の間には必ず入替りがあつて、その機會に案外住み心地のよい室へ、引越すことも容易であつた。

さて日曜日の下宿屋に、定まつて訪れ來るのは他でもない、小說類の貸本屋と、洗濯物の御用聞とである。猫のやうに跫音を忍ばせ、すうつと障子を開けて、「貸本屋で御座いますが」と、未だ其の口の終らぬに、色の褪めた風呂敷包みの荷を解きにかゝる、「此方には貸本の用はない」と頭から拒絶すると、對手は頭を搔きながら、無言のまゝで引下つて行く。全體此の貸本屋なる者は、下宿專門の商賣で、いはゆる木戸御免らしく、づか〳〵平氣で入り込んで來る。

そこへ行くと洗濯物の御用聞には、時たま此方から賴み度い用もある、「お洗濯物はまだ溜りませんか」聲に應じて待つてゐたとばかり、押入の隅に丸め込んで置いた垢染みた物を渡してやると次の日曜日までには、綺麗にして持つて來て呉れるので、これは下宿屋廻りの商賣の中で、確かに必要不可缺であつたと云へる。

日曜日の話の續きであるが、元來私の如き獨身の勤め人は、初めから賣食拔の約束で、食料の方

も一ケ月一圓の値引になつてゐるから、休日には、又何としても、外食をしなければならぬ。勤め先へ足を運べば、勿論午食を給與せられるものゝ、雨天の折とか寒い日などは、態々徒歩で十數丁――神田錦町から、日本橋本町まで、此の間には何の乘物もないので、いやでも歩かねばならぬ――を、只晝食を食べに行くのも、實は少々億劫であるが、そこは又方便なもので、つい宿の近所には、學生對手のミルクホールもあれば、又簡單なレストラントもあつて、物の半町とは歩かないでも、造作なく腹を作ることも出來る。

此のミルクホールは、溫い牛乳一合に、珈琲入の角砂糖は、自分で無制限に加味して良く、それで只の三錢、他に甘食一個を摘んだところで、高々五錢を出ることなく、更に簡易に濟まさうと思へば、一杯八厘の葛湯もあつた。

また、駿河臺下の角店に、和泉屋といふ土間の喫茶店もあつた。こゝは奥行の深い土間計りの店に、數脚の卓子を並べ、大形の硝子器に生洋菓子と時節々々の果物と、それに其の日の官報と新聞紙とが常備されてあつた。學生の方針を定める上に、官報は頗る重要視せられるもので、一杯三錢のチョコレートを、飲むのやら飲まぬのやら、わざと冷たくするやうに、手許に置きつ放しにして、官報の六號活字に目を晒してゐる青年も、亦決して稀ではなかつた。

現にかく云ふ私も、日曜日には時々此の店に出向いて、朝刊新聞に讀み耽つたもので、殊に日露戰爭の最中は、戰勝の公報はいふまでもなく、出征將士の奮鬪美談とか、諸外國の動向とか、すべて戰爭に關係ある記事を、隅から隅まで仔細に讀破して記憶に留めた。つまり戰爭に就ての知識の大半は、この和泉屋の卓上で、新聞を通じて修得したと云つても差支ない。

殊に此の店のよいことは、ボーイ達が揃ひも揃つて、極めてぶつきら棒の態度に出で、客の如何に依つて依怙の沙汰をするでもなく、それに一さい酒抜きの店で、其の營業の目的も、此の近くの國民英學會や、或は正則英語學校への、通學生を第一の顧客としただけに、其の毎晩の入退時刻を外したなら、いつ行つても、椅子は自由に占領し得たことである。

ライスカレー一皿金六錢也、これなどは先づ高價の部類に屬し、而も只の一皿だけで、十分に滿腹するといふ大盛り、卓上の洋菓子と果物とは、食べただけを支拂へばよく、山と積まれた幾種類の中から、好きな物を選り取るといふ方法であつた。

併し又何れの所にも、不良分子は有るものと見えて、つい此の和泉屋の眞向ひに、下宿をしてゐた某といふ老措大は、私も豫て顏見知りの雜文書きであるが、食べも食べたり、溜めも溜めたり、いつの間にか二十餘圓といふ大きな負債を殘したまゝ、たうとう行方を晦してしまつた。すると又これが此の界隈の評判になつて、寧ろ和泉屋の信用を高めたこともある。

丁度その頃私はまた、たまの日曜日に小川町の常盤（今の治作）に出かけて、そこで晝食を喫した

こともあつた。大分世なれたためでもあらう、乃至は懷中都合も手傳つて、大枚四十錢を奮發すと、ロースのお代りに、ざく、玉葱、燒豆腐、白瀧、紅白胡麻入の蒟蒻、三つ葉、玉菜を盛合せの大皿、別に牡蠣酢、蜜柑に新香といふ勉强ぶり、榮養價値滿點の御馳走に、忽ち腹の蟲を顚倒させる次第である。

たしか此所から宿へ歸る途端に、或水菓子屋の店頭を見ると、蜜柑とも柚子ともつかぬ、巨大な珍果の山と盛られあるに、不圖目を奪はれて、「これは何か」とたづねて見ると、「夏蜜柑です」との答へ。蜜柑といへば、秋の末から出初めて、春の末まで殘つてゐる。勿論今は其の時節ではない、成る程夏蜜柑なら時分柄、定めし旨からうと即斷して、早速一個を試しに求め、さて机に對して先づ皮を剝かうとするのに、普通の蜜柑とは異なつて、其の皮の厚さ固さ、爪を痛めて漸く外皮を去り、さて袋のまゝ前齒に嚙み潰すと、これは如何、苦味と酸味の甚だしいもので、慾にも咽喉元へは通らぬから、頗る當惑してゐると、其所へ友人がやつて來て、

「何しとるか、酸ばさうな顏ちやないか」

と、笑ひながら訊ねるので、實は斯樣々々これ〳〵の次第と、夏蜜柑試食の失敗を語り、机の下から殘りの部分を取り出して示せば、其の友人は腹を抱へて、

「何だ、夏蜜柑を食べるには、厚い袋を破つて、中味だけを取出し、白砂糖をかけるものだよ、君のやうに丸ごと口にすれば、苦いばかり酸ばいばかりで、迚も食はれたものではない」

と、すつかり其の食べ方を敎へられ、成る程さういふものかと、初めて合點したこともある。

さて私の下宿へは、例の少年博物學會の會友――「少年世界」の讀者――が、三人五人と誘ひ合はせて、よく訪ねて來たもので、何れ劣らぬ紅顏の美少年ばかり、而も其の多くは裕福の家の子達とて、年の暮になると、獨身者の正月を慰める意味もあらう、蜜柑の一函、のし餅の一臼程度を擔ぎ込んで來る。全體これ等の少年は、何のためにやつて來るかといへば、さすがに雜誌の愛讀者だけあつて、記者の書いた原稿や、それ等少年の投書が、活版に廻つて校正刷が出て、そして一冊の雜誌に作り上げられるまでの、詳しい順序が知り度いとか、又は寄稿家の噂話やら、さうした樂屋落ちを耳にするのが、卽ち主なる要件なので、この少年達の只ならぬ努力によつて、少年博物學會の基礎は固められて行つた。

それで私はまた、この少年達を喜ばせるとて、不用原稿の一部分とか、或は校正殼とか、若しくは外國の郵便切手――これも米英兩國から來る新聞雜誌に貼られたもので、其の券面も一仙二仙といふ極めて安價な平凡な古切手であつた――をさも珍しさうに三枚五枚つゞ頒ち與へると、それこそ鬼の首でも取つたやうな大喜び、嬉しさうに持ち歸つたものである、今ではこの少年達も、或は大學の敎授として、又は大會社の社長として、若しくは官途に榮位を占めて、何れも一世に名を成

して居る。

さて、夜業の勉强に倦きて、不圖時計を見れば、もはや十一時を廻つてゐる、流石に世間も森々として、宵の間の煩い雜音も絶え、頭も心も益ゝ澄んで來る。すると遠い路地の彼方から、辻占賣りの淋しい細い哀れな聲が、幽かに耳を襲ふのである。段々これが間近に來たところで、室の戸をあけて見ると、降るやうな滿天の星の下に、ぶら提灯に足下を照らして、香ばしや花林糖と、呼びなから又次第に遠ざかつて行き、遂に其の聲は全く消えてしまふ。

ランプ點火夫

さうかと思ふと時にはまた、間近の路地から、太鼓を鳴らして、火事の場所を知らせて來る、——半鐘の三打は近火、二打やゝ近火、一打遠火と大體定められ、間を置いての二打は鎭火の知らせと定められてあつた——「火事は何町で御座い！」、さすがに騷々しく呼び立てる、而もそれが殆ど毎晩、場合に依つては二回三回もある。いかにも江戸の花と云つた通り、八百八町には夜毎火の手が揚がるのである。

勿論それも遠ければ、其のまゝに眠つてしまふものゝ、近間と聞いては、流石に心も落ちつかぬのである。

こゝに又當時屋外の照明法はどうであつたか、試みに二個の圖を掲げる。卽ち其の一圖は、瓦斯燈點火夫で、他の一圖は、ランプ點火夫である、等しくこれ點火夫ではあれ、其の職務には大いなる相違を見る。勿論此の種の稼業は、電氣燈の流布につれて、全く姿を消してしまつたが、實際明治の後期までは、未だ存在もし且重要視せられたものである。

銀座八丁から京橋、日本橋、神田の大通りをはじめ、其の他いはゆる目貫の場所には、何れも嶄然たる鐵柱の見事な瓦斯燈が、一定の間隔を置いて並立する。暮色漸く漂ふ時、卽ち瓦斯燈點火夫は蝙蝠の如くに何れよりか飛び出して來る。彼の携ふる長竿の尖には、不滅の光の種を貯へ、韋駄天の再來かと疑はるゝばかりに、手練の早技を以て、次々に點火しつゝ、風を切つて遠くに去りゆくのである。

かくて街路の兩側には、柳に映ゆる瓦斯の光煌々として晝を欺き、滿城不夜の壯觀を呈するもの、一に此の瓦斯燈點火夫の奔走の結果に外ならぬ。而もこれから思へば、ランプ點火夫の作業は著して緩慢なもので肩に脚榻を荷ひ、手に石油罐と、火屋掃除の道具とを携へ、先づ午前中

瓦斯燈點火夫

に其の受持區域を軒並に巡廻して、火器の清拭と石油の注入とを濟ませ、更に夕方を待ち、只默々として點火に勤むるので、殊に此の石油の分量は、夕暮より燃え始めて曉方に盡くるので、深夜の町々は如何なる小路と雖も、殆ど全家屋外燈をかゞやかせ、幽かながらも夜の街路に光彩を放たせたのは、大都の設備亦到れり盡せりと云ふべきであらう。

第七節　上野公園の施設

東京市の、四大公園といはれる、上野、淺草、芝と、そして日露戰爭の直前——詳しくいへば、明治卅六年七月一日に開園式を擧行したる日比谷公園に就いて見れば、それ〴〵の特色あることが知られる。卽ち新しく造られた日比谷公園は、西洋式の絢爛たる花壇とか、坦々たる歩道とか、又は噴水池とか、四阿とか、總て斬新の機構の下に、市民の遊歩曳節を恣ならしめ、隨つて音樂堂の外には、一つの興行物をも見られなかつた。

また芝公園は、德川氏の靈廟と、增上寺伽藍とを中心として設けられ、園內到る處に古松老杉鬱蒼として密茂し、春花秋葉の美觀もあれど、其の幽邃なる景致は、最も夏日の散歩に適し、且日比谷公園同樣、いはゆる大衆的の觀覽物は見られず、僅かに一棟の勸工場と、苔香園といふ盆栽花卉の陳列場を存するのみ、そゞさへ來觀者まばらにて、寧ろ甚だ寂寞を感ぜしめた。

これに反して、上野と淺草とは、普に上京客の目ざす名所といふばかりでなく、少年の見學遊覽場として、唯一好適の設備を有した。而も上野は見學に傾り、淺草は遊樂に主眼を置き、二者それぞれ其の固有の面目を露呈した。

事實上野公園には、見るべく學ぶべきものが少くなかつた。例へば春は淸水堂附近の花の雲、夏は不忍池の蓮花といふやうに、四季とり〴〵に自然の美を織成し、老松古檜鬱然として都塵を遮り隨つて博覽會も記念會も、或は隨時の大興行物も、殆ど此の公園地を卜して催され、爲に都人にとりては、古くより最も親み多き境地であつた。

園內の三號館には、常設の勸工場もあり、盆栽の陳列會もあり、秋は白馬會洋畫展覽會を始め、各種の美術、工藝展覽會など、隨時こゝに催されて、觀覽者の足を繁からしめたことは、昔も今も同樣である。

由來、此の三號館は、第三回內國勸業博覽會當時の、いはゆる第三號館をば、閉會後も其のまゝに存置して、各種の催し事に利用したもので、後年其の建物の破損により、雨漏り騷ぎを起し、折角の陳列品を破損させた例もあれど、兎も角も今の東京府美術館の建てられるまで、數十年の長期に亘りて、都人には最も馴染深み多き一棟であつた。

此の三號館の、左側斜橫なる森林中に動物園があり、前面大道路の突當りに、帝國博物館——後

に、帝室博物館と改稱――が赤煉瓦の雄大なる姿を現し、更に前面の一隅にパノラマ館の聳え立つあり、更にこれに隣接して、日本畫及び工藝品の展覽會を主とする大日本美術協會の一構が、奥ゆかしき日本建築の模範を示してゐる

「少年園」の記者は、日本美術の鼓吹に努力し、これが發達を庶幾すべく絶えず報道の筆を怠らなかつた。さればこそ此の美術協會の催し事に就いても、其の實地見學を怠らず、犀利なる眼光を以て批評紹介を忘れなかつた。今試みに同誌の第三卷（明治廿二年）を繙くも、次の如き記事の掲載されあるに氣づくのである。先づ二十六號には、「上野美術展覽會」と題して、

櫻岡大日本美術協會に於て開き、繪畫、彫刻、蒔繪、陶器等の、模範的美術を蒐集したるものにて、來年の內國勸業博覽會へ出品せんとする美術家の參考に供する目的のよしなれば、蕪村、椿山、元信、古法眼、岸駒、崋山、竹田、若冲、抱一、源琦、狙仙、容齋、兆殿司、柳里恭、光琳等、いづれも諸名家の作のみにて、大幅あり小幅、御物は中央の室に陳列し、御屏風は應擧の筆にして、其左右に梅蒔繪の御棚と、菊水蒔繪の御箪笥あり、運慶作の二天王像、明珍作の銀陣立、其他種々の蒔繪具、彫刻物等皆美を極め、七寶燒陶器の類も夥しく、青磁、古伊萬里其他各種の品を陳列したり。

されば此の會は、未だ以て大會とは云ふべからざるも、一堂の中に、日本美術の精華を集めたるの觀なきにあらざりき。讀者諸君も定めて紅楓を探り、兼ねて此の美術の錦繡をも觀給ひしならん。

と記し、次で廿七號には、「彫工競技會」の景況に關して、記者獨自の意見を述べてゐる。曰く、

去月（明治廿二年十月）、彫工會が、上野の美術協會にて開きたる競技會は、進歩の評判を得たり、吾輩の一見せし時は、未だ品物も出揃はざりしを以て、玆には唯だ吾輩の眼に觸れたるもの二三に就て其景況を揭げん。

鯉地板（山中莊一郎）は、鑄物にて尺大の鯉魚が高く躍れる所、鑄物にしては出來よしと評せる人あり。銅香爐（宮尾榮助）一は桃太郎に猿、犬、雉子、鬼などを彫り、一は麒麟に龍を彫りたり。共に頗る緻密なるものなれども、少年の味方となりて觀る時は、桃太郎の方に團扇を上げざるを得ず。銅鷹匠、擊劍及び經基の彫刻（宮尾榮助）は、いづれも餘り感服せず、鷹匠の鷹は鳶の如く見え、擊劍家の襦袢の袖の短き處など講武所風なれども、面を被らざる處は又宮本武藏の時代の如し。

島村俊明氏出品の牙刻の中には、精巧なるものも見受けたれども、八重垣姫などを彫刻したるは、美術の問題にあらず、濤川惣助氏の無線七寶彩色ぼかし花瓶は精妙なるものなり。

木彫菊花双鶴（島村俊明）は、亦精巧といふべし、牙刻觀音（石川光明）、無線七寶富岳の額（濤

川惣助)、いづれも美麗なり。精工社出品鹿の屏風は、石川光明氏の作にて、刀の甚だ鋭利なるを認めたり。此の外目立ちたるもの も多かりしが、要するに象牙細工の小品多く、雄大の美術と稱すべきものは、吾人の眼中には入らざりき。吾人固より美術を解する者にあらず、故に其見る所は、全く素人考へのみ、彫工競技會は是まで衆人の縱覽を許さゞりしが、今度始めて公開せしものなりといふ。

さりながら、何年生何某作と記せる中には、異日大器となる少年も少からざるを認めたり。是れ吾輩の最も悅ぶ所にして、將に來らんとする日本美術の新時代は、是等少年の雄飛する時なり。——少年の彫刻家、請ふ明治の美術家たらんことを期せよ、明治の職工となる勿れ。

と、千鈞の重みある意見を吐露して、美術に志を有てる少年の奮起を促したる點は、さすがに首肯せらるゝ。恐らくは此の記事に因つて、美術界に精魂を打込みたる者も、亦少くなかつたであらう。かくて又廿八號には、「對柳居士是眞蒔繪繪畫展覽會」と題して、左の觀覽記を掲げ、近代の名匠柴田是眞の作品に就いて述べ、且是眞翁の性行をも記して、其の面目を躍如たらしめた。

去月(二十二年十一月)廿五日より、上野櫻ケ岡大日本美術協會陳列館に於て開きたる是眞翁の展覽會は、應擧展覽會に次で評判高く、本月四日まで日延したるは、出品の陸續申込みありて豫定の日限に陳列し盡し能はざりし故なりと云ふ。讀者諸君は、諸新聞紙に、其景況を報ぜしを以て、定めて其盛會なりしを知り、且自から其場に臨みて、一々觀覽し給ひしならん。されば玆には唯其大要を記し、多くの出品中吾人が意匠斬新、或は筆力靈活と思ひしものゝみ掲ぐべし。

四季山水扁額、高砂の圖、福女の圖、瀑布、提灯と鐘、須磨月景、月下洗馬、大黑米搗、田家早春、楓雨杜鵑、秋月待祭拜、雪中虎の四幅對、雪中鴛鴦、雲煙瀑布、富岳福祿壽、藤に駒鳥雪夜枯木寒鴉、鵜飼、群仙樓閣、田舍端午、后の雛等にて、是等は北館の中にて最も目立ちしものなりき。

就中、鬼權輕重の圖、卽ち提灯と鐘の圖は、獰猛なる鬼を描きて滑稽的の妙を顯はし、月下洗馬の意匠の雅致なる、殊に田舍端午の圖は、少年諸君の目を怡したるを知る。鵜飼の圖には、長良川の現實を寫し、群仙樓閣の圖には、人世外の理想を畫き、いづれも面白き作ならざるなし。

中央の館に入れば、此處には漆畫の美なるもの多く、盆石の圖、鴨の蒔繪、桃實の蒔繪、紫式部蒔繪、枇杷に鳥蒔繪等皆頗る精巧極致と稱すべし。尙ほ繪畫も多く、人物蕪村寫、日公月公双幅、莊子蝶夢圖、蒔繪蝶の模樣五段重、色紙蒔繪五段重、其他蒔繪の印籠、茶入器皿の類一一記載するを得ず、古代婦人屏風は優美なること花の如く蝶の如く、鬼女の大額は之に反して

雄健の筆力驚くべく、實に翁の傑作と謂ふべし。

最後の室に陳列したるは、翁が所藏の畫幅器具等にて、義董の唐人物、南嶺の畫卷、光琳の硯箱、源琦の傾城、吳春の神官、景文、呑舟、豐彦、蘆雪、一蝶、長春等の作あり、中にも翁が最も祕藏の品と聞え、又世界に一ありて二となき有名なる李龍眠の十六羅漢は、眞に奇觀と稱すべし、殊に此の畫幅は、翁が嘗て借り得られるだけの金を借り、賣り得られるだけの家財を賣り、而して貳百五拾兩の金を得て購ひ得たるものなりといひ、後に或諸侯が金千圓の禮金を添へ、貳百五拾圓に買ひ度しといひたるを辭し、又翁が會津の戰爭の時之を某に贈物とし、金千圓借りて火藥の資とし、會津の城中へ送らんとせしなど、數多の佳談を加へて畫幅の歴史を添へたれば、少年諸子は縱令其畫を見て、其妙處に感ぜざるも、其翁の歴史を聽きて、深く感激する所あるべし。尙ほ出品はやゝ差替へたれば、此の外翁の作の有聲畫も頗る多しと雖も、一々記載の餘白もなければ、略して揭げず、翁は實に近世の一大家と稱すべし。

と、筆を極めて是眞の功績を述べてゐる。卽ちこれ等に依つて見るも、上野公園に於ける日本美術協會が、矢次早に種々の催し事を以て、當時未だ幼稚なりし日本美術の發達に貢獻すると共に、これを翼贊すべく、各種の少年雜誌、就中明治二十二三年頃の「少年園」が、報道の任を全うした一事は、正に特筆に値すべきものであらう。

さて、四季を通じて都鄙の少年の最も多く集ひ來る場所は、何と云つても動物園に指を屈しなければならぬ。木立の中には丘あり谷あり坂あり細流あり、玆に一區域を形成して內に無數の珍奇なる動物を飼養し、或は鐵柵の中に、又は檻の內に、金網の中に、それ〴〵の適所を得たる諸動物を歩きながら觀覽せしむると云ふ仕組みにて、象、獅子、虎、豹、北極熊等の、巨大なるもの、獰猛なるもの、又は各種の猿猴類、鹿の類、濠洲產のカンガルー等の哺乳動物から、駝鳥、禿鷲、狗鷲、孔雀、丹頂、鸚鵡、ベリカンなど、羽毛の美なるもの、鳴聲の快なるもの、容姿の愛らしきもの、さては鰐、蜥蜴、大蛇、龜の各種など、普通一般の動物書に存するものは固より、其の名を聞いて其の實を見ぬ者、若しくは名さへ初めて見る者等、歩は一歩毎に、其の奇に驚き、妙に感ぜぬ者はあるまい。

まことに上野動物園は、少年に對して動物學上の知識と趣味とを長養する機關といふばかりでなく、一般大衆に對しても、亦多くの學問を賦與するものと云つてよい。殊に動くもの、聲を發する者を好むは、少年の天性である。上野動物園が、年中紅顏の觀覽客によつて、著しき雜踏を極める一事は、毫も怪しむに足らない。

さればこそ少年雜誌の記者は、絕えずこゝを訪問し、競つて其の內容の紹介に努めた。「小國民」第一年（明治二十二年）の記事に、「動物園の動物調べ」と題して、簡單なる調査を發表したのを始

め、年を逐うて其の詳細なる參觀記を掲げ、又は新動物の到來する毎に、逸早くこれを報道するは亦少年雜誌記者の大切な任務の一であつた。

例へば、明治卅一年頃、始めて猩々の到來した時、或は阿弗利加產の麒麟の輸入されし場合、若しくは木登り蟹（マッカン）の齎らされし頃は、既に寫眞飼版の應用も自在なりしため、これを撮影して口繪に掲げ、簡單ながら解說をも施して、讀者に速報することを忘れなかつた。

また、動物園の組織、內容、觀覽順序等を記せる單行の少年書類すら二三、世に現れたが、殊に「少年世界」は、第八卷（明治三十五年）の春季定期增刊を期して「動物園」と題する特殊の一冊を編み、これが大半を擧げて、「上野動物園」に關する記事を網羅し盡した。次に掲ぐる一節は、四十年前に於ける「上野動物園」の狀況を窺ふ上に、好個の資料たるやに想はれる。

上野動物園の沿革。（少年世界增刊）

上野公園動物園は、東照宮の北、美術學校の南の淸水谷といふ所に在ります。其所は以前卅六坊の、中の寒松院の庭園でしたが、公園に編入された後、動物園を設けられたのです。

けれども今の處へ始めて動物園を設けられたのではありません。想ひ起せば明治四年の秋、文部省內に博物局を置いて、全國から各地の產物を聚め、それを湯島聖堂の大成殿へ陳列しまして、公衆の縱覽を許しました。是を博物局觀覽場といひましたが、其前へ天水桶のやうに、二個の甕を通路の右と左へ置いて、右へは鯢魚を入れ、左へ鼉を飼つて人に見せたのです。是が抑も動物園の濫觴でありました。

博物局觀覽場では、珍しい動物なども、剝製にして陳列しました。で博物局のお役人であつた田中房實、小林常賀の兩氏が、日本橋邊へ出かけて行つて、魚類や獸類の珍しいのを買つて來て、それを剝製にして公衆に縱覽せしめるのでありましたが、明治初年の事ですから、剝製の仕方が下手で、折角聚めて來たのを腐らせることが間々ありました。それで生きてゐるものは生かして置く方が、却つて無事ですから、各自に何か買つて遣つたり、辨當の殘肴を食はせたりして、穴熊、鳶、ちやうげんぼう等を飼つて置いたのです。けれどもこれは人に見せませんでした。

すると明治六年に、墺國に博覽會が開けるといふので、日本からも出品することゝなつて、太政官の中へ博覽會事務局を設け、大藏卿の大隈重信氏が總裁、工部大夫の佐野常民氏が副總裁となつて、全國へ政員が派出して、各地の物產を聚めるやうに決まりました。それが明治五年の正月です。

此時、鹿兒島からは牛馬、琉球からは鷲、但馬からは牛、牛は兵庫の名物ですが、兵庫で產するのではありません、多くは但馬の豐國といふ處から出るのです。それで但馬の牛は、貿易上

關係があるからと、遠い所から引張つて來たのださうです。又北海道からは縞梟、しやこたん狐、鳶、鷲、馴鹿、熊などを政員が連れて來ました。

其熊には、石狩國德平のアイヌ、後に志村彌十郎と名乘つたシヤングといふのが、一緒に從いて來て世話をしてゐたさうです。

動物のやうな、持運びに不便の物すら、兎に角それだけ集つたのですから、陸産物や海産物の各地の名物が澤山集つたのです。ところで來年の博覽會まで、只仕舞つて置くよりは、人に觀せてやつた方が、爲になるだらうと云つて、墺國の博覽會へ出品しない間に、日本で博覽會を開いて、博物局觀覽場へ陳列しました。さうして一六の日に、大人が二錢、小人が一錢で見せました。

動物は平常聖堂の地内の、むかし天文局のあつた址へ、小屋を拵へて置いて、一六の日には、杏段門の兩側へ杭を打つて、それへ結へて置いて、公衆に縱覽せしめるのですが、其所へ動物を連れ出すのが餘程奇觀でした。何故かといへば、社杵に大小を差したお役人が、狐を抱いて行くと、後からアイヌが熊を引張つて來るといふ有樣で、今日から思ふと實に可笑しなものでした。

それから明治六年の春、博覽會事務局を山下の今鹿鳴館の在る所へ移して、陳列場を新設しました。動物室はずつと後の方で、間口十五間、奥行八間の建物で、縞梟、赤鷲、黑鷲、羆だけは車の附いた檻へ入れて、庭へ出してありました。動物は前に記したのよりも增して、鶴、鷺、狸、茶鳥、白鳥、緋泥鰌から兎、鼠まで居ましてして、其數八十種ほどでした。

天覽あらせられたのは、三月の未だ寒い頃で、御案内が大隈總裁と佐野副總裁で、天皇陛下は御洋服でしたが、大隈總裁は斬髪頭に烏帽子を被つて、直垂を着て、中啓を持つてゐたさうです。

是れから吾も吾もと、珍しい物を出品するやうになつて、動物も次第に殖え、又は買入れて、今日の隆盛に至つたので、上野公園に移つたのが明治十五年で、動物園は博物館と別れて、始めて獨立したのです。けれどもやつぱり博物館の附屬です。其園内も初めのうちは狹かつたのですが、第三回博覽會の時や、日清戰爭後に少しづゝ廣くして、今の通り廣くなつたのです。

監督者は理學博士石川千代松氏で、獸醫黑川義太郎氏が總ての事務に當つてゐます。其他に事務員が二人、監視が二名、是は園内を見廻つて、見物人が動物に戲れたり、食物を遣つたりするのを取締る役です。次に動物を飼ふ畜養人といふのが五人、園丁が五人、守衛が三名、是は入口で札を受取つたり、出口で番をしたり、札を賣つたりする人です。夜の當直は、以前畜養人一人限でしたが、象が時々出て暴れたので、それから二人づつ宿ることになりました云々。

（大澤自肯、天仙氏のこと）

動物園と共に、上野公園に見逃し難いものは、帝國博物館である。博物館は京都にも、奈良にも現存すれど、上野の帝國博物館は、其の陳列品も、歴史風俗、美術工藝、天産物等、あらゆる事物に亘り、眞に百科の精を合集せる一大殿堂の觀を呈し、動物園と共に、文化の促進機關として、重要の地位を占むる者である。

併しながら、動物園の内容は、總て活躍生動せる物なるに反し、博物館の陳列品は、何れも古色蒼然たる者のみ、隨つて其の彼に足を向くる少年の多きに比して、是に目を晒す兒童の少なかりしことは、亦餘義なき次第と云はねばなるまい。

明治卅五六年の交、例の少年博物學會の會員諸子を率ゐて、私は屢〻博物館の參觀に赴いた。其の理由は、此の會員中に古器物美術品及び動植物の研究に趣味を有する者多く、勢ひ博物館の美術部と天産部とに、幾時間かを費して、實地の指導に當つた爲である。

これより曩、例の高橋太華氏は、「少國民」九年の誌上に、「帝國博物館」と題して、詳細なる觀覽記事を掲げ、特に美術歴史の方面に、頗る的確なる批評を加へて、一層其の趣味を多からしめた。謂ふに斯くの如きは、氏の如き良心的記者ならでは、到底成し難き所であらう。即ち其の一節を掲げて、太華氏の蘊蓄と、非凡なる觀察眼とを窺ひ見よう。

帝國博物館（岳仙叟）

東京に遊ぶ人は、上野に上らざるなし。上野に上るものは、博物館と動物園とを一覽せざるはなし。博物館動物園は、實に東京中の一大奇觀といはんよりは、日本國中唯一の大觀ともいふべき所なり。學者より之を觀れば、學術上無限の旨味あり、技術者より之を觀れば、技術上無限の旨味あり。あどけなき小兒之を見れば、あどけなき眼を悦ばし、見世物として之を觀る老爺老媼は、見世物として面白がるべし。動物園のことは、嘗て之を本誌に記せしことあれば、余今、世の少年諸子を誘ひて、帝國博物館を一覽せんとす。

博物館は、上野山上に於ける最大の建物なり。廣小路より通ずる大通りの突當りは、正に其入口の大門にして、公園内にては、北の方に位せり。入口の大門は、元寛永寺の門にして、戊辰の役、彰義隊の此山に立籠りて、官軍と激戰せし當時を親しく目擊せしものなり。今猶其柱扉の處々に殘れる彈痕の多きにても、當時の樣思ひやらる。門外數間の左にて入場券を購ひ（平日三錢土曜二錢）、門　左方の入口を入れば、此處にて守衛あり、入場券を木の札に取替ふ。門内は最も廣し、雅致もなき西洋風の庭の中には、泉水あり、中に噴水の仕掛あれども、水の登ることは僅に二三尺に過ぎざれば、奇觀といふべきにもあらず、唯左に當れる老松は、數圍の太さありて、龍姿雲を突くとも評すべきか。

博物館は、赤煉瓦の高閣にして、西より東に長く連る。其東の隅に、別に一閣をなすは、二十三年の博覽會に參考館として新に建築したりしものゝ、今は同じく館内となれるなり。

さて靴又は草履の人は、正面の昇降口より入ること自在なれども、生憎下駄を穿てる吾等は、館の左についてぐるりと後にまはらざるを得ず。此處に下足あづかり所あれば、五厘を拂ひて草履を穿きかへ、いそ〳〵として後の入口より本館に入る。

どちらより見始むべきや、初めて此館に入るものは、先づ迷ふべけれど、敢て定まれる順路といふもなければ、右手より見始むるも、左手より見始むるも、左右の二階より見かゝるも可なり。そは己が思ふまゝなれども、余等は足順にまかせて、右の二階下よりそろ〳〵と覗きかけたり。此處に征清役の戰利品として、砲丸を多く陳列す。廿四珊の大砲丸數箇あり、其大さ格別驚く程にもなけれど、實地にこれを用ゐたらんには、此一丸にて、さしもに天下の奇觀を聚むる此博物館を、粉齏することなどは、容易なるべしと思へば、何となく恐ろしき心地もせらる。

さて第一室は古代の美術品にして、概ね模造品に過ぎざれども、模造の巧眞に迫りて驚くべきものあり、壁上に掲ぐる大畫は、法隆寺の金堂に在る壁畫の模寫なり。古代の壁畫の今日に殘れるもの、これに及ぶもの無し、高麗の僧曇徴の畫く所なりと言ひ傳ふれども、それよりは後の人の筆なるべしと好古家はいへど明かならず、兎も角も用筆雄渾にして、着想奇勁、後世の凡畫工の企て及ぶべき所にあらず。

此模寫は、櫻井香雲氏の筆なるが、金堂内は扉を開くとも甚だ暗きのみならず、壁畫は其四面の壁に最も大きく描きあることゝて、剝落もあり、色彩の分明ならざる所もあり、殊に壁面の凹凸さへ甚だしきことなれば、足場を組みて數間の上に、これを一絲一毫の違なく寫し取るには、永き歳月と非常の苦心を費さざるを得ず。聞く、氏が此畫を寫すため法隆寺の門前に下宿する間は、朝床を出づるや、金堂に入り、歸り來るや又床にもぐり、二年有餘臥床を其まゝに敷き放して、曾て之をたゝみしことさへ無かりしかば、襟のところは汗に光りて、玻璃の如くになりしかども、氏は平然として更にこれに氣づかざりしとぞ。此畫を觀るもの、亦其勞を想ふべきなり。

樓下の第一室なる古代の美術品の模造は、何れも皆巧の出來にて、其色彩といひ形といひ、眞に模造と表記せざれば見分け難きまでなるが多し。中にも、森川杜園の模作にかゝる九面觀音は、其眞物今法隆寺に在るものにて、稀代の名作なり。其丈僅に一尺五寸に過ぎざれども、面貌の壯嚴にして體格のよく整へること、實に人の手に成るものと思はれざるなり。杜園氏は、奈良の人形師なれども、其古物彫刻の模造に於ては、殆ど天下獨歩の手腕ありき。惜いかな數

年前歿せられて、今は亡き人の數に入りぬ。氏の遺作として見るべきもの、尙此外にも數々本館に存るこそ、せめてもの心やりなれ。

世親（興福寺に存り、山田鬼齋模造）、無着（竹内久一模造）の立像は、原物は塑像（土にて造れり）なるを、木彫にて模したるものなるが、丈は一丈もあらん、其容顏は實に活けるが如し。凡そ古代の製作に係れる肖像中、かくの如く能く精神を籠めて、奕々たらしむるものは、稀なるべし。維摩の像（興福寺の金堂に存るもの、運慶の作と傳ふ）、廣目天（戒壇院に存るもの、原作塑像なり）執金剛神像（東大寺三月堂に在るもの、原作塑像）、梵天（同上）は、何れも劣らざる稀有の寶物なるを、竹内氏の木にて模造せられたるなり。

其中執金剛は、五彩絢爛、新に作りしものゝ如く、更に古物を模したりとも見えざれば、見る人疑ふものもあるべけれど、原品實に此の如く、昨日造りしものゝ如くなるなり。製作の年月は明かならざれども、兎も角も千年以上のものたること疑ふべからざるに、かくまで鮮に保存せられしは、奇なりといふべし。蓋し此佛像に限り、從來祕佛と唱へて、龕中に固く封じ、決して開くを許さず、若し開くものある時は、必ず眼を失ふべしと言ひ傳へて近年に至りしを、寶物取調の時、遂に千有餘年開かざりし龕を開きて、此名作を拜し得たるなり。さればこそ千有餘年の永きを經れども、外氣に當らず、塵埃を受けず、又物に觸れざるより、殆ど造りし時のまゝにて、今日に存するを得たるなれ。塑像の今日に存するもの、戒壇院の四天、新藥師寺の十二神等あれども、其彩色に至りては、此執金剛の影をも留むるものなし。而して此妍麗なる名作を、今日に見るを得るは、國家の幸といふべし。

次室は、臨摹せる古畫を陳列す。時代を追ふものゝ如く、また必ずしも然らざるが如く、又一時代を代表する人の作のみを取り別けて揭げしにもあらざれば、此室にて日本繪畫の歷史を知るべきにはあらざれども、名品少からねば、繪心ある少年には、一二時間の樂みなるべし。

次の二室は、風俗室ともいふべき室なり。琉球、蝦夷、臺灣、暹羅、墨西哥、印度、支那、朝鮮、南洋諸島等の家具、衣服、諸道具、人形、製作物等を飾る。隨分に珍しく、奇怪に感ぜらるゝもの多し。仔細に之を研究せば、地理風俗上に於て鮮からざる智識を得ん。印度の諸器物中、貝多羅葉及び其用筆あり、印度には昔紙といふものなく、多羅樹の葉を切りて紙に代へ、それに文字を書きて用を辨じたり。卽ち釋迦の經文の如きも、皆此葉に書きつけしなり。今これを見るに、長さ四五尺、幅三四寸、固く厚く二つに折れて、其色淡褐色に光る。さてそれを紙の代りにするには、幅三寸長さ一尺四五寸に切り、一端に孔を穿ち、數葉を綴ろなり。これに書く筆は、長さ一尺許の尖鋭き針にて、書くにあらず其尖にて刻りつくるなり。

それより室を回りて、次室に入れば、歷史に關するものを陳列す。右方には釋奠の器具及び耶

蘇禁制の頃の品々あり。雨にさらけて、文字のみ高く殘れる禁札、來航の外人に蹈ませたる蹈板とて、青銅にて鑄出だせし耶蘇の像の磨り果てたる、さては十字架油畫など、いと多し。其中に政宗より羅馬法王に贈れる書簡及び支倉六右衞門の像の寫眞あり。伊達政宗耶蘇を信じ、兼ねて海外に志あり、六右衞門を羅馬に遣す。此書及び肖像ともに、今羅馬に存するものなりといふ。左方には、幕府禮式の諸道具あり、五節句に用ふる品々など、今の我等の知らざるもの多し。

次室には、古文書、金石文字、古人の肖像等珍しきもの多し。其中尤も人の目につくは、高麗好太王碑銘なり。（博物館の表記には高句麗碑とあり）、此碑は清國盛京省懷仁縣の山脈により て流れ下れる小流の傍に建てたるまゝにて、土中に埋れありしを、去る明治十五六年頃掘出したるものなりといふ。高さ一丈八尺餘、廣さ五尺六七寸、四面に千七百六十三字（四十三行每行四十一字）を深く鐫り入る。一字の大さ拳を入るべし。明治十七年或人清國よりの歸途、わざ〳〵これを搨らせて携へ歸れるなりとぞ。

此碑は、今より凡そ一千三四百年前、永樂大王の陵に建てしものにて、碑文中我が國の事を記せし所多し。當時は我が國の三韓を征服して後、屢〻將を遣はして戰はしめたる時なれば、此碑文によりて、我が國史に明かならざりし事どもの、明かになれるも少からず、其文及び其考は、史學會雜誌に菅政友といふ人のものせしことあれば、こゝには略す。

又正平版論語の古版あり、一枚の板にて、二枚分づゝを彫る。いたく蟲ばみて、今用ふべきにはあらざれども、かゝる古板の今日に殘れるも奇なり。

左側の壁には、古の名高き人々の肖像を掲ぐ。これに對しては、古人に面するが如き心地すべし。唯其表記を見るに、「定家、名高き歌人なり」「藤房、南朝に心よせし名高き忠臣なり」などと、無くもがなの事を記せるは笑ふべし。それより室を出でて、更に樓上に昇る。以下省略、

（少國民九年八・九號所載）

又「少年世界」は、曩の「動物園」に次いで、其の年夏季の增刊に、「博物館」なる一冊を發行した。これは「動物園」と同じく、口繪と記事の大半をば、帝室博物館の沿革、現狀、參觀記等を以て塡め盡し、一大文獻を成せるもの、併し何といつても當時の博物館は、其の陳列の方法、若しくは、品目の選定等、啻に玉石同架の感あるのみならず、これを總體に見て、固より不備不完の點も亦少なからず存在した。而も今日は「科學博物館」が獨立の一機關として出現し、舊博物館の天產部と、お茶水教育博物館の陳列品とを基礎とし、加ふるに幾多の新事物を集成して、動く博物館の面目を發揮しつゝあるのは、既往の事實を知る者をして、齊しく慶歎せしむる所である。

一方、天產部其の他を分離したる帝室博物館は、其の本來の相貌を發揚し、新たに國風の大建造

物中に、歴史美術に主眼を置きて、優秀なる名品のみを收藏陳列し、名實共に、日本の代表的博物館としての貫祿を保持するのは、同慶至極と云はざるを得ない。

なほ博物館の搖籃時代、卽ち舊帝室博物館の概要を、前記「少年世界」の增刊の記事に依つて認識するのも、敢て徒爾とは云へないであらう。

明治廿九年十二月廿日、東陽堂發行の風俗畫報臨時增刊、上野公園の部下、博物館の項に記されてある所は斯うである。

本館は、始め物産局假設場と稱す、明治三年九月、田中芳男舊大學南校に出仕して、時々其官員を府外の地に派出し、産物を搜索し、物産局に聚るを以て此局の濫觴とす。爾後は局宇狹隘なるを以て、十一月之を元官板所に移す。猶ほ其盛大を希望し、他日博物館を建築せんがため明治四年二月、九段坂上三番藥園を、大學南校の所管とす。

四月、物品を局中に陳列し、南校の生徒に觀覽せしむ。

五月、物産會を招魂社内に開設し、衆庶の觀覽を許す。

七月、物産會に陳列せし物品を、吹上園に於て御覽に供ふ。

九月、文部省内に博物局を置き、田中芳男を以て博物局掛とす。尋で大成殿を以て博物局觀覽場となし、物産局の物品を悉く博物局に轉移す。向に大學南校の所管となせし九段坂上の藥園を東京府に還付し、更に小石川の藥園を以て博物局の所管となす。

十月、局費の金額を定め、博物局は一月五拾圓、藥園は六拾圓とす。

五年一月、博覽會事務局を太政官中に置き、明年墺國博覽會に出すべき物品を集めんとす。是に於て諸府縣より徵致せる物品陳列の場を設置せん爲めに、金千圓を以て其費に充つ。

二月、藥園栽培の費金を定め、一ケ月拾五圓とす。同月同博覽會を開き、衆庶の觀覽を許す。

同月、天皇陛下博物局に臨幸あらせらる。尋で天文局址を博物局に屬す。五月、元大學講堂を以て書籍館とす。

七月、博覽會事務局を日比谷に移す、八月更に幸橋内鹿兒島藩邸に移す。

六年三月、博物局及び藥園の定費金額を更定し、合計百七拾圓とす。後博物館書籍館及び小石川藥園、悉く博覽會事務局と合併す。

四月、博覽會を開き、衆庶の觀覽を許す、爾來一六の日を以て觀覽の期日と定む。（以上文部省第一年報）

明治八年三月卅日、博覽會事務局を博物館と稱し、内務省に屬す。五月卅日博物館を第六局と改稱す。

九年一月四日、第六局を改めて博物館と爲し、二月廿四日内務省所轄のみ博物館と單稱、他は

地名等を冠せしむ。

四月十六日、博物局と改稱し、物產陳列場に乃ほ館と稱す。

十四年四月七日、農商務省に屬す。一月一日局を上野に移す。

十九年三月廿四日、宮內省に屬す。廿一年一月十八日官制を定む。十月廿九日學藝委員を命ず。

廿二年五月十六日、帝國博物館を置き官制を定む。同日評議員學藝員を設く。

廿二年七月廿七日官制追加、同日理事及び評議員學藝委員の定員を改む。

廿三年六月六日、總長職制中追加の件を廢す、同廿一日書記の官等俸給を定む。七月十四日技手の官等俸給を定む（以上法規分類大全）これを以て本館沿革の大要とす。

第八節　淺草公園の觀覽物

淺草公園內に櫛比林立する多くの觀覽物は、殆ど其の總てが、娛樂萬能なること今も昔も變らない。花屋敷奧山閣、十二階、江川靑木の玉乘曲藝、さては珊瑚閣、珍世界、海女の鮑採り、更に明治中期後には、ルナパークなどと云ふ新しき名稱の樂天地さへ生れ、盆と正月と年に二度の藪入日に、羽を伸ばす商家の丁稚小僧の大部分は、悉く淺草目ざして吾先にと突進した。勿論平時の人出の多いことも、斷然他の公園を壓倒した。

十二階、卽ち凌雲閣が、花屋敷の隣地を卜して、巍然として聳立したのは、明治廿三年卽ち第三回博覽會開設の直後であつた。これに關して「少年園」の記者は「其の高さ二百二十尺、巍々然靑霄を摩す、若し夫れ十二層上の高房に坐し、眸を八面玲瓏の玻璃窓外に放てば、八百八街の帝都、脚下に蟻垤の如く、關八州の山河、諸を掌に指すが如く、富士の雪、頸を延ぶれば嚙むことを得べく、筑波の紅葉、手を伸ぶれば折ることを得べしと思はる。蓋し我國古來未曾有の高閣なるべし。中には電氣仕掛のエレヴエートルを設け、步せずして昇降することを得、每層には各種の貨物舖を裝置し、客の買ひ去るに任すといふ」と、簡單ながら最大級の筆を揮つてこれが紹介を試みた。

また「小國民」第三年一號（明治廿四年一月）の、文林欄投書の中に、東京牛込の井出哲氏は「凌雲閣に昇るの記」を寄せて、曰く、「某年某月某日、來りて淺草公園の凌雲閣に登臨す、抑も此の閣は、明治廿二年十月起工し、廿三年十月、卽ち一周年にして竣工せり、其形直立八角にして階數十二、高さ二百廿尺、煉瓦を以て重疊し、殆ど雲を凌がんとす、實に東京第一の高閣たり、故に凌雲閣と名く。其中心に電氣器械を設置し、凡そ廿人を上登せしむるに、僅々一分時間にして、下階より八階に達す、洋名之をヘレベートルといふ。九階以上は階形螺旋狀を爲す、繞りて上階に至れば、近くは東京全市を下瞰し、家屋櫛比、瓦魚鱗の如く際涯無し。其間或は田圃あり、河川あり、深林あり、一として奇觀ならざるはなし、遠くは總房上野の諸山を迎へ、宛も一擧手之を攫し、一

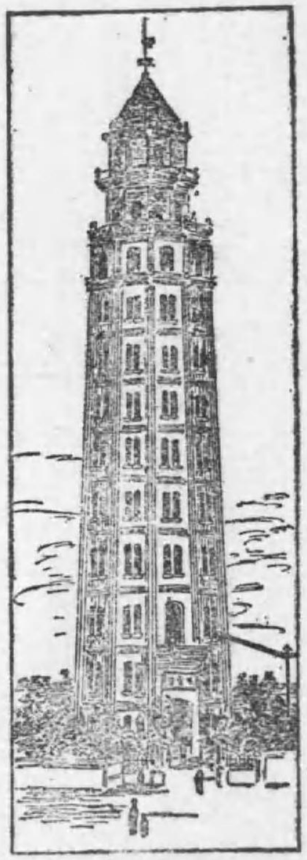
投足之を踏むが如く、坐ながらにして數里外の景色を一瞬に集むるは、此の凌雲閣を措いて他に有らざるなり、曾て高閣を以て有名なる奥山閣、愛宕館の如きも、今や此の閣上より望めば、一個の矮屋に異ならず、又毎階には、珍奇なる美術品を陳列し、雜品の賣店を其周圍に設け、以て昇客の需めに應ず、是亦一層の便益を併するものと云ふべし」と記して、未だ見ぬ地方の少年をして羨望せしめた。

かくの如く凌雲閣の新建築は、遍く都鄙に宣傳せられ、遂に淺草公園屈指の名物となり、苟くも東京見物に來りて、淺草公園に遊ぶ者の、先づ第一に登臨するは十二階であつた。

併しながら榮枯盛衰の理は此の建物にも免れず、さしもの凌雲閣も漸く命數盡き、明治の末年には、頗る危險狀態を呈するに至つた。そは此の高閣の所在地が、比較的低濕にして、且地盤脆弱なるため、一朝地變あらんか、倒壞の慘狀を惹起するは必然と見られ、これが責任者の憂慮一方ならず、此の際何人にもあれ、これを他に移座して、倒壞の危險を未然に防止する者あらば、無償讓與すると云ふ案さへ提出するに至つた。

ところが、此の建造物の主體を成す者は、安價なる煉瓦の集積にて、所謂潰し値にすれば、幾許の價値も無く、一方これが取毀ちに要する足代、人夫、運搬費等を見積る時は、無償どころか、相當多額の補助金を受けねば、間尺に合はずとの結論に達し、何人も手を着けようとする者がなかつた。

恰も大正初頭の頃、これに關して有名なる某博士は、一種奇拔の新案を提示するに至つた。即ちその案は、强力なる火藥を裝置して、一擧に根柢より爆破せしめ、其の痛烈壯快なる瞬間の現狀を一般に觀覽させ、而も相當高價の入場料を徵收して、收支を償はんとするにあつた。



凌雲閣の實寫圖

兎も角も、一時は嶄然として雲を凌ぎ、淺草公園の人氣を一手に集めたる凌雲閣も、老いては世間より厄介物視せられ、危險視せられて、其の末路の哀れさを、沁々感ぜしめたのである。

地盤の軟弱なる上に、高く聳ゆる建造物が、地震に對する抵抗力の薄弱さは、敢て論ずるまでもあるまい。果して大正十二年九月一日の大地震は、遂に此の高閣の上半部をへし折つて、見事大地に投げつけ、殘りの下半部は、無慚なる姿を、焦土の中に曝したが、これ亦災後數日ならずして人

工的に爆破せられ、こゝに跡形もなく消失したのである。

さて、この凌雲閣に隣接して、可なりの廣地域を占めたる花屋敷は、其の棟上に金鳳を附したる奥山閣を中心にして、各種の珍奇なる觀覽物と、花卉盆栽の類を陳列し、人造山水の美を凝らし、懸崖に瀑布を落下させ、溪流を通じ、池を穿ち、或は小規模ながら動物園もあり、鳥獸の剝製を列べるあり、操り人形もあり、山雀の藝道もあり、更に到る所の小屋には生人形の美しきを飾り、分けても秋は菊人形に意匠を凝らして觀客の目を驚かした。

花屋敷の動物園は、上野の動物園とは著しく趣を異にし、固より興行本位のものとて、象は喇叭を吹き、亂杭を渡る等の曲藝を演じ、其の他の一般飼養動物のためにも、種々の餌物を販賣して、看客に購ひ求むるに委せ、手づからこれを投與せしむるなど、經營上の利を計れる一石二鳥の策を採つた。

併し此の園内に、最も人氣を博したるは、ダークの操り人形と、山雀の藝道とに、指を屈すべきであらう。これ等の興行は何れも一日數回演ぜられ、其の開幕の時刻近づけば、けたたましく鈴を鳴らして、園内に散在する觀客に告知する。

此の鈴の音を耳にする人々は、動物に見入る者も、生人形を鑑賞する者も、それとばかり先を爭つて設の席に着き、場内忽ち立錐の餘地無きに至る。やがてピアノの音に連れて幕は開かれ、油繪風の書割も中々に美しく、早くも戛々たる響と共に現れ出づる者は、等身よりは稍小形かと思はるゝ人形にて、其の動作頗る巧妙を極め、眞に生きて動くかと疑はれる。猶ほこれが演出の種目には、或は骸骨踊あり、海底旅行あり、又は例の舌切雀、其の他の昔話あり、場面の變化と、活躍の巧緻とは、少年少女をはじめ、一般觀衆をして、陶醉の三昧境に入らしめねば已まなかつた。

かくて數番の種目を終つて閉幕を告ぐるや、觀衆はホツと一息つきながら、早くも次に行はるゝ山雀の藝道を見るべく、別棟の小屋の附近に走つて、開場の鈴の音を、今か〳〵と待つのである。

此の山雀の藝道に就いては、曾て高橋太華氏が自ら之を觀覽して、「少年園」に掲げたる一篇に、其の詳細を盡してゐる。左に其の文を摘錄して、一斑を想見せしめよう。

山雀藝を觀るの記（太華山人）

近者余が見たる聞きたる種々の藝の中にて、山雀藝ほど深く心を娛しめたるはなし。余は實にこれを見て、其藝の至妙神に入るに感じ、思はずも落涙するに至れり。

場處は淺草公園諸興行見世物間に介り、池に面し、凌雲閣に隣れる處に在り。五六歳の小兒群れ集へる中を押分け、髯むくつけき六尺男の大人氣なくも、木戸札買はんこと、何ともなく面はゆく、暫し躊躇つゝも、推しに推されて其内に入れば、小高き棧敷に筵を敷き、客の自由に坐するに任す。棧敷の前に細長き臺あり、高さは三尺斗り、長さ二間幅四尺もあらんか、新ら

しき赤毛布もて全面を覆へり、これ則ち山雀の演藝臺なり。

臺に面して小高き架あり、上に多くの鳥籠を竝列す。悉く朱塗にして形何れも相同じ。試みにこれを數ふれば二十二個あり、一籠に一羽づつの山雀を入る。何れも樂しげに囀り居るが中に、或は藝に倦むが如く、首を縮めて止木に憩ふあり、或は四面を眺め、羽ばたきして脾肉の嘆あるが如きあり、或は天晴我が藝を示し、人を驚かし呉れんと身仕度するが如きあり。或は獨り下稽古をなすが如く、或は藝は御茶の子、唯遊ばんと何氣なく飛びまはるが如きなど、其樣に觀て其意を推し、未だ藝に入らざるに、早くも我が心は樂しめり。

それのみならず、棧敷の周圍には、別に幾十個の美はしき鳥籠あり。大小の鸚哥、或は赤き或は黄なる、或は綠に或は紫なる、人の聲、車の音、山雀の鳴くに眞似て、己がじし鳴く樣のをかしき、實に小兒の耳目を飾るに餘りあり。

余が棧敷に上りし時は、恰も一つの藝了りて、又新に藝にかゝらんとする折なりき。愛らしげなる一人の少年、黑の紋付に袴着たるが、鳥毛の拂塵もて臺なる毛布を淸らかに掃ひ畢るや、五十近き色黑の男、同じく黑紋付着たるが、今めける言葉を、例の口上振りに使ひて、喃々と山雀藝の巧なること、これを馴養して、此に至らしむるの易からざることなど述べて、さて長さ二尺餘の木の上に、一二三四五と數字を一字づつ書ける方二寸ばかりの紙を順よく並べ、臺の一方に籠のまゝ、山雀を据ゑ「何の字にても指圖し給へ、山雀は明らかにそを聞き分けて、必ず其札を取り申すべし」と曰ふに、棧敷の中より一人の小兒、「四の字四の字」と呼ぶ。折しも洋服着たる三十五六の男、臺の彼方に立ちて、「さらば四の字を取らせ申さん」とて、靜に籠の戸を開けば　山雀はチョコ〳〵と歩み出でて、臺の中央に來り、客に向つて立留れり。これ初見參の禮する所なりとぞ。

「それ四の字だ、四の字を取つて御客樣の御目にかけよ」と命ずる聲の下に、彼は身を轉じて彼の數字の紙を載せたる木の上に登り、左右を眺むるや否や、嘴もて先づ一の字の札を拂ひ除け、次に二の札を拂ひ、三の札を拂ひ、さて四の札に至りて、これを輕く銜へて其まゝ眞直に我が籠の中に飛び歸れり。

されど是等は物の數にもあらず、次には卜筮をさせて驚かし申さんとて、別なる鳥籠を出し、一より十までの文字を書きたる扇を取り、「此中何れにても隱し置き給へ、そを卜はせ申さん」とて、閉ぢたるまゝ見物の中に出せば、又其一本を取るものあり。やがて筮竹算子をかたの如く中央に整置し、其籠の戸を開けば、山雀小足に歩み出でて、先づ嘴もて筮竹を彼方此方に散らし、散らし果てゝ後、自ら小箱の蓋を開き、算子を取り出し、縱横に亂して後、先づ籠に歸れり。正にこれ筮して卦を得、變を知り、默然として其判斷を考ふるの時なるべし。

「さらば愈〻判斷を下せよ」と命ずるや、勢よく籠を出でて、數字を書せる小さき紙札の處に至り、一より順位に取り除き　五の札を銜へて再び籠に戻れり。先の扇を檢れば　隱せしもの果して五なりけり。此鳥滿場の喝采に得意　羽搏して、元の架上に持ち去らるゝや、更に又次なる鳥籠は臺上に出づ　臺の上三尺斗りの高さに細き一條の綱あり、それに小さき梯子を懸けて、籠の戸を開けば　山雀は我藝を見よかしといふが如く、梯子の第一段に立ちて、四面をキョロ〳〵と眺め、「いざ梯子を昇りて」のかけ聲に從ひ、傍に奏づる俗樂の調子につれて足を運び、忽ちに　て綱の處に達す。此時鳥使小さき蛇目傘を與ふるに、嘴もて其柄を受け、早く進めと命ずれば早足に進み　止まれといへば直に止り、廻れといへばグルリと廻り、或は傘を足に支へて傍を望み、或は羽を振つて下を見下すなど、意あるが如く意なきが如く、其愛らしさいふばかりなし。かくて緩急疾徐、悉く鳥使の言葉に從ひ、綱の上を往來すること二三回にして梯子を下り、遂に我が籠に歸り去る。

余此諸藝の巧なるに驚き、我を忘れて餘念なく眺め居たるに、藝は次第に變りて次第に興を加へ、遂に最も驚くべき一新劇を演ずるに至れり。そは則ち山雀の競馬なり。競馬は此藝中殊に彼等が苦心して教へたるものと見え、例の口上は、得意に得意を重ねて、鼻うごめかしつゝ、最もこれを誇稱せり。誇稱するも道理よ、藝の妙は十分彼が誇稱に價するに足れり。

即ち先づ其競走の道路として、臺の上に三條の板を敷けり。板の長さは一間半餘りにして、一方より高きこと二寸許なり。さて其一端に赤き白き幕もて圍める假屋を置き、上に各國の國旗に擬して、小旗數百旒を飾り、內に三個の籠を入る。又他の一端には三本の旗を樹つ。旗の中央に最も小さき旗を横に挿めり。速く此處に達して、此小旗を銜へ歸るを勝とするなり。此の如く裝置既に成るに及び、三頭の駿馬は小舍の前に露はれ出でぬ。如何なる馬かと見てあれば下に小車をつけたる張子の小馬なり。若し其上より手綱を引かば、路は自然に傾斜せるが故に馬は次第に進み行くべき仕掛になり居れり。

かくして馬の出づるや否や　鳥使は三つの籠を開けば、三羽の山雀、勇みに勇みて、馬の背に飛び乘り、各〻其手綱を嘴もて引くこと甚だし。鳥使馬の足並揃ふを見て、相圖の旗を取り擧ぐれば　山雀は同時に馬を驅りて驀地に進み行く。或は先きなるもの後れ、後なるもの乘り越え、或は旗の處に近づきて中休みし、或は後を眺めて他の遲きを嘲る如き樣をし、或は最後に勝利を占めんとて進み行くなど、其狀の奇なる、眞の人眞の馬にも增して面白し。かくて遂に他端の旗の下に達するや、第一に勝ちたるもの先づ小旗を銜へて勢よく我が籠に飛び返り、第二に達したるもの少しく失望の風にて、路の中央に小休し、最後　負けだるもの、歩みながら悠然として戻り歸るなど、教へも教へたり、習ひも習ひたり、見て此に至り、余は實に茫然自

失せざるを得ざりき。

されどあらゆる藝を悉く見べきにあらざれば、半にして出でんとしけるに、此時那須與一扇の的の藝早くも始まりければ、吾足は又これが爲めに引留められぬ。乃ち一方に大なる日の丸の扇を立て、それを距る一丈許の處に、小弓に矢を番ひて立てたる玩物の馬を置き、山雀を放ちたり、山雀は直に其馬に飛び乘り、弓矢八幡那須權現を默禱するやせざるや知らざれども、嘴もて弓弦能引て兵と放てば、あやまたず、二寸に足らぬ小さき矢は、浦響く程に長鳴して走りたる鏑に達はず、扇の的にハタと當れば、扇は空へこそ揚らざれ、春風に一揉みもまれて、下にブラリと垂れたり。眞の與一の射たる日には、沖に平家舷を叩きて感じ、陸に源氏箙を敲いてどよめき、今山雀が射たる時には、滿場手を拍らして、家の頽れ鳥の驚くばかりにこれを稱せり。

聞く、昔佐野天德寺平家を聽きて、與一が扇の的に至り、落涙雨の如かりしと、今余も山雀の扇の的を見て、殆ど落涙に堪へざるものあり。蓋し天德寺は武士の情に感ずるに因るもの、余は敎へ導くことの易からざるに感ずるもの、其感ずる所は同じからざれども、涙の流るゝこと異ならざるこそ不思議なれ。此小鳥を敎ふるの容易ならざるはいふまでもなけれども、敎ふればかゝる藝をも爲すに至る、「年弱き御兒達よ、學ばずば此山雀にも及びませぬぞ」とは、例の口上が輕口より出でし言なれども、これ決して輕口者の輕口にあらず、余は此一語を古聖賢の言の如くに聽き取りて、骨に沁するばかりに感じたり。實に成立の難きは、天に登るが如し、敎育の梯子によりて僅に其望みの百分の一に達すべきも、十人の子を敎へて一人の子を得ることと難しといふ、人且つ然り、彼の山雀何者ぞ、渺たる禽中の小禽、而して敎育の效によりて成立彼の如し、これを思はゞ、誰か忸怩として愧ぢざらんや。余が感涙の拭ふに堪へざるも亦宜ならずや。

抑も山雀の我國に飼養するは、何れの時に始まるや、得て考ふべからざれども、飼籠鳥にも其飼方あれば、貞享頃には、既に飼ひしこと疑なし。又此鳥は支那にあるや否や知るべからざれば、其漢名も亦明にし難し。或はこれを義禽と書くものあれど、そは西山拙齋の義禽行に基くものにて、やまがらの漢名にあらざることは「喚子鳥」にあり。山雀の字は太平記に出づるよし同書にあれど、何れの卷といふことを知らず。

さて又藝を敎へて、今日の如きに至れるは、決して近年の事にあらざるべけれども、何時頃よりといふこと明ならず、三十年前江戸の市中に、山雀を利用して博突すること流行したるよし聞けど、そは戊辰の後までも行はれしものか、目擊したりといふ人少からず、されども余が見たる山雀藝は、七八年前と今回との二回に過ぎず、七八年前にこれを觀て驚きしことは、今日

よりも、亦甚だしかりしが、其藝の精妙を比すれば、夐に今日に劣れるが如し。蓋し彼の小禽、七八年前の功を積みて進歩此に至るか、余輩獨り昔時の態を改めず、果下の阿蒙依然として此舊知に逢ふ、感殊に深きを覺ゆるなり。（少年園第百三十二號掲載）

却説、若し夫れ「花屋敷」を、動物園に比すれば、「珍世界」は、博物館の天産部ともいふものであらうか、尤もこゝは單に奇を好み、怪を喜ぶ低級の觀客を吸收する目的なれば、其の陳列品の大部分、否恐らくこれが全部は、殆ど擬作物か、又は變造物のみにて、世にいふまやかし物によつて充たされてゐた。

隨つて、陳列場内を幾分薄暗く工夫し、且防腐藥の臭氣鼻を襲ひ、入場早々一種の妖氣をすら感ぜしめた。例へば、怪ミイラなる者の、丈なす黑髮をふり亂して、首を垂れつゝ蹲踞するあり、或は人魚の乾物の頭を擡げて泳がんとするあり、其の他貝中に佛體の現はるゝ者、奇形なる動植物、及び幽靈、屍體變相の怪畫など、凡そ此の世の中に、珍とし奇とするものゝ一切を網羅し、これにさも眞面目らしき説明を施して人目を愕かしたものである。

されば「珍世界」は、專ら好奇を主眼とし、教育上、若しくは學術上の參考に資せしめるが如き者ならず、「珍世界」の名と實とを、遺憾なく表現せるに過ぎなかつた。或時、動物標本社に對し、乾製人魚の修繕方を依頼する者あるを聞き、即ち就いてこれを一見するに、暗所に眺むればさまでにも無き製品も、一度これを明るみにて點檢する時は、いやはや缺點だらけのいかものにて、猿の骨肉を乾製にして腹部以下を切斷し、これに大鱗の魚の下半部を張合せて、まんまと一體に假作したるもの、只其の接續部は、流石に苦心したかに思はれた。

只この一個のまやかし物を見ただけでも、他は推して知らるべく、珍世界は寧ろ僞世界に過ぎなかつた。されば世人も亦漸くこれに愛想をつかしたるか、いつともなく此所も亦、活動館に變貌して、跡を晦し去つたやに記憶する。

これに稍遲れて、新しく現れ出たるものはルナパークである。こゝは勸工場と花屋敷とを兼ねたるものに近く、特に兒童の娯樂機關として、或はメリー・ゴーランド、鞦韆、辻り臺、展望臺までも設備し、喫茶店及び簡單なる食堂もあり、名物ルナ饅頭を賣り弘むるなど、一時は人氣の中心を爲した。

全體、このルナパークなる名稱は、何から取れるものか、當時これを知る者なく、はては新聞の端書便りに質問を提出する人さへあつたが、或物知り男の投書に、ルナは月――即ち月の花園であると解釋したので、成る程さうかと、これで意味だけは通じたものゝ、兎角新奇を好める人心に投ぜんとする結果、かゝる不可解の名稱を選ぶに至つたものか。

何れにしても淺草公園の興行物が、時代のはげしい波につれて、急速遷變推移を示したのは爭ひ

得ない。卽ちパノラマも珊瑚閣も、珍世界も玉乘りも、さては海女の鮑取りも、明治末より大正初期に入るまでには、殆ど殘らず消滅して、其の一つだに影を留めず　六區の總ては活動寫眞一色に塗り潰されてしまつた。併しこれは只單に商利を逐はんとする興行者の往くべき當然の道といふべく、そこに上野と淺草との間には、大いなる相違點のあることが認められるのである。（完）

少年文學史批評及び書簡

○東京日々新聞。（松原至大氏）　今は惜しくも消えてしまつた博文館の少國民雜誌「少年世界」が故巖谷小波氏を主筆として華やかであつた頃の名記者、木村小舟氏の名も、今日では少國民のための讀物に携はる人たちの中でさへ、知つてゐる人は少いであらう。氏が同誌の記者となつたのは、明治卅三年とあるから、氏の少國民文學への關心は、五十年近くにもならうか。その間の蘊蓄を傾けて、まづ上梓されたのが、この度の「少年文學史明治篇」の上卷である。徒らに作家ばかり多く、殆ど見るべき史的考案のないわが國の少國民文壇において、その人となりからも、また資料に接近されてゐる點からいつても、その推移を語るに、氏ほど惠まれた人はないであらう。

初めてはつきりと少年少女を目ざし、明治廿一年に、故山縣悌三郎氏が主宰して創刊された雜誌「少年園」の前後を搖籃時代として、「少年世界」第四卷の明治卅一年までを隆盛時代として、四篇に亘つて少國民のための雜誌、單行本の殆どすべてを解說してゐる。所々にその氏卷を引用して、隨所に今日各方面で活躍してゐる人たちの名を擧げたことは、この人がかつては少國民文學に携つてゐたのかと思はせて（例へば本社の社長奥村不染氏の如き）、一つの讀物としても、興味の盡きぬものがある。

○日本讀書新聞。（柳田泉氏）　木村小舟氏の「少年文學史」が、いよ〳〵上下二卷完成することになつたのは、基礎的文獻をかいてゐた明治以來の少年文學の歷史に大きな建設の礎石をするゐ

たものとして、わたしどもの方からいふと、近ごろにない喜びでもあり光明でもある。慾をいへば下卷は二冊としてなほ一層の精細な敍述をしていたゞきたかつた。

四六判三冊千三百頁となつては、讀むに大變だと考へらるゝ人々もあらうが、文學史とはいへ、敍述の案配は極めて巧みであり、文章は勿論暢達、それに幾多の寫眞の助けもあつて、あくまでも面白く讀過することが出來る。だから二冊が三冊になつても、樂しみが多くこそなれ、少しも苦になるところはない。且つは時代としても、下卷のあたりは、十分二冊にして可いところであつたと思ふ。

材料の正確かつ豐富といふことも、この書を無比なものにする特色の一つであるが、それよりも何よりも、著者木村氏の生涯の經驗と情熱がものをいつてゐる。木村氏は明治以來、生涯をかけて少年文學に生きぬいて來た人であり、少年文學に情熱を傾けて來た人であり、いはゞその道の元勳といつてもよい。この經驗と情熱のあふれ出てゐる點こそこの書の生命ともいふべきで、この書に大きな價値が與へられるとすれば、それは著者のもつかういふ資格が與つて力があるのだ。わたしは、今少し內容に入つていろ〳〵の賞讃すべき點を、のべたいのであるが、何しろこの狹い批評文ではそれも出來にくい。殘念だが、本書について私の言葉の眞實なことを證明していたゞくより仕方がない。

從來大人の文學の歷史では、少年文學は殆ど顧みられず、傍系の傍系の邪魔物扱ひにされて來たのであるが、此の文學史によつて、少年文學は文學史的に、正しい見方を與へられ、正しい意義を發見され、正しい地位を許されたといつてよい。同時に今後の國民的建設に重大な役割を荷ふ少年文學の進路、さては目的、手法などにとつても、つよい反省と暗示と刺激をふくんでゐるものであらう。まことに近來の好著である。

○文化情報　兒童文化の重要性が叫ばれて以來、少年少女向圖書出版の隆盛は今日その極に達し、少年文學の黃金時代とも稱へ得よう。しかし今日の少年文學は依つて來るところ遠く、普通には巖谷小波の「こがね丸」によつて開かれたと見られてゐるが、明治時代の少年文學が、如何にしてその道程を切り拓き、如何なる經路を辿り、更に大正昭和へと進步發展したかは頗る興味ある事で、しかも明治のそれは遠く過去となり、當時第一線に活躍した人々も次第に世を去り、盛行した圖書雜誌の類も漸次湮滅せんとし、今日においてこれが記錄をとゞめ置かなければ、永久に消滅し去るの運命にある。

木村小舟氏は、巖谷小波門下の記者として又作家として、明治時代の少年文學界に活躍、現在なほ矍鑠として筆を執つてゐるが、これに思をいたし、昨年十二月八日の米英との開戰の日より明治少年文學史の著述にかゝつてゐたが、稿成りいよ〳〵「少年文學史明治篇上卷」が、童話春秋社より發行された。上卷は搖籃時代、進展時代、躍進時代、隆盛時代に分たれ、得難い資料と珍しい寫眞に盛られ、著者は「私一個の見聞と經驗によつて記した極めて狹範圍のものであるが、他日正確にして完備せる兒童文化史の編まれる日、いく分の參考資料となれば幸」と稱してゐるが、かゝる文學史の執筆者は、現在においては著者以外に其人なく、少年文學史としてまとまつたものはこれが最初であり、注目さるべきであらう云々。

○同　上　本書は上篇の後を享けて、明治卅二年度に筆を起し、進んで明治四十五年より大正の初頭にまで及び、前後約十五年間に於ける少年文學上に於ける主なる事項、なかんづく書籍雜誌類の刊行を、年序を逐つて解說せるものである。明治の少年文學界は、幾多の受難時代を經て、毅然としてこれに耐へ、忍苦十數年其後大いに酬いられて今日の成果を得たものであるが、本書の著者も長き間直接その苦難を嘗め

て、少年文學育成のため健闘せる勇將であるから、敍述的確にして自ら精彩あり、讀む者をして興味を感ぜしめる。

○塚原健二郎氏　拜啓、毎日きびしい暑さです、益々御健勝の御様子お慶び申し上げます、さて、このたびは、御近業少年文學史をお頒ち下さいまして有りがたう存じます。當然出るべきものと思つて居りましたところ、計らずも、あなたに依つて遂ひに完成しまして、後からくるものを益するところ大きなものがあらうと思ひます。私などまだ生れる前から　少年文學の歴史が、御著によつて、實に明瞭に看取され、懐しくも愉快にも感じました。永年に亘る御研究の成果が、この大事業を完成させたのだと思へば　本書が、大東亞戰爭下に出版されたことも偶然ではない氣がいたします。深く敬意を表する次第です。

尚、私が府中の町でさがしあてました露伴の眞西遊記もお役に立ちましたことは非常な喜びです、尚せい〳〵珍書をさがしたいものと思つて居ります。取り敢へずお禮迄（七月二十日）

○柳田泉氏　拜啓本日は木村先生の御高著御惠送賜はり誠に有難く存じ奉候、木村先生は小生等も少年世界時代隨分御啓發をうけたる方にてその後美術研究に沒頭いたされつゝありとのことを人傳に伺ひしことあり候が、今回の御高著は少々意外に出で候と共に嬉しき限り　御座候。明治文學の研究につれ、少年文學の方もいろ〳〵と編述めくもの有之候やうなるも、基礎的歴史なきため十分に往きかね居候様子、然るに木村先生の此の度の御高著は、此の點にて實に十二分に此の不足を滿足させたるものと愉快不絶候。資料の豐富もさることなれども、それよりもその御體驗追憶を十分に織り込まれたるところ誠に大切なる次第、歴史とせず單に讀物としても、近來なき面白きものと存じ奉候　折柄少々多忙なりしところなれど萬事をさし措き拜讀仕候。呉々も先生によろ〳〵く御禮願上候敬具。（七月廿三日社宛）

○槇本楠郎氏　拜啓。猛暑の砌、相變らず御健事の御様子、お慶び申上げます。御芳名を承りながら、小生二三年來病弱のため蟄居仕り、御拜眉の機會を得ず、失禮してゐます。さて本日、童話春秋社より貴著「少年文學史」明治篇上卷の御新著を拜受し、貴臺　御眞摯な御精力的な御仕事に對し、心から敬意を表しました。まだ目次や序文を拜見したに過ぎませんが、貴臺はこの歴史の中に生活された得難い方で、從つて資料も豐富その御觀察も行屆き、洵にその人を得た立派な御仕事だと存じました。小生も七八年前から、日本に一冊も兒童文學史のなき事を歎き、其著述を企圖して來ましたが、まだ充分の資料を蒐集し得ず、また仕事の都合もありまして着手出來ずにゐますが、貴臺の御高著によつて明治期が詳細に記述された事は何よりの欣びで、これは日本文化材の尊い收得だと存じます。

私は貴臺とは一面識もない若輩ですが、かうした立派な御仕事に對して、これが完成しましたら、一夕御慰勞の會でもさせて戴いたらと思つてゐます。いづれ一度御目にかゝり御禮申上げますが、取敢へず寸書をもちまして御厚禮申述べます。時節柄御自愛の上、御健筆を願上げます。敬具。（七月廿六日）

○辰野九紫氏　少年文學史――ありがたく拜受いたしました。われ〳〵にとつて、小波さんと共に、櫻桃小舟の兩御所は、未だに忘れかねるトリオであります。あれは何年頃の寫眞ですか、小舟氏の近影として、カン〳〵帽をかぶつた和服の袴姿は、二十四五歳のやうに記憶してゐます。それが六十二となられ、坪谷さんが八十一歳など、成程、小生が五十一で、四　三つの孫が二人あるのも無理はないと、あきらめ（？）られました。早く下卷を拜見いたしたく、出來ますれば　そ　上下二卷に現はれる人名の索引も望ましく存ぜられます。右御禮かたく〳〵。

（七月廿九日。社長宛）

○大橋新太郎氏　拝啓酷暑連續　折柄益御清健奉賀候。扨て先日御惠贈に預り候貴著少年文學史非常に面白く　丁度小生經營時代の博文館記事あり、一入に感深く拝見罷在候。次に甚だ粗末なものに候へども、使ひを以て粗品少々御屆け申上候間御笑納被下度、先は不取敢寸楮右迄如此御座候。敬具。（七月廿九日）

○池田宣政氏　拝呈、御無沙汰失禮申上げて居ります。過日は木村小舟先生著少年文學史御惠與下され誠に有難く深謝申上げます。小生二ヶ月前より病床にあり、恢復期となりて毎日退屈に困り居りし際に此〻名著を拝受、非常な喜びにて一氣に讀了仕りました。殊に小生は少年時代に小舟先生の理科物語を愛讀して居りましたので誠になつかしく存じました。何日か一度先生にお目にかゝりたいと存じて居ります。何れ全快の節は御紹介下さいますやう願ひ上げます。右御禮かた〴〵お願まで。敬具。

（七月三十日、社長宛）

○佐伯郁郎氏　冠省、御高著「少年文學史」御惠贈に預り誠に有難く厚く御禮申上候。先生のお話は青葉會の席上でおきゝ致したること有之、そのとき御著書としてお殘しいたゞけたら後進のものにとつて、如何に幸かと存じたる次第に候ひしに、この度その希望の實現したるは、誠に以て嬉しきことに御座候。取敢ず御禮まで。早々。（八月一日）

○清水重道氏　毎日お暑いことですがお障りいらせられずおよろこび申上げます。さて先日は木村小舟氏の少年文學史明治篇上卷御惠贈たまはり恐入りました。昨日來いさゝか閑を得拝見いたしてをりますが、流石當時の實際に携はれし著者の御經驗と、豐富な資料、乃至御記憶とが文字通り卷を措くあたはざらしめ、眞に近頃の御名著と存じました。引續き下卷、更に大正昭和篇の御刊行を待望いたしてをります。取敢へず右御禮まで。（社長宛、八月一日）

○本間久雄氏　拝啓酷暑の折柄愈〻御健勝わたらせられ大慶　奉存候。さて此度は御高著少年文學史御惠贈賜り御芳志之程有がたくあつく御禮申上げ候。誠に先人未踏の御研究と存じ候。定めし御本懷の御事と拝察いたし候。小生も明治文學史の研究に沒頭いたし居り候折柄、御高著により種々教へを仰ぎ候ごとく拝讀いたし候ことを樂しみにいたし居り候。不取敢御禮迄申上げたく、尙時節柄御自愛之程いのり上げ候。（八月二日）

○桑木來吉氏　拝啓時下益〻御清穆奉賀候。扨過日は御社發行の木村小舟氏著少年文學史御惠贈に預り誠に有難く厚く御禮申上候。明治時代の少年文學發達を、かくも豐富なる資料を以て著述相成候御努力に對し、誠に得難き文献書として有益に拝見仕り候。小生は「小國民」「少年園」時代は不知候が、「少年世界」時代より知り居る事とて、讀書中少年時代を追想致し、誠に面白く讀了致し候。先づは乍遲延御禮申上候。敬具。（八月四日、社宛）

○小島政二郎氏　前略。「少年文學史」を御惠贈に預り、御芳志の段難有厚く御禮申上候。本書はさながらに小生の少年時代の回顧も唯ならず、懷かしさ一しほに可有之、拝讀の機を樂しみに致しをり申候。右は唯頂戴仕候御禮のみ。匆々拝具。（八月三日、社宛）

○城戸幡太郎氏　拝啓、御惠贈下されました木村小舟氏著少年文學史上卷非常に興味深く且つ有益に拝讀致しました。小兒文化研究者のため多大の示唆を與へたものと存じます。厚く御禮申上げます。たゞ遺憾なことは、紙質惡く圖版の不鮮明なことです。このやうな書物にこそ良き紙を選ばれたきものです。（八月七日、社宛）

○竹内害　氏　拝啓炎暑の候愈〻御清祥奉賀候。偖而今回は御高著御惠贈にあづかり恐縮この事に存じ候。幼少年時代を聯想仕り今昔の感に堪へませんでした。少年文學に關し適切の書物無之折柄御高著に接し啓蒙尠からず有難く御

禮申上候。病臥その他にて御挨拶遅延申譯も無之候。草々不一。（八月七日）

○野尻抱影氏　拜啓その後二十年も御無沙汰してゐると存じますが、筆硯いよ〳〵御多祥で大慶に存上げます。小生は星と英文學の二足わらぢの生活を續けて居ります。突然ながら先般「東日」にて松原至大君の推薦文により御近著を知り、早速入手しまして、目下熱心に拜讀中であります　從前佛教美術關係の御著述多く、いづれも御苦心に敬服して居りましたが、この方面は近時續々と類書も現れてゐることであります。然るに「少年文學史」は全く貴下の御獨壇場であり、丹念な御考證と、年代順に紹介且つ批判せられ行く內容は、どれほど讀書界を裨益せられたことか、文字通り不朽の名著であります。

誰れしも幼少年時代に初めて貪り讀みました雜誌は大人になりましても强い魅力を持してゐるものと思ひます。小生は數年前「小國民」第二卷の合本を手に入れ、初めて讀みました號を約四十年ぶりで開きにかゝりました時、胸のふるへるのを感じました。そして幼時の幻を再び現實にした感想を「書物展望」に『たづぬるか（一石橋の迷子の碑の話に因む）』と題して寄せ、「不思議國巡回記」「學生の砦」「老萊子」其他の文や、淸親の西洋木版にも言及しました。そして其後も創刊當時の「小國民」「幼年雜誌」に一度は目見えたいものとあこがれてゐた念ひが、今回初めて貴著によりて滿たされまして體裁內容を彷彿し得た次第であります。「幼年雜誌」は一時菊二倍となり、大きな口繪で、草むらを行く大虎などもあつたと思ひます。あれなどにも對面したく思つて居ります。小國民」の第二卷・第三卷の分は驚くほど眞新しい合本を珍藏して居ります。其後　分は飛び飛びに持つて居ります。かういふ懷しさと感激とを與へて下さるだけでも貴著は有難い御本であり、小生と同じ感懷の人も尠からぬことゝ存ぜられます。

又、「少年文學」「日本お伽噺」の表紙の寫眞を見るだけでも胸がときめきました。（尙、小生だけの慾でいひますと、第一卷・第二卷には、もつと挿畫や記事に頁をさいていたゞけたらと思ひました。博覽會、天一、チヤリネは勿論結構でしたが、美濃の大地震、スペンサーの風船乘なども今から讀んで實に親切な報道であり、スペンサーなどは、立派な一記錄として役立ちます）。ともかくも貴著を繙きつゝ當時の合本を傍に開いて、村上義光の口繪などに幼時の夢を逐つてゐる小生〻喜びと感謝を申上げたく、久しぶりで御便りを致した次第であります。時下折角御自愛の上、此の大切な少國民文化史の御仕事を完成して下さいますやう切望に堪へません。心から御禮を申し述べます。敬具。（八月十一日夕）

近代の俗惡な少年雜誌に槍をお向け下さいました事は、暑氣の折正に一服の淸凉劑でありました。

○山內秋生氏　拜啓、殘暑きびしき折柄、御健勝の御事と存じ上げます。いつぞや電車內にて親しくお話を承つた以來、接面の機なく打過しました。三浦藤作君が、時々一しよにお訪ねしようと云つてくれましたが、その機會も得ず御無沙汰してしまひました。此のほどは、御著「明治少年文學史」を實に興多く拜讀しました。この種の本としては空前のものであり、知人等も皆傾讀したやうです。此間も或會で坪田、濱田、塚原などの諸君にあひましたら、小波先生が武島羽衣に贈られた文章のことなど話が出て、かういふ記錄をつくつて下さつた御努力を皆感謝して居りました。下篇になると私等も愛讀者時代ですから、一層面白くなることゝ鶴首して居ります。木村先生なかりせば、到底かうした文獻は生まれなかつたらしく思ふと、よろこびに堪へません。

此間榮一さんからのお手紙によれば、「世界お